資料

「一高昭信会」初期活動記録

――「御製拝誦」と黒上正一郎先生ご逝去前後の「昭信会日誌」を中心として――

社団法人　国民文化研究会

「一高昭信会」の創立者。左より河野稔、市川安司、黒上正一郎先生、
田所廣泰、新井兼吉。昭和3年撮影

はしがき

本資料集は、第一高等学校昭信会の創立を指導された黒上正一郎先生ご逝去前後の、昭信会の活動状況を記録した「昭信会日誌」及び「御製拝誦記録」の抜粋を中心に収録しました。

昭信会創立の事情、その後の活動については、小田村寅二郎先生が、その御著『昭和史に刻むわれらが道統』に「〝国文研〟の道統の〝初期〟を辿って」として、心をこめて丹念に書かれてゐますが、それを補ふ資料は、昭和五十七年に長内俊平氏によって『黒上正一郎先生のうたと消息』が編集されてをります。その後、平成十六年以降さらに、国民文化研究会の本部事務所に保管されてゐた昭信会関連の書類、書簡の整理を、会員の打越孝明氏（財団法人大倉精神文化研究所勤務）及び関口靖枝氏とともに進めて参りました。これらの資料は『昭和史に刻むわれらが道統』の典拠の一部にもなったものと推察されるものでしたが、整理が進むにつれて、何らかの形でその全体像を紹介することは意義のあることではなからうかと思ふやうになりました。同年九月恒例の慰霊祭後の懇親会において、これらの昭信会資料に関心を持つ会員有志の中に、資料を研究しようといふ気運が生じ、その場を設けることになりました。以来数回の会合を重ねていくうちに、「昭信会の活動記録」を中心に資料集を作成したらどうか、それは国民文化研究会が創立五十年を迎へるに当って素志、祖業を回顧する有力な手がかりにもなりうるのではないかといふ意見が起り、在京の理事の方々のご賛同も得て、本会五十周年を記念して出版することになりました。

○

本資料集は、初期昭信会の活動記録の概要及び関連の諸資料によって成ってをります。

「(一)初期昭信会の活動経過概要」には、読者の便宜に資するため、昭和四年（一九二九）の昭信会創立から、黒上先生の御病気、御帰郷、そして御逝去、先生御不在の苦難の時期の活動経過を記してをります。

「(二)『御製拝誦』」は、〝皆寄宿制〟の一高生活の中で毎朝行はれてゐた明治天皇御製拝誦行事の、拝誦した御製と拝誦者の

感想文（昭和五年四月より十二月）の抜粋から成ってゐます。

「(三)『昭信会日誌』」は、昭和五年九月十一日から十月一日まで、黒上先生御逝去前後の日誌を収録しました。

さらに、「(四)黒上正一郎先生追懐録」には、井上右近先生ほかの黒上先生の追懐録、「(五)黒上正一郎先生のご母堂（黒上住恵さま）から一高昭信会会員へのお便り」には、黒上先生ご母堂の昭和五年から同十五年までの合計百二十一通に及ぶ昭信会員に宛てられた厖大な書簡のうち、『黒上正一郎先生のうたと消息』に収められてゐない、昭和五年より同七年に至る十二通を収録しました。

最後に、昭信会創立に至る黒上先生の歩みと、昭信会初期の活動記録を中心とした関係年譜を付しました。

紙幅の都合上収録できなかった資料も数多くあります。引き続いての刊行を期待したいと思ひます。

○

本資料集は『昭和史に刻むわれらが道統』『黒上正一郎先生のうたと消息』を補ふもので、ご披見いただく方々が、具体的に、直接に、昭和初期といふ困難な時代に生きた「一高昭信会」活動の姿、会員の声を聞くことを得られるならば、編者一同の喜びこれにすぐるものはありません。

本冊子の作成に当っては、会員の鎹信弘、小柳志乃夫、打越孝明、坂本芳明、茅野輝章、野村亮の各氏にご協力をいただきました。と申しますよりは、これら各氏のお力によって成ったものです。深く感謝する次第です。また、「一高昭信会」出身の加納祐五先生（昭和五年一高御入学）には、昭信会の活動についての貴重なお話をお聞かせいただくとともに、貴重な資料をご提供いただきましたことを感謝申し上げます。最後に、㈱三光社出版印刷の石松志津枝様、川端朋子様にはたいへんお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

平成十七年九月二十四日、黒上先生ご生誕の日に

香川　亮二

目次

はしがき……2
(一)初期昭信会の活動経過概要……5
〔参考資料〕一高昭信会講義撮要（題目　聖徳太子の信仰思想と日本文化）……16
〔参考資料〕「昭信会日誌」に記された昭和五年度活動概要……18
(二)「御製拝誦」――昭和五年四月～十二月より抜粋……19
拝誦者の略歴（田所廣泰／新井兼吉／河野稔／荒瀬達也／高木尚一）……21
〔参考資料〕昭和五年の昭信会「御製拝誦」……23
(三)「昭信会日誌」――昭和五年九月十一日～十月一日……61
(四)黒上正一郎先生追懐録……87
随得隻想（抄）　井上右近　89／黒上君を憶ふ　入沢宗寿　89／
黒上正一郎氏の印象　田中寛一　91／太子の信に生きた黒上君　志田義秀　92／
黒上先生の印象　飯田義資　93
(五)黒上正一郎先生のご母堂（黒上住恵さま）から一高昭信会会員へのお便り……101
〔参考資料〕黒上住恵氏発信の書簡類一覧……118
(六)黒上正一郎先生関係年譜……i

(一) 初期昭信会の活動経過概要

昭和7年当時の「一高昭信会」会員。最前列左から田所廣泰、加納祐五、一人おいて若野秀穂、桑原曉一、一人おいて高木尚一。第一高等学校・西寮十三番の前庭にて撮影（加納祐五氏提供）

本資料集は、昭和五年五月から十二月にかけての「一高昭信会」の「御製拝誦記録」及び昭和五年九月の黒上先生ご逝去前後の「昭信会日誌」の抜粋を中心としてゐる。昭信会活動については時代背景も含めて小田村寅二郎先生の御著『昭和史に刻むわれらが道統』をご覧いただきたいが、ここではそれ以外の資料も用ひて、初期の昭信会活動経過について簡単に振り返っておきたい。

一、黒上先生による昭信会の創立とその研究・指導

黒上先生の御指導により、第一高等学校（一高）に昭信会が創立されたのは昭和四年五月であり、当初の参加メンバーは、田所廣泰、新井兼吉、河野稔、市川安司の四氏（いづれも当時二年生）であった。

このメンバーが黒上先生と出会ったのは、前年**昭和三年**の五月、入学間もないころに参加した「一高瑞穂会」（大正十五年二月、一高教授沼波瓊音氏創立）主催の黒上先生の「聖徳太子の人生観と日本文化」と題する連続講演会である。当時、黒上先生は数へ二十九歳。この講演会には二十名の新入生が参加したやうだが、そのうち四名が先生と深い師弟関係を結ぶことになったわけである。その後、早速、八月の夏休みには新井兼吉氏が徳島の先生を訪問してゐるが、その後、八月十九日から十一月十七日までの三ヶ月間の黒上先生から新井氏向けの〝うたと消息〟は残されてゐるだけで十四通に及んでをり、如何に濃密なつきあひが展開されたかが窺へる。

黒上先生は、この初秋の頃、徳島県の撫養（むや）に療養中のその生涯の友人、梅木紹男（つぐを）氏（一高出身の東大生）と精神団体の設立につき計画を練ってをられ、夜更けまでその話しが尽きなかったといふ。先生は、十月に一度上京して四人の一高生と鎌倉旅行をされ、さらに十一月末に上京されて、頻繁な交流の時を持たれた。この時期、執筆活動も本格化されてをり（『国語と国文学』昭和四年二月号より「聖徳太子の人生宗教と国民精神」掲載開始）、まさに眠る間もなく、激しく活動を展開されたのである。

後年の昭和五年の正月、田所氏の家に四名が集ったとき、既に先生はご病気で徳島に帰省されてゐたが、新井氏は、当

時のことを偲んで、

こよひわれら四たりつどひてをととしのしげきつどひをしのびけるかな

五つたりのひとつ心に一つ鍋かこみて語りしをととしの日よ

と詠んでゐる。先生を交へて五人の若い青年が連日のやうに会しては、聖徳太子の御言葉に心を寄せ、一つ心に思ひを語りあひ、志を磨いたのであらう。

この年、黒上先生は始めて東京で年を越され、**昭和四年**の新年を迎へられた。「昭信会記事」（第一高等学校寄宿寮編『向陵誌』所載）によれば、一月三日に始めて「昭信会」といふ名称が定まり、さらに三月五日、茨城県水戸市近郊の大洗に二泊の旅行を行った。小田村寅二郎先生は『昭和史に刻むわれらが道統』に、この大洗の旅行について「『一高昭信会』を創立せしめるに至った決定的な合宿であったと想像される」と記してをられるが、昭和六年の「昭信会日誌」には「（田所氏などの先輩たちが）黒上先生と水戸に旅行して、その晩、皆でほんたうの心をうちあけて暁かた迄語りあかし、その感激はどうしてもわすれられないもので」、この為、昭信会では年一回の秋の一泊旅行が恒例となった旨、記してゐる。黒上先生歿後、市川安司氏はこの夜のことを、

常陸なる水戸の旅寝にちかひてしその夜のことも夢になりしか

と詠んでゐるのだが、その誓ひとは何であったらうか。なほ、この旅行中、新井氏には、

打寄する太平洋の波の音の消えよとばかり寮歌を歌ふ

と若々しい、意気軒昂たる歌が残ってゐる。

先生と四人は、三月二十九日大阪・河内磯長の太子廟に詣でた後、徳島へ向ひ、四月六日には撫養に「一高昭信会」唯一の先輩である梅木紹男氏を訪ね、始めて直接話す機会を得たのだが、梅木さんはその直後の十三日に、当時東京高等師範学校生徒であられた副島羊吉郎氏が往訪の最中、逝去されたのである。（『続日本精神史鈔』所載「わが生涯のともしび」参照）

五月五日、明治神宮に参拝の後、一高寮内で「一高昭信会」発会式が開かれ、十五日、「一高昭信会」第一回例会で黒上先生は「聖徳太子の信仰思想と日本文化」を講義され、いよいよ会としての活動が本格的に開始された。先生は以後毎週水曜日に講義された。参考資料として国文研の本部事務所に残ってゐる当時の講義レジュメを文末（一六～一七頁）に掲げた。当時の例会の様子を新入生であった高木尚一氏は、後年次のやうに回想されてゐる。

「私が昭信会の例会に出始めたのが昭和四年五月頃で、一週一回の集会に、夜七時頃から集って黒上先生の講義を聴く。題は「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の連続講義で、ガリ版の要項によって、東西文化の比較論から古事記、日本書紀、万葉集より一貫せる日本文化史に及び、柔軟な徳島弁で二時間余お話がつづく。講義中は眠ければ眠ってもよいから終りまで聴く様に先生がいはれるので、私などはよく眠った。余り眠りすぎてよく先輩から叱られた。午後九時になると集会室がしまるので、二十名ばかりぞろぞろ先生の後について一高の正門に近い本郷の先生の下宿にゆき、六畳の間にぎっしり坐って菓子を山の様に出され先生や先輩と十二時近くまで懇談する。今でいへばフリートーキングの時間である。これが楽しくて堪らなかった。先生も実にうれしさうに皆の質問に答へられた。少しも気張らず力まず淡々として誰彼の差別なく応答され、疑問の去らない者は皆が帰った後一人残って徹夜で質問してゐた。先生はそれもいとはず教へられた。こんな事で元来弱かった身体を益々害されたが、その時代の混迷の中に生きる青年として先生は我々と喜憂を同じくされ、そこに悦びを持って居られた。食事は玄米とか大根おろしとかが中心の粗末なもの、衣服は質素な和服に袴で、洋服を着られたのは私は見た事がなかった。字は上手ではないが、一字一字ていねいに力を入れて書かれる為、万年筆の先がすぐ割れて駄目になってしまふ。原稿を書かれる時のゴリゴリいふ音が隣の部屋まで聞える程で、学生が訪問しない時はいつも執筆に余念がなかった。これが今尚諸氏に読まれてゐる遺著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』である。」（『ひとすぢの信　高木尚一遺文・遺歌集』所載「黒上先生といふ人――われわれの思想上の恩師として――」、『国民同胞』昭和三十七年二月号初出）

以上の黒上先生によるご指導とともに、毎朝、一高校庭のボート練習施設（いはゆる「タンク」）の傍らに会員は集合

し、明治天皇の御製を拝誦した。この御製拝誦は四月十六日に梅木氏の訃報を手にした時から開始されたものであり、「昭信会記事」は「我等の生活に不断の霊気を与へた」と記してゐる。

この明治天皇御製拝誦の運動は三井甲之先生が、大正十二年十二月、「人生と表現社宣言」の中に、明治天皇御製を国民宗教行事たらしむべしと宣説されたものである。三井先生は『日本及日本人』誌上に大正十四年二月一日号から昭和三年四月十五日号まで「明治天皇御集研究」を六十五回に亘って連載、昭和三年五月にこれをまとめて東京堂より発刊された。その直前の三月に、東京高師生徒の副島氏が黒上先生を徳島にお訪ねしたときに、黒上先生は明治天皇御製を読み上げられた。そのときの感動は副島氏の一生を決めたといってもよいほどのものであったやうだが、そのとき黒上先生が手にされてゐたのは三井先生の『日本及日本人』の連載の切り抜きを綴じられたものであった。黒上先生はこの連載をよく読まれ、明治天皇御製を一人拝誦してをられたのであらう。

二、昭和四年夏から年末の黒上先生のご病気、ご帰省まで（新井兼吉氏の歌集より）

八月二日から十四日の十三日間、徳島・由岐海岸で昭信会合宿が開かれる（黒上先生を交へ八名）。新井氏の歌集をよむと、梅木先輩の墓所に詣でた後は、自炊生活を行ひ、美しい海岸で泳ぎ遊び、船に乗ってさざえを採ったり、と実に愉快な合宿であったやうに思はれる。黒上先生のご指導は所謂学術的なものに偏らず、心と身体と知と総合的なものであったやうである。

九月には、毎朝の御製拝誦とともに、夜の例会が再開されるが、先生は徳島にをられ、一高生が研究発表を行った（新井氏は防人の歌について研究発表を行った）。この頃の新井氏の歌には自己を厳しく見つめ、先生の志をついで今の世に立たうとする激しい精神の高まりを示す歌が多く遺されてゐる。その一部をひく。

維新の志士を思へば怠りの我は慙愧の思ひに堪へず

志士のごとくまことのみちにすゝむべき我ながら猶怠りかくは

若きものよなが燃えたゝぬ雄心をはげまして立てみ国はたゞならず（我に向ひて）
国のためいのちをすてしますらをの心を思ひて今宵ねられず

かうした厳しい精神生活の中で同時に新井氏の心をひいたのは名もない国民の姿であった。十月十四日～十六日、当時一高の毎年の学内行事である行軍に群馬県の高崎に行った帰途、車中から見た農夫の姿を見て、新井氏は次のやうに詠んでゐる。

うすぐもりの秋の午すぎひなびとのとりいれせまる畑をたがやす
はなやかにかゞやく都も気にとめず田をたがやすかかのひなびとは
父母が田畑たがやすかたはらに幼き子らは土いぢり居り
かたはらにあそぶわが子をみとりつゝ田畑たがやすわがひなびとは

この光景はながく心に焼き付けられ、後日長詩となって再び詠み上げられてゐるのだが、かうした国民同胞感に広がっていく深い情感は、黒上先生の聖徳太子と明治天皇に対する讃仰の心と一筋に通ふものであり、「一高昭信会」の中に強く息づいてゐたものと思はれる。

さて、この秋、黒上先生の上京は九月末頃であったやうであり、「昭信会記事」によれば、「二学期は一学期の御講義がなほ続けられ、殊に日本精神史について鎌倉時代まで進められ、十二月四日よりは予定の如く「明治天皇御集と国民教化」と題して講義が続けられることとなった」。十一月末には、昭信会のメンバーは甲州の三井先生をお訪ねし、甲州御嶽の金桜神社で一泊した（黒上先生は東京にをられて不参加）。この小旅行は同志がさらに深い信に結ばれる機縁になったやうである。新井さんはこのとき膨大な歌を詠んでをられるのだが、その中に、

はらからの心からなる告白に友は声あげ泣きむせびやまず
はらからのために泣きあふ感激は若きこゝろのよろこびなりけり
うつしくも神のまもりによりてこそ一つ心にとけしなりけれ

十三の心一つにとけあひしは人なる我等の力にはあらず

とある。

この旅行から間もない十二月七日、第一高等学校教室で梅木紹男氏の追悼会が行はれた（昭信会・瑞穂会・野球部主催、高師信和会参加、約六十名参加。杉敏介前校長・黒上先生などの追慕の辞と、三井甲之先生などの講演がなされた）。黒上先生は万感の思ひであられたことであったらうが、翌八日、突如、先生は感冒に襲はれて倒れられる。二十七日、終に徳島に帰省・療養され、これが最後の別れとなったのである。

三、その後の昭信会活動

昭和五年は、黒上先生ご不在の苦難の中で会の運営が続けられた。後に田所氏は「先生の御病気御帰郷と共に多く集って居られた方々も次第に去つて行かれました。その時の四肢をもぎとらるゝやうな苦しさは今も骨身にしみて居ります。私共は結局何もわからずに、会を守ることに専心いたしたのであります。相続といふことの重大であることを痛切に知りましたのもそのときでありました。」と記されてゐる（『憂国の光と影』所載「消息」、『伊都之男建』昭和八年九月号初出）。

四月一日から二週間の武州御嶽合宿（八名）。五月十一日、明治神宮で宣誓式。十二・十三日、寮各室を廻り勧誘活動を行ひ、十四日に第一回例会（三井先生指導）が開催された。この年度の新入生に、加納祐五氏や桑原暁一氏がをられる。[1]

本資料集に掲載した御製拝誦記録はこの頃から年末にかけてのものである。当時の様子を偲ぶべく、「昭和五年度　昭信会日誌」の冒頭部分を引用しよう。

「昭信会も愈々第二年の活動にはいった。思ひ起せば一年前、我々二年生一同が何も分らず唯昭信会に引張り込まれて黒上先生の御話しを聞いてから、もう早や今日といふ日がめぐって来たのである。

記者は到底この一年間の昭信会の活動を語る資格のあるものではなく、又、語ることも出来ないのであるが、ともかく、昭信会の過去は実に多難であったことはたしかである。それはたしかに創業の苦心である。

会員募集、諸先生訪問、研究の発表、それから、先生の御病気に、次いで昨年暮の先生の御帰郷、等々と、実に現在の三年生諸君が如何に苦心惨憺されたかは、余等不甲斐なしと雖も察するにあまりあったのである。

が然し、昭信会の真の活動は要するに之からである。三年二年一年と会員の編成が揃った今こそは真の一高昭信会の発足点でなくてはならぬ。師は在さぬとはいへ、上には師と同心一体なる三年生諸兄を持って居る我等である。決して去年に劣る成績をあげ得ないことはない。

現代日本の深刻なる悩は年一年と深くなって来る。我等世に出づるものの如何に進むべきやの問題は益々重要の問題となって来て居る。この時に際し、我等昭信会十数名の肩にかかる責任は実に泰山の重きに比せらるるべきである。理屈は止めよう。要するに実行だ。

この記録の消長必ずしも記録者の巧拙のみならんや、偏に今後一年間の昭信会の活動の実蹟の如何に依るのである。

五月十一日「昭信会宣誓式」

昭信会が昨年発会式を挙げたのは五月五日である。そしてこの日三年生諸兄は明治神宮に於いて厳かに将来を誓ったといふことである。故にこの会をつぐ我等も亦この吉日を撰んで、明治天皇の御霊の前に「まめやかに我が大君に仕へ」まつらむことを祈らんとするのであるが、丁度この頃は組選（註、クラス対抗のボートレース）の猛練習中に当り、組選にはいって居る河合は閑暇がないので、十一日に延期したのである。

午前七時起床、三年生四名、二年生四名（山口は少しく考ふる所あり欠席す）相連れて明治神宮に至る。

若葉の香りすがすがしき大広道を静々と歩む一同の胸には一種の感激があった。昭信会一年の総決算であり、且つ又将来への飛躍の第一歩である今日の参拝は自ら我等を緊張せしめる。

無事に終って、拝殿の裏手に廻り、宝物殿を拝観す。記者は宝物殿は初めてであるが、明治天皇、昭憲皇太后の御遺物の数々を拝して多事なりし明治の聖代を偲び、且つは天皇の御聖徳の洽かりしを仰ぎ奉ったのである。」

このころの様子を、「昭信会記事」は「二年生は西寮十三に集まり会の仕事に当り、三年生四名は先生の御著仮出版の準備に努力する。朝な朝なタンクの傍らにて行ふ御製拝誦は実に我等の生活に不断の霊気を与へた」と記してゐる。[2] この「御著仮出版」とは、五月末に完成する謄写刷本『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』のことである。同書の田所氏序文によれば、二月に先生から既稿の分を謄写刷にしてテキストとするやう指示があった。二月二十八日付けで具体的な編集作業を指示されたお手紙も遺されてゐる（本資料集、一〇四～一〇五頁参照）。これに基づき、三年生が三ヶ月に亘ってこの本の作成に取り組んだのである。この間、三月には編集の中心的役割を担った新井氏が徳島の先生のもとを訪れてゐる。その帰途の歌に、

聖王のたふときわざを師の君にかはりてなさむつとめは重し
世間虚仮唯仏是真のみ教へをときたまひしよみやまひおして
東にまちつゝあらむはらからにつたへまつらむ師のみ教へは
朝夕に師のみ教へをしぬびつゝつとめゆきなむ友らとともに

とあり、本の編集についても直接のご指示があったことであらう。

さらに、七月九日より二週間、神奈川県横須賀市近郊の衣笠村満昌寺で合宿（「昭信会記事」に八名参加としてゐるが、田所・新井・河野・市川・佐藤賢吾・高木・丸谷博吉・加納・若野秀穂・桑原の各氏が参加した模様）。そして秋、第二学期の第一回例会（九月十日、高木氏（当時二年生）発表）の翌日深更、思はずも黒上先生重篤の報が入る。その後の黒上先生のご逝去にいたる当時の悲痛の記録は本資料集に掲載の通りである。

黒上先生の逝去は昭信会メンバーにはかりしれぬ悲しみを与へたが、会にとって苦難はそれのみに留まらなかった。

創立当初のメンバーが続々と病に臥せることとなったのである。この年秋、河野氏は療養生活に入り、翌**昭和六年**春東大に進学した田所氏も十一月に感冒におそはれ肺結核発病、自宅で長期療養生活に入り、さらに、新井氏も病にたふれた。

翌**昭和七年**一月十日夜、市川氏より、新井氏逝去の報が昭信会に伝へられ、さらにあらうことか翌十一日、会員が新井氏の通夜に出るとき、河野氏逝去の電報が来た。黒上先生を追ふやうに二人の中核メンバーが亡くなったのである。

同年十月三十日、田無町の新井氏の墓参を行ひ、蓮光寺の明治天皇の御聖蹟を訪ねたとき、やうやく快復した田所氏も参加した。これ以降、田所氏の強烈なリーダーシップが発揮され、**昭和八年**には小田村寅二郎氏、夜久正雄氏、宮脇昌三氏、南波恕一氏らが新入生として会に参加、やがて会は大きな発展・展開を示すことになる。

（小柳志乃夫記）

（1）「昭信会日誌」より、翌昭和六年五月十一日当時の「一高昭信会」正会員を挙げておく（＊は病気などの事情で進級できなかったと思はれる方）。

田所廣泰（東京帝国大学法学部一年）、新井兼吉（同文学部一年）、市川安司（同文学部一年）、荒瀬達也（同法学部一年）、佐藤賢吾（第一高等学校文甲三年一組）、丸谷博吉（同文甲三年一組）、河野稔＊（同文甲三年二組）、高木尚一（同文甲三年二組）、若野秀穂（同文甲二年一組）、中村保（同文甲二年一組）、大島喜平（同文甲二年一組）、桑原曉一（同文甲二年一組）、河合徹＊（同文甲二年一組）、山縣義雄（同文甲二年二組）、加納祐五（同文丙二年）、吉森桂造＊（同文丙一年）

（2）当時、「一高昭信会」の一年生であられた加納祐五氏から、今回の資料集作成に当ってお話を伺った。その際、御製拝誦は日曜日を除く毎朝七時から行はれたこと、御製拝誦は明治神宮の方角に向って行はれたこと、その作法は、二礼二拍手一拝、「み民われらもろともにまめやかにわが大君に仕へまつらむと誓ひまつらむ」の「のりと」の奏上、御製拝誦、御

製の感想発表といふ形式だったこと、御製拝誦の前に拝誦者があらかじめ御製の感想文を用意してゐた記憶はなく、残されてゐる御製拝誦の記録は、拝誦後に書いたと思はれること、二年生の時には、全寮に散在する会員を起こして回る仕事もあったこと、などのお話があった。なほ、「一高昭信会」における御製拝誦のやり方については、『昭和史に刻むわれらが道統』二七八～二八〇頁に小田村先生が詳述してをられるので参照されたい。

〔参考文献〕

・「昭信会記事」・『向陵誌　第一巻』（第一高等学校寄宿寮）
・重松鷹泰「黒上先生と梅木兄のこと」・『伊都之男建』昭和十年七月
・「新井兼吉歌集　第二集・第三集」（加納祐五氏蔵）
・副島羊吉郎「わが生涯のともしび」・桑原暁一『続日本精神史鈔』（国民文化研究会）
・『憂国の光と影　田所廣泰遺稿集』（国民文化研究会）
・『ひとすぢの信　高木尚一遺文・遺歌集』（国民文化研究会）
・小田村寅二郎『昭和史に刻むわれらが道統』（日本教文社）
・長内俊平編『黒上正一郎先生のうたと消息』（国民文化研究会）

〔参考資料〕

一高昭信会講義撮要

題目　聖徳太子の信仰思想と日本文化

於　一高教官食堂　毎週水曜日　午後六時

黒上正一郎述

一、序講

1、教育教化の根本問題と学校生活

2、求道精神と思想、学術

(1)、人生観と世界観

(2)、宗教的信念と政治経済生活

(3)、精神科学と自然科学

(4)、精神科学の特質と宗教、芸術

(5)、精神科学と国民文化

(6)、現代国民生活の進路と文化史的研究

3、個人と国家、人生の帰趨と国民協力

4、東洋文化と日本文化＝世界文化単位としての日本

5、東西文化統一の世界的使命

二、綜合的人格と国民生活

1、偉人天才と国民文化

2、グンドルフのゲーテ論とフィヒテのドイツ宗教改革史観

3、史的精神と宗教的信念

4、日本精神の綜合的体現者と国民経典

5、聖徳太子と明治天皇

三、上代祖先の精神生活と聖徳太子

1、国民生活の統一的生命と建国精神

2、民族と国語、国民芸術としての和歌

3、「大和言葉のしをり」としての古事記

4、「神ながらのみち」と「しきしまのみち」

5、古代精神の素朴統一性と近世文化

6、古事記に現はれたる国民英雄

7、動乱の人生と悲劇的精神

8、神々祖先の情意と聖徳太子

9、聖徳太子と世界的日本文化創拓

10、拾七条憲法と勝鬘、維摩、法華三経義疏

四、太子の人生観と国家統治

1、国民文化の黎明と大陸交通

2、新時代の苦悶と太子の体験過程

3、外的効業に究極価値を求めざる偉大悲壮の御精神求道反省の至誠に国民救済を念じ給ふ

4、悲痛の人生観と国家統治

5、「群生と苦楽を同じうす」の大御言葉

6、内的平等の同胞感と国家組織

7、内国文化の充実と対外国威宣揚

8、人生永遠の未完成と不断改革

9、憲法十七条と日本国家の体制

五、太子の宗教々化と国民精神

1、内治外交と国民教化

2、「共にこれ凡夫」の告白と人生宗教の曙光

3、懺悔求道の自覚と信楽開発

4、「世間虚仮、唯仏是真」の大御言葉

5、国家秩序と宗教的信念

6、「不請の友」の大御心と教育精神

7、名もなき民の情意をおさむる平等の「いつくしみ」、一切成仏の大乗教化思想に生命をあたへらる

8、無窮生命の信と同胞協力、永久苦闘の日本宗教

9、濁乱の人生と教化の念願

10、天壌無窮の国家観と平和精神の体現宣布

11、世界的宗教の理想と建国精神

12、日域大乗相応地の国民的宗教自覚＝祖国日本の文史的使命

六、太子の大陸思想に対する選択批判

1、印度民族の宗教、哲学と支那民族の政治道徳思想

2、太子の人生観と大陸思想研究方法

3、大陸仏教の抽象的教義と太子の心理的批判

4、儒教、法家、老子の諸思想と聖徳太子

(1)、国民的道徳活動の信念体験と大乗仏教教義（勝鬘経義疏）

(2)、内的化されたる空観の哲理と囚はれざる生命の表現（維摩経義疏）

(3)、平等協力の教化精神と一乗思想（法華義疏）

(4)、冥想静観の哲学教義と情意的行動的日本精神

(5)、家族的国家の団体精神と無我思想

(6)、仏国浄土の理想と現実国土の体験政治と教化の相即を具現したまひし綜合的精神

イ、孔子の体験的道徳精神と儒教思想の選択摂取

ロ、儒教道徳の形式的硬化打破と宗教的和合精神

ハ、老子の超脱観念に対する批判とその自由思想の内的純化

ニ、儒、老の対照補足的内容の徹鑒と維摩経義疏に示されたる倫理観

ホ、法家の権力国家思想と太子の建国精神表現

ヘ、法家の法治至上主義に対する批判と総合的人生観としての「和」の思想

5、人性の複雑と思想開展の法則

6、大陸思想の各要素を統御して我日本の永久生命を表現し給ふ

7、大陸文化批判綜合と国民教化

8、太子の日本文化創業の精神

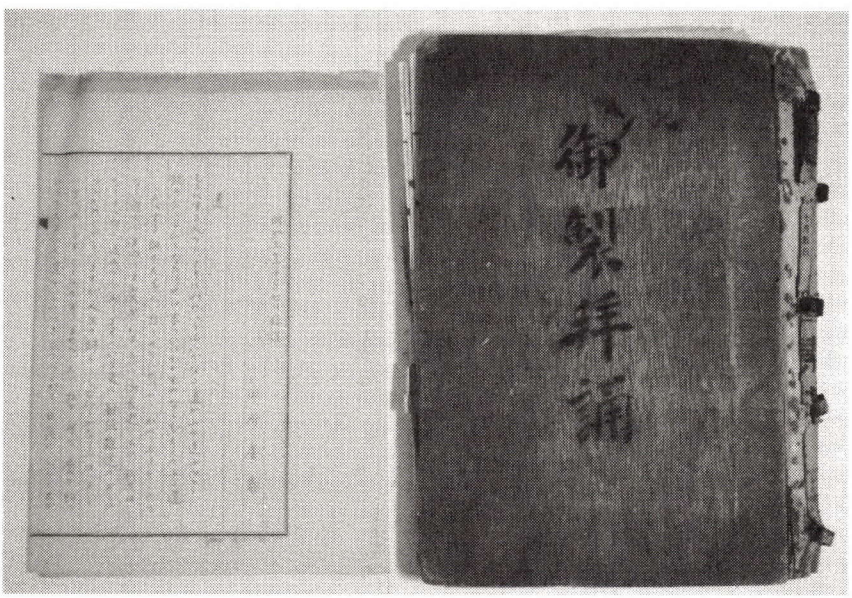
9、太子の信仰思想と日本文化の素質伝統

〔参考資料〕「昭信会日誌」に記された昭和五年度活動概要

第１学期	
５月11日	明治神宮において宣誓式（３年生４名、２年生４名）
５月12・13日	新入生勧誘のため、寮内各部屋を回り、昭信会の紹介を行ふ
５月14日	第１回例会：三井先生講義。14名参加（１年生４名）。よし松でコンパ
５月21日	第２回例会：新井氏讃仰研究発表。12名参加（３年４名、２年４名、１年４名）。例会後、よし松でコンパ
５月29日	第３回例会：発表者不明。１年生新たに２名参加。「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」のテキストが完成する予定だったが間に合はず この後、記録欠
第２学期	
９月10日	第１回例会：高木氏発表。13名参加（３年５名、２年３名、１年５名）
９月11日～30日	本文参照（黒上先生ご逝去前後）
10月１日	第２回例会：佐藤氏発表。12名参加（信和会廣瀬氏も参加）。
？	第３回例会：発表者不明（田所氏か？）。２年生水野氏新たに参加。帝大国文科藤井信男氏参加
10月22日	第４回例会：河野氏発表。13名参加（３年５名：新井、荒瀬、河野、田所、市川、２年５名：佐藤、高木、水野、丸谷、河合、１年３名：佐々木、加納、若野）
10月29日	第５回例会：発表者不明。16名参加（第４回参加者に加へ、１年山縣、島田、桑原参加）
11月３日	明治節。午前６時半に原宿駅集合し、明治神宮参拝。信和会も同行。秋岡先生（明治神宮宮司）も。この後、５月11日の宣誓式に出た３年２年生は「宮島」で記念撮影
？	第６回例会：田所氏発表。17名参加（第５回例会に加へ、１年大島参加）。「教育勅語と御製が渾然たる統一融合を以て我等に迫り来るのを覚えた。田所氏の熱ある発表には敬服の外はない」
11月８日	故黒上先生四十九日追悼会。於、西教寺。一高生来会者19名。他に信和会・廣瀬氏、瑞穂会・印藤氏
11月15日	学期試験のため、御製拝誦を休止
11月19日	千葉県清澄山へ１泊旅行。14名参加
第３学期	
？	第１回例会：市川氏発表。「３年諸兄最後の讃仰研究はいづれも熱ありて力強きものあり」。17名参加（信和会廣瀬氏参加）。
12月17日	第２回例会：荒瀬氏発表。「河野兄病気のため欠席」
12月19日	本年納会コンパ。於よし松３階。16名参加。
12月24日	御製拝誦終了。新年は１月10日より再開
12月25日	信和会副島・廣瀬、昭信会山縣が西下。田所・市川・新井・高木で見送り
12月27日	秋岡先生宅訪問。10名参加（田所・新井・市川・佐藤・高木・水野・若野・桑原・中村・加納）。
12月29日	故黒上先生の百日忌に当り、西教寺で焼香。
１月１日	明治神宮参拝
１月14日	第３回例会：高木氏発表。参加者１８名
１月21日？	（第４回例会？記録欠）
１月28日	第５回例会：丸谷氏発表。
２月１日	一高自治寮、第41回紀念祭。昭信会（西寮13番）では、佐藤氏が主となり、建国精神鼓吹の目的により、神武天皇像を作る。五等賞を受ける
２月８日	故黒上先生追悼式（於新館大教室）。41名参加。礼拝：三木正三郎氏（黒上先生御母堂の兄君）、長詩朗読：三井甲之先生（註、『聖徳太子の日本文化創業』所載の「のりと」）、追悼文朗読（昭信会佐藤、信和会廣瀬）、追慕憶念（近角常観先生、松本彦次郎先生）、記念講演（秋岡保治先生、三井甲之先生）。
２月13日	第６回例会：高木氏発表
４月１日	伊豆・戸田での合宿に出発

(二)「御製拝誦」

――昭和五年四月～十二月より抜粋



「御製拝誦」の表紙（右）と昭和5年10月7日の田所廣泰氏の拝誦記録

【「御製拝誦」翻刻の凡例】

一、本資料は、社団法人国民文化研究会蔵「昭和五年度　御製拝誦」（二三頁参照）の一部を翻刻して、年月日順に並べたものである。

二、資料を翻刻するにあたっては原文を忠実に再録することを心懸け、以下の方針のもとに行った。

1　旧字体は人名を除いて通行の字体に改めた。

2　誤字と推定されるものについては、原則として正しく改めた。

3　促音便の「つ」は、「っ」と表記した。

4　句読点については、読解の便をはかって句点を読点に改めたり、句点や読点を補ったところがある。

5　一文字の繰り返し記号（〻）はそのまま表記したが、二文字以上の繰り返し記号（〳〵）は文字に置き換へた。

6　原文中に闕字がある場合、空白を設けることなく詰めるか若しくは読点を付した。

7　各段落の文頭は一字下げとした。

8　段落の区切りについては、読解の便をはかって原文の段落の途中で改行したり、逆に改行しなかった場合がある。

三、資料中の明治天皇御製については、以下の方針のもとに表記した。

1　引用御製は、明治神宮編纂『類纂新輯明治天皇御集』（平成二年十一月）に拠った。同書に掲載がない場合は、岩永淳太郎編『明治天皇御製集』（大正五年十二月、淳風書院）に拠った。

2　御製の詠まれた年について、資料に記載がない場合、統一して各御製の末尾に明示した。

四、それぞれの御製拝誦記録の最初に、拝誦日と拝誦者の氏名を記した。

《拝誦者の略歴》

田所廣泰

明治四十三年（一九一〇）九月二十八日に生まれる。出生と同時に、海軍中将田所廣海、ますの子として届け出られる（実父母は古川弘、梅子）。学習院初等科、府立第一中学校を経て、昭和三年（一九二八）第一高等学校文科甲類に入学。学内の文化団体「瑞穂会」に入会し、同会主催の黒上正一郎先生の講演会を縁として黒上先生に師事。昭和四年、四人のメンバーで「一高昭信会」を発足。昭和六年、一高を卒業し、東京帝国大学法学部法律学科に入学。その後も「一高昭信会」の指導を続ける。昭和十三年六月、東大を卒業し、内務大臣秘書官補佐となる。同月、「一高昭信会」出身の高木尚一氏、小田村寅二郎氏らによる東大の学内団体「東大精神科学研究会」の設立を支援し、九月に学外団体「東大文化科学研究会」を設立し代表者となる。昭和十四年九月、内務省を辞職し、「一高昭信会」出身者七、八名とともに「日本学研究所」の所員となる。昭和十五年五月、「日本学生協会」を設立し理事長に就任。昭和十六年二月、「精神科学研究所」を設立し理事長に就任。その後、東条内閣の戦争指導を批判する活動を展開。昭和十八年二月、東京憲兵隊に検挙され、同年六月、「精神科学研究所」と「日本学生協会」の解散を条件に釈放される。昭和十九年四月、結婚。同年八月、福島県若松市に疎開。同年十月、再び憲兵隊に拘置され、翌月釈放。昭和二十年七月、岩手県盛町に再疎開し、昭和二十一年六月十八日、同地にて病歿。享年数へ三十七歳。

新井兼吉

田所廣泰氏と同級で、「一高昭信会」発足当初の四人のメンバーの一人。『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』のまとめ・編集に当っては、中心的な役目を担った。徳島の黒上先生のもとをたびたび往訪し、黒上先生からの手紙で遺されてゐるものも多く、「影の形により添ふ様に黒上先生につき添はれた」（高木尚一氏の追憶。『日本への回帰』第十六集参照）。東京帝大文学部に進学したが、先生歿後の昭和七年一月十日に病歿。翌十一日に河野稔氏が後を追ふやうに亡くなった。至純、求道的な人柄が、この御製拝誦記録からも窺へる。別に「新井兼吉歌集」（第二・第三、昭三・八・十七～昭五・七・二十四）が筆写されて伝はってゐるが、そこにも純粋で情感豊かな青年の心がみなぎってゐる。特に詩作も少なからず遺されてをり、この御製拝誦記録にも長詩の形式のものがある。

河野　稔

田所廣泰氏らと同級で、「一高昭信会」発足当初の四人のメンバーの一人。長く結核のため療養を続け、一高を卒業されないまま、昭和七年一月十一日に病歿。黒上先生の御志を受け継ぎ、ひたすら後輩に伝へていかうとされた御姿、また先生に受けた愛情を後輩に注がれる御姿は、二年後輩の若野秀穂氏の忘れられぬ想出としてその追悼文に描かれてゐる。それによると、散歩などの折々にはよく明治天皇御製を朗誦され、思ひを語られたといふことであり、次のやうに回顧されてゐる。「『のる人の心をはやくしる駒はものいふよりもあはれなりけり』『さまざまの蟲の声にもしられけりいきとしいけるもののおもひは』ほんたうに僕等の同信生活を照らしたまふやうな御製と言はれ、黙々と歩いてゐたが僕はそのときつゝましい清い心になった。真暗になるまで林の中を歩いて道を迷ったりして、七時頃お茶の水駅におりて本郷の恵知勝で晩餐を御馳走になった。その時の事は忘れられぬ。」（「新井・河野両兄を憶ふ」、『伊都之男建』第二号初出）

また高木尚一氏は、新井氏と河野氏について、「謹直な新井兄、淡々たる河野兄、いつまでも思ひ出はつくせぬ。己を忘れひたすら国の前途を憂へてゐた新井氏、長いやまひの床にありて、胸中火の如き熱情をもちながら流転常なき生活の一瞬々々を敬虔な祈りにすべをさめて、まことに一木一草にもしたしみをもつなごやかな生を味はってゐられた河野兄。」と偲ばれてゐる。（『ひとすぢの信　高木尚一遺文・遺歌集』所載「新井兼吉・河野稔両先輩をしのびまつりて」、『伊都之男建』第二号初出）

荒瀬達也

明治四十三年八月二十日、宮崎県高鍋町に生まれる。昭和三年、宮崎県高鍋中学校を卒業し、第一高等学校文科甲類に入学。黒上正一郎先生を中心とした「一高昭信会」に参加。昭和六年、東京帝国大学法学部法律学科に入学。同大学を卒業後、直ちに住友製鋼所に入社、兵庫県西宮市に居住した。昭和十一年十一月二日、結婚。荒瀬氏はかねてから病気がちであられたやうで、当会所蔵の葉書・書簡には、病勢を伝へる内容のものがいくつか残されてゐる。昭和十四年十二月病歿。享年数へ三十歳。

昭和十五年十月六日の「黒上正一郎先生十年祭」には、梅木紹男、新井兼吉、河野稔の御霊とともに氏の御霊も祀られた。日本学生協会発行の『学生生活』（昭和十五年十月二十七日発行）には、その時の様子が掲載されてゐるが、「昨年暮になくなられた荒瀬兄がどれほどつねにわれわれのことばかり思ってゐて下さったか、おまつりにこられた母堂からうかゞって

頭が下るばかりであった、ぼくらからはなれて、お一人大阪の住友につとめてをられたためもあって、ぼくらと一緒に毎日たゝかふ日をのみ待ってをられたさうである。そして地方巡回の途次友らが立ちよられるのがたゞ一つのよろこびであった。」（「戦死者と共に」）と、二年後輩の桑原暁一氏が当時の荒瀬氏の心境を偲ばれた文章は胸を打つ。同年「日本学生協会」発行の『黒上正一郎先生遺歌集』には、黒上先生を偲んだ氏の連作短歌十八首も遺歌として掲載されてゐる。

高木尚一

明治四十五年五月十七日、陸軍少将高木尚右、つね子の長男として、東京・小石川に生まれる。府立女子師範学校附属小学校を卒業後、父の赴任に伴ひ、朝鮮に移住し、竜山中学校に入学。昭和二年東京府立第四中学校に転入学。昭和四年、第一高等学校文科甲類に入学。田所廣泰氏のすすめにより「一高昭信会」に入会し、黒上正一郎先生の指導を受ける。昭和七年、一高を卒業し、東京帝国大学法学部に入学。昭和十三年六月、土方成美教授を指導教官として学内に「東大精神科学研究会」を設立。昭和十四年、東大を卒業し、東京府立高等学校（現東京都立大学）講師となる。昭和十五年五月、「日本学生協会」の理事となる。昭和十六年二月、「精神科学研究所」の設立に伴ひ、府立高等学校を辞し、同所所員兼理事となる。昭和十九年、結婚。昭和二十年十一月、（財）労働科学研究所に入所。昭和三十七年、同所維持会事務局長。昭和四十五年、東京都地方労働委員会公益委員、高崎経済大学経済学部教授となる。昭和五十三年、高千穂商科大学経済学部教授。昭和五十四年、労働科学研究所常務理事。当会では、長く顧問として後進の指導、育成に尽力された。昭和五十八年十一月二十四日歿。享年数へ七十二歳。

〔参考資料〕

昭和五年の昭信会「御製拝誦」

昭和五年	拝誦者
4月7日	田所廣泰
4月8日	新井兼吉
4月28日	田所廣泰
4月29日	丸谷博吉
4月30日	山口修太郎
5月1日	荒瀬達也
5月2日	新井兼吉
□月□日	市川安司か
5月5日	河野　稔
5月6日	佐藤賢吾
5月7日	高木尚一
5月8日	田所廣泰
5月9日	丸谷博吉
5月10日	山口修太郎
5月12日	荒瀬達也
5月13日	新井兼吉
5月14日	市川安司
5月15日	河野　稔
5月16日	佐藤賢吾
5月17日	高木尚一
5月19日	田所廣泰
5月20日	丸谷博吉
5月21日	新井兼吉
5月21日	市川安司
5月22日	河野　稔
5月24日	佐藤賢吾
5月26日	高木尚一
5月27日	田所廣泰
5月28日	丸谷博吉
5月29日	新井兼吉
5月30日	市川安司
5月31日	河野　稔
6月2日	佐藤賢吾
6月3日	高木尚一
6月5日	田所廣泰
6月6日	丸谷博吉
6月7日	新井兼吉
6月9日	市川安司
6月10日	河野　稔
9月11日	田所廣泰
9月12日	丸谷博吉
10月7日	田所廣泰
12月9日	田所廣泰

昭和五年五月二日拝誦　新井兼吉

友

あやまちをいさめかはして国のため力をつくせ益荒雄のとも（明治四三）

折にふれて

なりはひはよしかはるとも国民の同じこころに世を守らなむ（三七）

仁

国のため身のほどほどに尽さなむ心のすすむ道を学びて（四〇）

学問

事しげき世にたたぬまに人は皆まなびの道に励めとぞ思ふ（三七）

学生

世の中の風に心をさわがすなまなびの窓にこもるわらはべ（三八）

おこたらず学びおほせていにしへの人にはぢざる人とならなむ（三八）

我々は今、黒上先生の御指導によって、聖徳太子明治天皇の大御心にひとしく摂取せられ、同信同朋生活の信に生きてゐます。この信は我々の生命であって、この大道に導き入れられて始めて我々は生命を与へられたと信じてゐます。この信仰は常に我々の内心に、凡ての活動の内的規範として根柢づけられてゐます。この信仰がなくしては我々のあらゆる活動に確信がなくなると思ひます。この信があればこそ、失敗し挫かれることがあっても生き得るのだと信じます。

然し、我々はかういふ内心の信楽に摂取されるとき、たゞその信仰生活に安住し易くなることは、我々のよく経験するところです。御製に「国のため力をつくせ」「世を守らなむ」「国のため身のほどほどに尽さなむ」と仰せられてあります。我々がこの国、世を忘れて信仰のみに生きようとするときは、現実人生に在っては安易の解決であると思ひます。現

実地上の理想は我々の忘るべからざるものと思ひます。こゝに我々の学問も現実人生の脱るべからざるものと思ひます。それは、

国のため身のほどほどに尽さなむ心のすすむ道を学びて（四〇）

学問は地上の人生に生きて来なければ生命を失ひます。我々の学ぶ学問はその生命を得なければならぬと思ひます。我々は遠からず、この地上の世に生きる学問実学を、それぞれの方面に於いて世に実現せねばならぬと思ひます。我々学校時代は、この為、学の達成に努むべきであって、その勉学なくしては地上の理想も実現せられぬと思ひます。「学問」「学生」の三首の御製は、この大御心の一端を御表現せられたものと思ひます。

此の現実地上の理想の実現は、今の我々の痛苦と努力とに依らねば決して成ることは出来ぬと思ひます。正しくそれは痛苦と努力の連続だと思ひます。然しながら、この痛苦と努力とを厭ひ、信仰生活にこもるときは、決して現実人生に生きる所以ではないと思ひます。現実人生に生活しながら、現実人生に即せずして宗教的生活に外的安住を得ようとする事は我々の陥り易き弊害であり、相いましむべき所と思ひます。然らば、我々が地上の理想を樹立しようとすることは、この内心の信仰と実際生活との相剋に打ち勝つところの悲劇であると思ひます。我々はこの悲劇を、小なり大なりに於いて日常経験してゐる所だと思ひます。こゝに、この相剋に打勝って、信仰と実際とが一致融合されるのであって、かくの如き偉大は偉人によって始めて具現されるものであると存じます。偉大なる人格が確たる信仰に立って実際生活を顧みられ、その相即、一致を実現された時、それは最も大きな悲劇であると思ひます。人生は畢竟大小悲劇の連続であると思ひます。然しながらその動きに生命があるのだと思ひます。安易の停滞、その外面的静平に生命は宿らぬと思ひます。我々がかうして不断の悲劇に生命を見出すが故に人生であると思ひます。

河

岩がねをきりとほしても川水は思ふところに流れゆくらむ（四四）

をりにふれたる

年月はいる矢のごとし物は皆すみやかにこそなすべかりけれ（三九）

昭和五年五月七日拝誦　高木尚一

剣

しきしまの大和心をみがかずば剣おぶともかひなからまし（明治三七）

あらはさむときはきにけりますらをがとぎし剣の清き光を（三七）

折にふれて

いかならむ事にあひてもたわまぬはわがしきしまの大和だましひ（三七）

をりにふれて

たひらかに世はなりぬとて敷島の大和心よ撓まざらなむ（三九）

述懐

ことしあらば火にも水にも入りなむとおもふがやがて大和魂（四〇）

をりにふれて

くろがねのまと射し人もあるものをつらぬきとほせ大和だましひ（四二）

太刀

真心をこめて錬ひしたちこそは乱れぬくにのまもりなりけれ（四四）

をりにふれて

敷島のやまと心をみがけ人いま世の中に事はなくとも（四五）

梅

春さむみ雪はしばしばかかれどもさくべき時と梅はさきけり（四一）

明治天皇の御製を拝誦しまつりて、何時もながらその大御歌の無限のしらべは我等が心の奥底に信の泉を湧き立たしめ、平和なるが如き状態にありながら、この上なく危き孤立の位置をアジアの一角に占むる祖国日本を強くよび起さしめらるるのであります。

天皇がこゝにのたまはせ給ふところの「真心をもて錬ふる太刀」こそは、現在の我等が信であらねばなりません。此の曲れる事多き現実人生に、真に人々が帰趨すべき道を開拓せんとする大事を果すべく、我等が起つべき時は来たのであります。

日々に仰ぎ奉る聖徳太子、明治天皇は我等の心の中に絶えずその大御心を注がせられ、烈々たる熱火を燃え立たしめられ、遠く西の方四国の地に、み心ならずも御病ひの床にいます黒上先生は絶えず我等の上を思はれ、我等の道のしをりとして日々我等をみちびき給ふのであります。

我等の起つべき時は今であります。如何なる困難も、喜びも悲しみも、悉くゆるぎなき信の中に大きく包んで、我等は深刻なる悲痛を体験しつゝ活動せんとするのであります。雪は枝も折れんばかりに降りつもるとも、「さくべき時」と咲き出る梅の花の如く猛然と我等は万難を排して進まねばならないのであります。

昭和五年五月八日拝誦　田所廣泰

虎

人の世のただしき道をひらかなむ虎のすむてふのべのはてまで（明治四五）

道

ききしより遠しと思ふはゆくさきにこころのいそぐ道にぞありける（四五）

をりにふれたる

なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ（四五）

光陰如矢

思ふことつらぬかむ世はいつならむ射る矢のごとくすぐる月日に（三七）

をりにふれて

おのがじしつとめを終へし後にこそ花のかげにはたつべかりけれ（四〇）

遊戯

世わたりの道のつとめに怠るなこころにかなふあそびありとも（四一）

義

身にあまる重荷なりとも国のため人のためにはいとはざらなむ（四一）

道

遠くとも人のゆくべき道ゆかば危き事はあらじとぞ思ふ（三七）

ならびゆく人にはよしやおくるともただしきみちをふみなたがへそ（四三）

近きよりゆかむとしてはなかなかに遠くぞまよふ世の中のみち（三九）

あまたたび通ひなるればはるかなる道も遠しと思はざりけり（四三）

おりにふれたる

むらぎもの心のかぎりつくしてむわが思ふことなりもならずも（四四）

国

天つ神さだめたまひし国なればわがくにながらたふとかりけり（四四）

かしこかれども、我等は今日まで、明治天皇、聖徳太子の大御教を仰ぎつゝ祖国日本の為につくさむと努めてまゐりました。まことに「虎のすむてふのべのはてまで」「人の世のただしき道」をひらかむとこひねがひ、また「ききしより遠し」とおもひつゝ、努めてまゐりました。しかしながら過去をかへりみ、行く先をおもへば「なすことのなくて終らば」と憂へ、「思ふことつらぬかむ世はいつならむ」と我等の使命の重きが故にいよいよ消えやすい露の身をなげかしめられます。私共の今なやむところは日々の生活に如何程大御教が生きてゐるかといふことであります。山鹿素行の言った「天下国家四民の事物に渡りては大成事は不及言之、細事にても世上無学成者程にも合点不参候。或は仁を体認せしむれば、万の間に天下の事相済候と存じ候。或は慈悲を本に仕り候得ば、過去遠々の功徳に成り候と迄申し候て、実は世間と学問とは別の事に成候」[1]と言ふことであります。大御教に示したまひし事を仰ぐにも、我等に、まことの人生の関連をたづねる心が無いときは、「世の人のまことのみち」も「白雲のよそに」求むる様になり、概念打破の大御教を再び概念によって解しまつる様になります。しかしながら教行相即を求めようとしても、その方法はありません。それは「こころにかなふあそびありとも」「世わたりの道のつとめに怠らず」、また、「身にあまる重荷なりとも国のため人のためにはいとはぬ」道を重くし、我身を軽くする心の緊張を以て、「遠くとも」「ならびゆく人にはよしやおくるとも」「人のゆくべき道」「ただしきみち」を踏みゆくより外はないと思ひます。それは道元のいふ「名利をなげすてし」[2]心であります。「いたづらにまことなる」者でないのであります。「あまた、び通ひなれたる」不断の修行であります。我々も道を求むる上は、世俗的功業の成否は問ふところにあらず、成りも成らずもむらぎものこゝろのかぎりつくして、この道の実現に努めます。それは「わがくにながらたふとし」とのたまひし殊勝の自覚であると思ひます。かくしてこそ、世間と学問と別の事とならぬ安心求道の生活をすることが出来ると思ひます。

（1）出典は、山鹿素行の自叙伝ともいふべき『配所残筆』。左に『山鹿素行全集』第十二巻（昭和十五年、岩波書店）より当該箇所を掲載する。

「（然れば樹下石上の住居、閑居独身に成り世上の功名をすて候は、無欲清浄成る事言語に絶し、妙用自由成る所之れ有る

可き様に覚え候に、）天下国家四民事功の上にわたりては、大成る事は之れを言ふに及ばず、細事にても世上の無学成る者程にも合点参らず候て、或は仁を体認するときは一日の間に天下の事相済候と存じ、或は慈悲を本に仕候へば、過去遠々の功徳に成候とまで申候て、実は世間と学問とは別の事に成候。」

（編者訳）「（それで、出家し、閑居独身となり、世間の功名を捨てれば、無欲清浄であることは言語を絶し、日常通俗を越えた不思議な働きが出来るやうに思ったけれども、）天下国家及び一般の人間の日常的な事について、大きな事は言ふまでもなく、細かいことについても世の中の無学な人ほどにも理解できなくて、或ひは仁を体認すれば一日の内に天下の政治は済んでしまうやうに考へ、或ひは慈悲をもとに行へば遠く過去までの功徳になるといふやうなことまで言って、実際は世間の現実生活と学問とは全くかけ離れた別のことになってゐた。」

（2）出典は、道元禅師の「正法眼蔵重雲堂式」。これは、道元禅師が宋から帰朝されて後、最初に創建された山城の国宇治の観音導利興聖護国寺における坐禅堂である、重雲堂の式則すなはち規則である。左に、『現代語訳正法眼蔵』第一巻（昭和四十五年、仏教社）より、当該箇所を掲載する。

「一、道心ありて名利を投げすてんひと、いるべし。いたづらに、まことなからんもの、いるべからず。あやまりていれりとも、かんがへていだすべし。しるべし、道心ひそかにおこれば、名利たちどころに解脱するものなり。おほよそ大千世界のなかに、正嫡の付属まれなり。わがくに、むかしよりいまこれを本源とせん。のちをあはれみて、いまをおもくすべし。」

昭和五年五月十二日拝誦　荒瀬達也

虫

ところせき伏籠（ふせご）のうちに鳴くむしはえらばれたるやうらみなるらむ（明治四二）

星

みるままに数そふものは大ぞらにつらなる星のかげにぞありける（四一）

虫

ひとりしてしづかにきけば聞くままにしげくなりゆくむしのこえかな（四二）

波

しづかなるあしたに見ればわたの原渚にのみぞ波はよせける（四三）

これ等の大御歌によりて、この世の形式区分よりはなれて極めて自然且自由なる衆生の生活を仰がしめらるゝなり。而して吾人が心に開かるゝものは、限りなき自然に抱かれつゝ、この世のあらゆるものゝ拘束より離れし無限世界、それも底知れぬ力をもて生成しつゝある無限の境にして、而もその様たるやかの大海原の如く、愈々広く益々静かなるものなり。そこに吾人は限りなき生命の泉の躍如として溢るゝを覚えしめらるゝなり。あまたの言葉に表はされしが如く、「天地と共に窮なし」との人生・国家観こそ、無限開展に随順しつゝ衆生生活に没入して停滞せず、永久生命希求の本能に従ふ現実主義にして、実に我が日本民族思想の大をなす所以のものはこゝに存す。而してこゝにこそ吾人は無限世界統一の中心を偲び得るものなり。

○

をりにふれて

さまざまの世のたのしみも言の葉の道の上にはたつものぞなき（四三）

をりにふれたる

ひと筋をふみて思へばちはやふる神代の道もとほからぬかな（四三）

○

首夏雨

松の花ちりたるにはに露みえて小雨すずしくふるあしたかな（四二）

花

さく花のかげうごくなりはまどののにはの池水しほやさすらむ（四二）

雲

ひとむらと思ひし雲のいつのまにあまつみそらをおほひはてけむ（四五）

をりにふれたる

思はざることのおこりて世の中は心のやすむ時なかりけり（四五）

述懐

ひろき世にたつべき人はかずならぬことにこころをくだかざらなむ（四二）

かたしとて思ひたゆまばなにごともなることあらじ人の世の中（四二）

想像の世界はやがて天地悠久の感を抱かしめられ、普通平時に於ける想像と理解、感謝と意志の対照的要素の結合を示させ給ふ大御歌は、我々平時寸時の決行と不断の用意との連りを教へ給ひ、現実の一点は無限の開展につながり、感覚の世界は思想憶念の内心の情意に転ずべきを悟らしめらるゝなり。こゝに「言のはの道」とは、之を要するに人間心理の法則及び国家統治の原理の、我が芸術的表現によりて完全に啓示せしめられしものにして、無限の開展と自由の創造とは、かの基準の決定及目標の確認に相俟ちて、こゝに真に「しきしまの道」の実現は完成せらるゝなり。而してこの「神ながらの道」即ち芸術的直観の自由自然の天地に於てこそ初めて正しく、この宇宙自然、人生の極りなき微妙の変化は認識され且鑑賞され能ふものなり。而もこの変化と動揺のすべてを認識する主観は、常に無限の複雑を統一する中心を仰ぎつゝ、基準と目標を決定確認し、そこに無限の開展と自由なる創造とを現実の上に表はし、こゝに天壌無窮てふ確心は全国民の人生観として永久生命を希求し、而して無限なる衆生生活世界は生れ来るなり。而も、この世界たるや完成せし既成物に非ずして、絶えず生成し、その様は恰も夫の大海原の如く広く、且つ深きものなり。而して、この無限世界の統一中心は

即ち国家統治の大権にして、之が表現は、只、「しきしまの道」によりてのみ、なされ得るものなり。

松上鶴

朝づく日とよさかのぼる山松の梢をしめてたづぞ鳴くなる。（四五）

昭和五年五月十七日拝誦　高木尚一

烏

やどるべき木立多かる森にてもねぐら争ふむら烏かな（明治三五）

夏菊

おく霜の寒さを知らぬ夏菊の花もうつろふ時はのがれず（三七）

をりにふれたる

いかにぞとおもひしことはさもあらで思はぬことをきく世なりけり（三七）

思はぬ事が数限りなく起り、醜き事の充満せる現実人生を御体験遊ばされて、これらの大御歌を詠み給うたものと拝察しまつるのである。

栄ゆる者の衰ふるは如何ともなし難き現実相である。一難去って又一難の悲痛なる現実活動に没入し給へる大御心は、

波

荒るるかと見ればなぎゆく海原のなみこそ人の世に似たりけれ（三八）

述懐

思はざることのおこりて世の中は心のやすむ時なかりけり（四五）

の御製にあらはれてゐる。

明治の御代の末に至り人心やうやくゆるみ、戦時の国民の緊張も次第に失せ、一致団結も崩れて行く時、大日本帝国の運命を御一身にになはせられたる天皇の御心憂は如何ばかりであったらう。

述懐

ゆくすゑはいかになるかと暁のねざめねざめに世をおもふかな（三八）

心

すなほなるをさな心をいつとなく忘れはつるが惜しくもあるかな（三八）

塵

ともすればうきたちやすき世の人のこころの塵をいかでしづめむ（四一）

をりにふれて

ことしあらばわが力ともたのむべき人のをしくもおいにけるかな（四一）

漁翁

すなどりは子らにゆづりて蘆の屋に網すくおきなあはれ老いたり（四〇）

飽くまでも何処までも、此の日本を知ろしめし給ふ所の御天職をになはせられたる天皇として、たのむべき臣の次第に老いて行く事を歎かせ給うた悲痛なる御体験を御表現遊されたのである。

併しながら天皇の大御心は飽くまでもを、しく強くあらせられた。

をりにふれたる

天（あめ）をうらみ人をとがむることもあらじわがあやまちをおもひかへさば（四二）

太刀

おのが身の守刀は天(あめ)にますみおやの神のみたまなりけり（四二）

神祇

ちはやふる神の力によりてこそわれをたすくる人もいでけれ（四四）

神祇

わがこころおよばぬ国のはてまでもよるひる神はまもりますらむ（三六）

社頭祈世

ちはやふる神ぞ知るらむ民のため世をやすかれと祈る心は（二四）

とこしへに民やすかれといのるなるわが世をまもれ伊勢のおほかみ（二四）

常に神と共にまします天皇の大御心は、濁れる世の憂、世の無情、全ゆる艱難をすべて味ひ給ひても、宛(さなが)ら巌上に根ざせる松の如く毅然として揺がず、大海の如く広くあらせられたのである。

昭和五年五月二十一日拝誦　新井兼吉

述懐

思はざることのおこりて世の中は心のやすむ時なかりけり（明治四五）

をりにふれたる

いかにぞとおもひしことはさもあらで思はぬことをきく世なりけり（三七）

学問

事しげき世にたたぬまに人は皆まなびの道に励めとぞ思ふ（三七）

学生

世の中の風に心をさわがすなまなびの窓にこもるわらはべ（三八）

おこたらず学びおほせていにしへの人にはぢざる人とならなむ（三八）

夏草

夏草のしげきをみればあらた世にいまだひらけぬ道もありけり（二九）

野

にひはりの畑も田面（たのも）もおほけれどひなは荒野のなほひろくして（四三）

国

よきをとりあしきをすてて外国（とつくに）におとらぬくにとなすよしもがな（四二）

義

身にあまる重荷なりとも国のため人のためにはいとはざらなむ（四二）

刻々にうつりてとゞまらぬ人生に徹したまひし大御歌、「思はざることのおこりて世の中は心のやすむ時」なきが、まことの姿であります。御身親ら内外多事の世に立たせ給ひし御体験をありのまゝに歌はせ給うた大御歌は、我々国民の心に沁み入るのであります。今、事しげき世に出づべき我々学生は、今の時代こそ心をこめて学びの道にはげむべきであります。世の苦しみを救ひ、ともに日本の建設につくさうとする我々の前には、「いまだひらけぬ」幾多の道が横たはってゐます。開拓すべき「荒野」はひろびろとしてゐます。そして、我々祖先の我々後世の子孫に遺して行った世界文化綜合といふ大使命は我々の肩にかゝってゐます。我々にはまことに痛苦と努力とがいやが上にも重って来ます。然し、我々の行くべき道はひとすぢです。「世界文化綜合」といふ、大きい輝かしい名目にのみ捕はれるとき、それは廿世紀の日本の新しい概念崇拝の迷信に陥らねばなりません。まことに世界文化綜合とは我が日本の使命でありますが、如何にして我々

はこの使命の実現に尽すべきか。我々の一日々々の生活がこの実現に力ある様な、その様な生活に生きねばならぬと思ひます。世界文化綜合、それは他人がやるのではないのです。又、我が日本は究極に於いてその実現を全うするものだ、といふ様な定った運命を有ってゐるものではありません。その様な外的の勢力によって為されるものではなく、実に我々の同信協力によってのみ為されねばならず、これに痛苦と努力とを捧げてこそ、始めてその実現への道が照らされるのであります。我々青年の「まなびの道」はまことに国家の運命と相つながるものであります。あらゆる方面に新日本の文化を開展すべき我々学生の修業は実に重大なる意義を有することを自覚して、「まなびの道」の根柢を培ひ行かねばならぬと思ひます。

日本文化の新開拓、我々青年の勇気を起す大いなる務であらねばならぬと思ひます。

をりにふれたる

思ふことつらぬかずしてやまぬこそ大和をのこのこころなりけれ（三八）

川

岩がねをきりとほしても川水は思ふところに流れゆくらむ（四四）

新日本建設こそ我々青年の務であります。

昭和五年五月二十二日拝誦　河野　稔

花

近からばわが庭ざくら北支那のたむろに折りてやらましものを（明治三八）

たたかひのにはのみ思ふこの春は花の木かげもしづごころなし（三八）

あらたまの年にひとたびさく花を心しづかにみむ春もがな（三八）

夏草

国のため民のためには夏草のことしげくともつとめざらめや（三八）

月

さまざまにもの思ふ夜もさやかなる月にむかへばなぐさまれけり（三八）

暁

暁のねざめのとこにおもふこと国と民とのうへのみにして（三八）

波

荒るるかと見ればなぎゆく海原のなみこそ人の世に似たりけれ（三八）

島

島といふしまのはてまで司人めぐみの波をかけなもらしそ（三八）

田家

あがたもり心にかけよしづがやのかまどのけぶりたつやたたずや（三八）

仁

しづがうへに心をとめて県（あがた）もりたづきなき身をいつくしまなむ（三八）

思

国民のうへやすかれとおもふのみわが世にたえぬ思なりけり（三八）

をりにふれたる

おのづから仇のこころもなびくまでまことの道をふめや国民（三八）

世に広くしらるるままに人みなのつつしむべきはおのが身にして（三八）

世の中の事ある時にあひぬともおのがつとめむわざな忘れそ（三八）

ものまなぶ道にたつ子よおこたりにまされる仇はなしとしらなむ（三八）

こゝに拝誦しまつりしはすべて明治三十八年の御製であります。「あらたまの年にひとたびさく花を心しづかにみむ春もがな」の御製を拝誦しまつれば、わが国家生活の運命を荷はせらるゝ悲痛の御心がせまってまゐります。「夏草」「月」「暁」「思」これらの御製に、国と民との為に大御身をさゝげつくさせ給ひし大御心をうつしく仰ぎまつるのであります。現実国家生活の痛苦を大御身にをさめ給ひし大御心は、さやかなる月によってなぐさめらるゝとの御製を拝誦しまつりては、現実の生が直ちに永遠の世につながり、過去のあらゆる悲痛忍苦の生を照させ給ふを仰ぎまつるのであります。この大御心は又大海原の波の動静に人生事実を照見あそばさるゝのであります。天皇としての人生観を仰ぎまつるのも、我等は臣として仰ぎまつるべきであります。

「島」「田家」「仁」これらの御製を拝誦しまつれば、地方長官の又官吏の任務の実に重大なるを気附かしめられます。今の日本は悲しいかな、「たづきなき身」の数は三十万と算せられて居り、これらの臣は現実生活の秩序の整正に苦んで居るのでありますが、これを如何になすべきかは要するに、これから研究されねばならぬ重大の問題であります。これが為には我等は常に山鹿素行の所謂実学を積まねばなりません。我等の生活は要は新しい開拓を常に持続せねばならぬものであり、仇をも靡かすべき誠の道を履んでゆかねばなりません。我等は内的生活と外的形式とが二になるとき、悲しむべき偽善者に堕さねばなりません。我等は偽善者の介在をゆるさず、常に生々の気力に満つる会たらしめねばなりません。これ誠に「世に広くしらるるままに人みなのつつしむべきはおのが身にして」「ものまなぶ道にたつ子よおこたりにまされる仇はなしとしらなむ」との御製を仰ぎまつる所以であります。

昭和五年五月二十七日拝誦　田所廣泰

をりにふれたる

さまざまのうきふしを経て呉竹のよにすぐれたる人とこそなれ（明治三七）

をりにふれたる

なにごともおもふがままにならざるがかへりて人の身のためにこそ（四三）

をりにふれて

ものごとにうつればかはる世の中をこころせばくはおもはざらなむ（四〇）

述懐

ひろき世にたつべき人はかずならぬことにこころをくだかざらなむ（四一）

心

いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ（四五）

述懐

かたしとて思ひたゆまばなにごともなることあらじ人の世の中（四二）

松

波風をしのぎしのぎて荒磯の松はちとせの根をかためけむ（四〇）

をりにふれたる

思ふことつらぬかずしてやまぬこそ大和をのこのこころなりけれ（三八）

をりにふれたる

波風はしづまりはててよもの海にてりこそわたれ天つ日のかげ（三九）

をりにふれたる

思ふことつらぬきはてて国民の心やすめむときぞまたるる（三九）

歌

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな（三七）

思ふことありのまにまにつらぬるがいとまなき世のなぐさめにして（三七）
ときにつけ折にふれつつ思ふことのぶればやがて歌とこそなれ（三七）

歌

ひとりつむ言の葉ぐさのなかりせばなにに心をなぐさめてまし（三八）

詞

ききしるはいつの世ならむ敷島のやまとことばのたかきしらべを（四三）

国民の為、一生をさゝげたまひし大御心をいたゞきまつり、さまざまの国家的難事を経たまひし天皇の御体験よりのたまひし大御教をいたゞきまつるのであります。何事も思ふがまゝにならぬ世に立ち、思ふこと貫かんと努力精進する身は、おのづから世にすぐれたる人となると教へましましたのであります。西郷南洲が、幾歴辛酸志始堅と維新の大業を輔翼しまつりし生涯をかへりみし述懐も思はしめられます。而もかく歌ひし南洲はまことに、世の中のよろこびかなしみを知りつくした温乎たる流動の生命にみちし人格であったのであります。私共が大御教をあふぎつゝ、日の本の蒼生として国のためつくさむとするにも、かくのごとき『ことしげき世にたへぬべき人』とならねばなりません。人生を知ることにつとめねばなりません。生きとし生けるものゝあはれを知り、うつりかはり定めなき世をきはめねばなりません。『詩』とは、全人生直観の表現であります。明治天皇が、かくまで愛着をもち給ひし『しきしまのみち』は、国民のまごゝろをみそなはす大御心の御表現であり、それはまた直ちに国民の胸に通はせ給ふこととなるのであります。明治天皇が歌聖にましましたといふことは、決して『月花のもてあそび』としての歌の名人にあらせられるのでなく、真実に人生を歩みましゝ大御心に、人の世のさまざまの事につけて、深きおもひをよませましゝをいふのであります。私共はこの大御歌によって、人生事実にめさめしめられ、我等の人としての道を定かにし得るのであります。私共は大御歌に心絃共鳴するとき、また歌人となり得るのであります。全国民生活没入の国民詩人として、我等もまた民の道をつくし、日の本の為に身をさゝげむと願ふのであります。

昭和五年五月二十九日拝誦　新井兼吉

山路

今もなほふみわけがたき深山路を開きし人の昔をぞ思ふ（明治三七）

夏草

事しげき世にも似たるか夏草は払ふあとよりおひ茂りつつ（三七）

述懐

うつせみの世にたつほどは夏草のことしげくともいとはざらなむ（三九）

をりにふれたる

なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ（四五）

松

波風をしのぎしのぎて荒磯の松はちとせの根をかためけむ（四〇）

霜

千代ふべきみぎりの松はおくしもを寒きものとも思はざるらむ（一九）

をりにふれたる

いかならむ事にあひてもたわまぬはわがしきしまの大和だましひ（三七）

冬泉

冬ふかき池の中にもほとばしる水ひとすぢはこほらざりけり（一八）

をりにふれたる

年月はいる矢のごとし物は皆すみやかにこそなすべかりけれ（三九）

○

今もなほふみわけがたき深山路を開きし人の昔をぞ思ふ

み国につくし、祖先のいさをよ、
そをしのばせ給ふ大御歌、ものみなのまごゝろをすべをさめ給ふ。
いま我等子孫、みおやのいのちを呼びさまさむ。

事しげき世にも似たるか夏草は払ふあとよりおひ茂りつつ

なすべきわざいや重く、思はぬことつぎ起り、行手をさへぎりしげる夏草、
いかに事繁きうつし世よ、
足らはぬ姿、地にたふれむとす。

うつせみの世にたつほどは夏草のことしげくともいとはざらなむ
なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ

力強き大御歌よ、事しげき世に捧げ給ひし大御身のかしこさよ、
「夏草のことしげくともいとはざらなむ」、国民にまたそを願はせ給ふかしこさよ、
日本に生れかしこくも、世にたつ力めぐまる、われらの幸よ、
うつし世はかなしくも、戦ひゆかむ、ますらをわれら、
もろともに。

波風をしのぎしのぎて荒磯の松はちとせの根をかためけむ
千代ふべきみぎりの松はおくしもを寒きものとも思はざるらむ

彼方のぞむ、祖国の運命、
つとめは重し、
たへゆかむ、たふるゝを、ふりおこしふりおこし、すゝみゆかむ、もろともに。

いかならむ事にあひてもたわまぬはわがしきしまの大和だましひ
冬ふかき池の中にもほとばしる水ひとすぢはこほらざりけり

とゞこほらぬ、流動の生命、
まがつものやぶりてゆかむ、事そぎし古への道よ、
いまそ時なり！　めさめよ今に、
複雑、煩瑣、分析、解体……、そが統一的生命、
うつし世に戦ひ生きし祖先のいのちよ、我等のむねに今につたはり、
たぎち流るよ、われらが身内に、
おゝつらぬかむ、たわむことなく、しきしまの大和のみちを、日本の地に根ざす道を、もろともに、
み国につくすわれらがいのちは、祖国のいのちにつながり生きむ。
我等が決意を生きしめむ、時ははやいま。

年月はいる矢のごとし物は皆すみやかにこそなすべかりけれ

昭和五年五月三十一日拝誦　河野　稔

鳥

かくばかりひろき林をいかなればひとつ木にのみ鳥のとまれる（明治三九）

小鳥

餌をまきていざあさらせむわが庭にけふも小鳥のなれて遊べる（三九）

鶴

かぎりなき天つみそらはあしたづの翅をのぶるところなりけり（三九）

鶴

いただきに朝日をうけてひさかたのくもゐはるかに鶴（たづ）なき渡る（三九）

鶴

あしたづのやどりとなれる老松はいくらの雛かおほしたてけむ（三九）

馬

癖なきはえがたかりけり牧場よりすすめしこまの数はあれども（三九）

薬

生く薬もとめむよりも常に身のやしなひ草をつめよとぞ思ふ（三九）

読書

外国のむかしがたりもききてけりときあきらめしふみをよませて（三九）

古書

石上（いそのかみ）ふるごとぶみをひもときて聖の御代のあとを見るかな（三九）

筆

をさなくも選びけるかなとる筆の力はわれにあるべきものを（三九）
思ふことつらねかねてはつくづくとふでのさきのみうちまもるかな（三九）

こゝに引用しまつりしは、すべて明治天皇御集明治三十九年のうちよりしたのである。御製を終夜拝しまつりつゝ、遂に己が小さき技巧をもってこれを按配すべからざることを知らしめられ、御製の順序のまゝに拝誦しまつったのであります。

天皇の大御歌は、すべて宇宙人生を「ありのまにまに」御表現せさせ給ひし所にして、天衣無縫と申し上ぐるより外には言葉はないのであります。宇宙人生の核心に透徹せさせ給ひし大御心には、「物」として精神より区別すべき存在はなく、すべては生命に統一せしめられて、そこには知的構成は遂にその跡をとゞめないのであります。これ即ち、生きとし生けるものゝ思ひを統べをさめ給ひし広大の大御心のうつしき表現にして、この偉大悲痛の御精神に目ざむるとき、我等が苦とする所の浅薄皮相なるを目ざめしめらるゝのであります。我等はこの宇宙を統一し給ふ偉大の御精神にめざむるとき、そこに安心を得しめらるゝのであります。即ちこの御精神の威厳こそ、すべてを統べ給ふ威力とうつしく感ぜしめらるゝからであります。吾人は現世の不安動揺の絶えざる人生を体現しつゝ、ともすればいつの世に人生に平和のめぐまるるべきか、又、嘗て治まりし世のありしやの念になやむのであるが、こゝにその思ひの憩はしめらるゝを感ずるからであります。聖徳太子は、「事に大小となく、人を得て必ず治まる。時に急緩なく、賢に遇へば自ら寛なり」[1]と仰せられて居ります。こゝに於て、真に一国文化の消長、治平の交替のあとをその芸術によって究めうべきを覚らしめられたのであります。

我等は個我にとらはれやすき心を常にふるひ起して、誠の道を求めゆくべきことを、今更の如く顧みしめらるゝのであります。

（1）出典は、「十七条憲法」第七条。

昭和五年六月三日拝誦　高木尚一

雪中若菜

はつ若菜人のつみけむあとばかり雪きえにけり野辺の通ひ路（明治四二）

松下残雪

下かげに雪ものこりて吹きおろす松風さむし岡ごえの道（四二）

落花

ちる花をのせてかへりぬ渡舟むかひの岸に人はおろして（四四）

蘆間薄氷

霜がれのあしの葉さやぎ吹く風にむすびそめたるうす氷かな（不詳）

氷留水声

山川のみづは氷のとぢはて、風の音のみたかきころかな（不詳）

明治天皇の自然を御観賞遊ばされ、そを詠み給うた大御歌には、その自然を賞で給ふ所の御熱情のあらはれが遺憾なく表現せられて居り、我等も天皇と共にその景色を観賞しつゝあるかの如き感をさへ禁じ得ないのである。

大小数多の御政務に大御身を捧げ給ひて、尚かくも自然を熱愛し給ひし天皇こそは真に大歌人であらせられたのである。

うら、かな春の渡し場の景、冬の初めのうすら寒い頃、万物みな冬の氷に閉されて風のみ吹きまくる荒漠たる冬の有様等、実にありの儘になだらかにして又美しき御製である。

故郷

むかしわがあつめしくさの根はたえて浅芽(あさぢ)むぐらのしげる庭かな（四一）

水

みなもとは清くすめるを濁江(にごりえ)におちいる水のをしくもあるかな（四二）

心なき自然の景を現実人生の悲哀の中に生かしめらるゝ御表現をこゝに仰ぎまつるのである。

月

外国(とつくに)の野辺のたむろにこの秋も月やみるらむわがいくさびと（三八）

雪

おりたちてとくうちはらへ枝よわき小松の上に雪のつもれる（四三）

自然を友とせられ、自然の中に通ふ永遠の生命を味得せしめられ、天皇の大御心は自然をさながら生けるものゝ如くに詠ませ給ひ、限りなき御悲痛の情、御慈愛の情、すべての御感情を自然の中に詠みこませ給ひたるを仰ぎまつるのである。

秋夕

国のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて（三九）

煙

あさみどり晴れたる空になびけども煙の末はさびしかりけり（四〇）

○

花

咲く花をやどにのこしてしづのをは長き日ぐらし小田にたつらむ（四一）

かく自然を愛し給ひつゝ、御多忙なる日常御生活にをかれては国民の為にといそしまるゝ、その民の労苦を御自らのそれとなし給ふ尊き御精神には、唯々感激の外はないのである。思へばこの最後にかゝげた御製には、一国民としての労苦を荷はせらるゝ天皇の御生活そのまゝを拝し奉ることが出来るのである。

昭和五年六月七日拝誦　新井兼吉

歌

おもふことうちつけにいふをさなごの言葉はやがて歌にぞありける（明治四〇）

天地もうごかすといふ言の葉のまことの道はたれかしるらむ（四〇）

述懐

ことのはのまことのみちを月花のもてあそびとはおもはざらなむ（四〇）

子

思ふことおもふがままに言ひいづるをさな心やまことなるらむ（四〇）

民

すすむ世をみるにつけてもおもふかなわが国民のうへはいかにと（四〇）

隠士

やまふかくかくるる人をむかへても世を治むべき道をとはばや（四〇）

車上雪

しづのをがひとりひきゆくをぐるまの重荷の上につもる雪かな（四〇）

雪

つき山のゆきをみつつもおもふかな樺太島の寒さいかにと（四〇）

霜

霜ふりてさむき朝かな園守が箒とる手もさぞこごゆらむ（四〇）

述懐

うつせみの世はやすらかにをさまりぬわれをたすくる臣（おみ）のちからに（四〇）

世の中をおもふたびにもおもふかなわがあやまちのありやいかにと（四〇）

我等の礼拝経典　明治天皇御集

大御歌誦しまつればつたはり来ますことばのいのち、

これ「天地もうごかす」といふまことの大御歌よ。

「言（こと）」と「事（こと）」と、

遠つみ祖の古へより思想と実行との相即をうつしくことばに

今につたふるやまとことばの生命威力、

まことのうたは、

まことのこゝろに湛ふるいのちの律動そが表現、

言葉に生命あらしめよ、

事実にもとづくことばぞわれらがいのちなるべし。

思ふことおもふがままに言ひづるをさな心やまことなるらむ

再び誦しまつる大御歌、
まことのことばは、あらゆる技巧を超出す。

ひたばしる駿馬のごとすゝみゆく世、
しづがひく重荷車につもる雪、築山の雪、霜寒き朝、
それらをみそなはす度毎に詠ませ給ひし大御歌よ。

うつせみの世はやすらかにをさまりぬわれをたすくる臣のちからに
世の中をおもふたびにもおもふかなわがあやまちのありやいかにと

世と民とを思はせ給ふ大御心に求道の道を歩ませ給ふ、
明治の大御代の世界的国力充実発揮の内的根柢のうつしき確証は、
即ち明治天皇御集。

大御歌誦しまつり、えらびまつりしことはや幾そたび、
かぎりあるわれらがはからひよ、ことばもつきぬ、
をさな心に大御歌たゞすなほに誦しまつらむ。
とこしへに国民を照し給ふ大み光よ。
友のことばはわが思ひを強めたりき、
ものいはずとも通ふこゝろの不可思議よ。

行くべき道は既にはや確立せられてあり。
われらのつとめは行手にあらずや、
億兆の祖先とまた無窮の世の子孫とは
ひとしく我等のつとめの遂行を要求せむ。
大御歌誦しまつり、こゝにわきくる感激の創造力に
ものみな新たにつくりゆかむ、
日の本に幸ありて生れし我等。

昭和五年六月十日拝誦　河野　稔

夕立

にはかにも照る日のひかりかきくらしいらかをたたく夕立のあめ（明治四〇）

夕立

夕立の雨は高嶺をこえにけり並木の松に風をのこして（四〇）

納涼

ゆふべゆふべすずみのにはにたつことも事なき時にあへばなりけり（四〇）

納涼

端居せぬ夜はこそなけれ大空に天の河原のみえそめしより（四〇）

夏朝

ありあけの月のしづくをはちすばのうへにのこして夜はあけにけり（四〇）

夏池

藻刈舟こころしてさせ池水にはちすのわか葉のうかびそめたる（四〇）

夏田家

つばめとぶ影のみ見えて田うゑどき家に人なき小山田の里（四〇）

夏竹

しら露の風にこぼるる数見えて朝日すずしき竹の下庵（四〇）

夏灯

文机のもとにかかぐるともしびの影さへ暑くおもふ夜はかな（四〇）

夏人事

窓のうちに扇とれどもあつき日にてるひをうけてしづの草かる（四〇）

薄

はるばると風のゆくへの見ゆるかなすすきが原の秋の夜の月（四〇）

明治四十年の御製を繰返し拝誦しまつり、今その一部をこゝにともに拝誦しまつったのである。御製を次々に拝誦しまつれば、統一せる一首一首の外に我等が心に呼びおこされる総体のあることが感ぜらるゝ。今御製の一部を引用しまつりて、これについてありのまゝに感ぜしめられたことをありのまゝに表現せんとするのである。我等は生命、精神の学を研究すること、、明治天皇御集拝誦との密接の関係を、三井先生より常に承って居ることがあたらしく思ひ出されるのである。

我国が世界的国際場裡にあること七十年許りにして、世界に確固たる地歩を確立したることは論を俟たない所である。我国の自然科学はその指導者、先導者の西洋諸国のそれと同等或はそれ以上の発達をとげ、あらゆる文化発展の根本原則としての交通を保つことによって、その向上の途をたどるべく約束されて居るのである。然るに、現代の日本はその国際交渉裡に於ける行動は主動的であるといふことが出来ないのは何故であるか。それは勿論国民的信念の欠乏に帰さねばな

らぬ。それは即ち本来日本が世界の指導者であるべきであるのに、却って文化の後進国の為に行動の障妨をうけつゝある所以である。日本の精神文化の研究方法はその成果に何等独自の地を有せず、只外国の糟粕をなめて居るに過ぎぬからである。然れども我等は、精神科学の研究方法を又その成果を、明治天皇御集によって開示せられてあることを信知するのである。

かゝる思に大御歌を誦しまつるのである。

夕立

にはかにも照る日のひかりかきくらしいらかをたたく夕立のあめ（四〇）

自然現象の急激の変化がありのまゝに歌はれ、そこには瞬間の凝滞もとゞめぬのである。一首を統一する一気呵成の音調にもその光景のあじはゝるゝのである。こゝに歌はれたる一瞬の自然の変化も、そは人生と不可分のものにして、そこに全体を統一する情意の波動と剛健の意志力とが同時に表現せられて居るのを仰ぎまつるのである。

納涼

ゆふべゆふべすずみのにはにたつことも事なき時にあへばなりけり（四〇）

瞬時の凝滞もとゞめぬ精神の活動の威力を感ぜしめらるゝのである。事なきときに処する心も、事ある時に威力を発揚する精神も、実人生の波瀾をそのままに支配する精神であると感ずるのである。

以下、朗徹せる大御歌を拝誦しまつりては、天地宇宙と感応したまひ、こを画定したまふ無限の大御心をしのびまつるのである。

昭和五年十月七日拝誦　田所廣泰

道

しるべする人をたよりにわけいらばいかなる道かふみ迷ふべき（明治三八）
踏みわくるひとなかりせば末つひにわかずやならむちよのふる道（三八）

しるべする師をたよりに、自らみちびかれつゝ、かへりみるところもなく進んでまゐりましたが、いま、急に御長逝にあひ、私共は、なすすべなく迷ふのであります。いま更に難値難遇のおもひをふかめしめられますが、人生の師をうしなひしかなしみは、まことに言ひあらはすことばもありません。たゞ拙き身の、貴き師のひらきたまひし道をうけつぎまつれるかと、日夜に心をくだかしめらるゝのであります。こゝに、この悲痛に徹して、私共は、宗教的に宗教的にと、同信同朋協力の生活の唯一信に帰入せしめられ、無碍大道の向上の一路を辿らしめらるゝのであります。それは、永遠に黒上先生のいますがごとき心地してつかへまつり、教へをたまはりつゝ、いまこゝに集ふ者等の個体の全体没入であると信ずるのであります。

をりにふれたる

思ふことといふべき時にいひてこそ人のこころもつらぬきにけれ（四四）

このたゞいまのかなしみと、悲痛の決意をかたり合ってこそ、私共の心も融一せしめられ、また師を慕ふこゝろも貫かしめられるのであると信じます。

歌

ときにつけ折りにふれつつ思ふことのぶればやがて歌とこそなれ（三七）
世の中にことあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり（三七）

述懐

思はざることのおこりて世の中は心のやすむ時なかりけり（四五）

詩歌はつきせぬおもひのかぎりなき詠嘆でありませう。世の中は不時の出来事の為に思ふにまかせぬ障害に富んだものであることを知った時、その障害を打破して、生命の自由なる開展、信の無碍徹透のかなしきたゝかひの中に、時々刻々の現在を自覚して、そのよろこびかなしみを、一瞬にをさめきはむる生命観は、信の体験であります。こゝに、強く味はるゝ深きおもひはつきせぬ表現、詠歎となって私共の生活をゆたかにして呉れるのであります。この信、この歌（形式よりも内容より）、それが只今の内心の要求であります。それは只今のことを明めることであり、たゞいまのかなしみをつきつめることであります。すべて拙き足らはぬ身の不善を過去に帰し、その罪悪観の下に、たゞいまの忘我のかなしき努力は、己が身の罪ふかきもわすれて、円融の信は無碍の活動となってあらはれてまゐります。寂滅為楽の仏教々義的解釈はしらず、私はこれを道を重んずるが故に身を軽んぜねばならぬ運命に徹して、終に寂滅の境に達し、さまざまの現世のさまたげを受けぬ、太子の八地菩薩の願行として、自由の教化活動をなさむとするますらをのこゝろとして味はゝしめられ度いのであります。

明治天皇が

をりにふれたる
むらぎもの心のかぎりつくしてむわが思ふことなりもならずも（四四）

をりにふれたる
なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ（四五）

と人生随順の、苦闘の御精神を示させたまひしを仰がしめられ、大御心に摂せられゆく私共の念願は必ず、黒上先生ののこしたまひしわざをつぎまつるべしと信ずるのであります。

昭和五年十二月九日拝誦　田所廣泰

虫

よもすがら鳴きもたゆまぬ虫のねにわれもねぶらであかしつるかな（明治一九）

馬

足なみのかはるをみれば乗る人のこころを早くこまはしるらむ（三一七）

雉

子を思ふきぎすの声をあはれとは狩をたのしむ人もきくらむ（三一七）

杜鵑

ほととぎすきく人もなき山にしもかへりて声を惜しまざりけり（三一七）

野分

九重のにはも野分にあれにけりしづがふせやはいかにかあるらむ（三一五）

夏蝶

咲きしよりはなれぬみれば常夏の花のあるじは胡蝶なるらむ（三一一）

花

散りやすきうらみはいはじいく春もかはらでにほへ山ざくら花（二一九）

落葉

魚はみな底にしづみてもみぢ葉のうかぶも寒し庭の池みづ（二六）

若草

白波のよせてはかへるまさごぢにいつ若草の生ひいでにけむ（三九）

菊

ひと枝はをりてかへらむ旅やかたわがためうゑし白菊の花（四〇）

田家灯

ともしびのほそき光をたのみにて山田のしづは縄やなふらむ（四〇）

虫

さ夜ふかく心しづめてきく時ぞむしの鳴くねはあはれなりける（四一）

虫

なみのおととほざかりゆくひきしほに虫のねたかし浜のまつ原（四一）

杜鵑

ほととぎす雲のよそなるひと声はをちかた人や聞きさだむらむ（四二）

杜鵑

しづかにも聞きさだめよとほととぎす夜深き空に鳴きわたるらむ（四二）

若草

若くさも浦のなぎさにおひにけり波のうちあげしのりにまじりて（四三）

花

しづかにもそそぎし雨はうちはれてたわめる花に夕日さすなり（四五）

あるものをすべてあるがまゝにあらしめつゝ、そを一瞬のわがおもひにきはむるとき、うつしよの物質的障害はそのあ

るがまゝにありながら、内心の信に綜合統一せしめらるゝのであります。これが信であり、信は一超直入如来地のすみやかなるみちであり、親鸞聖人は「たゞ不思議と信ぜさせたまひ候ひぬるうへは、わづらはしきはからひあるべからず候」（末燈鈔）と言はれ、道元禅師は「はるかにこえてきたれるゆゑにさとりとはひとすぢのさとりのちからにのみたすけらる」（正法眼蔵唯仏与仏）と申されたのであります。現実人生は思ふまゝにならぬことのみ多く、徒に時は経過し、身はなすなくして、終ってしまひませう。全生活をみちびきたまふ人生の師は生々をつくしても得がたく、得れば忽ちにして失ふなげきに沈まねばなりません。同志の屍を越えてすゝまねばならぬのがうつしよのたゝかひであります。厭離穢土欣求浄土のねがひのおこることも必然であります。理想世界の憧憬も人間真情の発露であると存じます。しかし、一度、同じく苦しむ人類同胞のあるのに気づきしこゝろは、小さい自己一個の理想追求が、結局はもっともっと大きいかなしみのうちに押し流されてゐることを知らしめられて、再び暗い底知れぬ不安の淵におとし込まれるのです。これが現実の直視であり、いつはらぬ懺悔であります。こゝに求むるものに与へらるゝものは堪へがたき不満の連続であります。そのかなしみも強く求むるもの程ふかく大きいものでせう。しかし、徒にかなしみに沈む間に時は我々に容赦なく迅速に経過するのみです。生命はやがてつきてしまひませう。たゝかひは拱手することを許しません。たゝかひはいまです。遠々の過去はなみだに満ちてたゞいま一と時にきはまらうとし、久々の未来はこゝ一瞬より希望をのせて初まらうとしてゐます。現実世界の不満と急速の時の経過におそれをのゝくたへがたいかなしみから、反省する暇もなく、たゞ一瞬の厳粛なるたゝかひを念じ行ずるとき、部分は全体に統一せしめられ、そこに生るゝ全身の活動、全人生の摂取、それは直ちに現実人生の外的物質的あらゆる障害と苦難と煩悩と差別とを、そのあるがまゝにあらしめつゝ、遠くはるかにこえて一超直入の信となり、自らのはからひを去った自然法爾の宗教生活開展となるのであります。これが「一念の中に備に万行を修する」摂受正法の菩薩願行であり、綜合的人生の生成であり、よろづの悪をいつくしむ大悲の無方化物となりませう。御製の

薄

いづくをかわけてきつらむかへりみる野みちはすべて薄なりけり（三九）

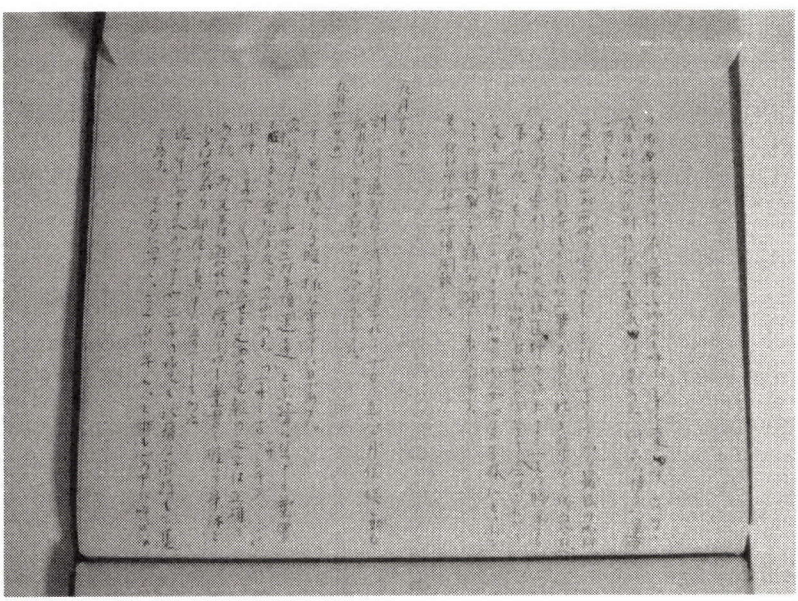
に詠ませたまひし大御心は、この一念の信にかへりみる心に味はる、人生開展を宣ひしものであると存じます。

生きとし生けるものをあはれませたまふ大御心に摂取せられゆきつゝ、道を成ずる為にはたらかしめらるゝ我等の信は一つであると存じます。一つなる故に信でありませう。一つ信に生きゆくはらからは、あらゆる外的羈絆にも拘らず永久に融合協力の一つのみちを貫きゆくと思へば、つたなき身も生命あらしめられ、なき師の御霊の御前にたゞいまの他事なき様を告げまつりつゝ、祈りまつらずには居られないのです。いま、また新に百千万遍の誓を立てんと思ふのであります。

まめやかにわが大君につかへむと誓ひまつらむみ民われらは（復誦）

(三)「昭信会日誌」

――昭和五年九月十一日～十月一日



黒上先生が逝去された当日（昭和5年9月21日）の「昭信会日誌」

【「御製拝誦」翻刻の凡例】

一、本資料は、社団法人国民文化研究会蔵「昭和五年度　昭信会日誌」の九月十一日から十月一日までの翻刻である。この間の日誌は、その字体から見ると、高木尚一氏の執筆によるものと思はれる。

二、資料を翻刻するにあたっては原文を忠実に再録することを心懸け、その方針については、本資料集二〇頁の凡例第二項のもとに行った。

三、日誌中の人名や団体名などの一部については註記を施した。

九月十一日（木）

午后十一時半頃、澍洽会（註、日蓮上人を讃仰・研究する学内団体。藤井信男氏、重松鷹泰氏はそのメンバー）・瑞穂会先輩藤井（信男）兄、西十三（註、西寮十三番の部屋）に来られ、同兄母堂へ黒上先生母堂（代筆）より来た所の手紙を見せられて、先生の御病気重き由を伝へられた。同兄は、十二日朝、四国へ出発さるゝさうである。寮には三年の諸兄も居られず、取敢へず僕の口よりよろしくお伝へ下さる様にお願ひした。何としても心配で堪らず、空しく灯火のみを見守るのであった。

九月十二日（金）

四国へ先生御容態問合せの電報を打つ。

夕方重態なりとの返電到着。嗚呼、我等只神に祈るのみである。

九月十三日（土）

正午頃、梅木氏より御手紙にて先生御危篤なる旨、報ぜらる。直ちに田所氏に速達でその手紙同封通知。

九月十四日（日）

午後より田所氏よりの通知により、信和会廣瀬氏・仲氏、澍洽会先輩重松氏、高師（註、東京高等師範）印藤氏、三年生二年生全部、一年若野君続々と西十三に集り、今日帰京される藤井信男氏の通知を待つ。云ひしれぬ重苦しい気分が室内に満ちてゐる。午后五時半頃、藤井氏のお宅へ上り、未だお帰りにならぬ由承り帰寮。夜に入っても通知なき為、一先づ一同解散する。廣瀬氏・田所氏は甲府を経て四国へ行く事となる。

夕方より降り出した雨は段々とひどくなり、身体が底冷えする晩である。

九月十五日（月）

藤井氏午后六時半頃来られ、先生の御容態につき次の如く語らる。

体温三十八・九、呼吸三〇、脈拍八九にて喉頭結核を起されたるものの如く、若林主治医の御話によれば後一週間位しか持たぬであらうとの事、誠に痛歎の極である。

我等一条の望を持ちつゞけ、ひたすらその後の通知を待つと共に、明日西十三へ一同集合、相談する事となった。

九月十六日（火）

昼食後三年二年一年西十三に集り、藤井氏より先生御容態につきて御話しあり。一同只黙するのみであった。

午后九時頃徳島より

「モノイヘズ　ミミキコエズ　マツタクゼツボウ　コンヤアヤウシ　ゴキガンヲコフ」

と電報来る。我等今更の様に驚愕し直ちに三年生新井、市川、河野三兄に打電し、在寮の二年一年七名はタンク（註、校庭内のボート練習施設で、毎朝の御製拝誦の場所）に集合、静かに降りしきる秋雨の中に御祈りをささげ、河合は明治神宮に参詣した。

九月十七日（水）

朝、四国より、田所兄より佐藤へ電話かゝり、「御容態は依然として危険であって、今日もあやしい。甲府よりたなすゑの道の先生をお願ひして行っていただく事も出来ず、神戸の緒方医師の方の御都合も悪くて駄目であった云々」といふ事であった。（緒方氏は蓑田先生の従兄弟に当られる方で咽喉の方を治療するに特殊の方法を用ひられ、又たなすゑの道もなさるさうである。）

それより後の電話を待ったが何の通知もなく、不安の中に一日は暮れた。

九月十八日（木）

朝よりたよりを待つに何ら知らせも来ず、持ち直されたのではないかと一同の面上にはやゝ喜色が浮ぶ。

夜電報来り「カハリナシ　アスバンカヘル」とある。変りなしといふのでは、まだ楽観出来ぬ。併し帰ってくるのではまだ差し迫ってもゐないのであらうと、一同色々な推量をめぐらしつゝ明晩を待つことにする。

九月十九日（金）

午后六時半頃、田所、廣瀬両兄帰らる。直ちに在寮の諸兄をよび、西十三に集ってもらふ。両兄は交々委しくあちらの事情を話された。

九月十六日の夕方徳島に着き、直ちに先生にお目にかゝらんとするに、祖母上等出て来られ、門口より外に出て、甚だ重態なる為どうしても会はせる事は出来ない、と固く言はれた。そして、御容態はもはや意識を失ってゐられる様にいはれ、今夜はお泊めする事も出来ないから、どうか宿屋へ行って下さいとの事。その夜は止むなく上郡屋なる宿へ泊る事とし、寮へは祖母上の御話しの通り電報を打った。その夜、堀武平先生を訪問申上げ、神のお告げを聞くに「寂滅」といふお示しあり、悲歎の涙にくれた。嗚呼、両兄の心事は如何ばかりであったらう。

翌日母上にお逢ひして、お目にかゝりたいとお願ひするも、祖母上の事を気にかけられてか何ら確答を与へ給はず。その中、宿屋へ一森氏なる阿波商銀の方来られ、どうしてもお逢はせ出来ないから帰ってくれといはれ、もしお逢ひして興奮の余りそのまゝになられたらどうするとまでいはれて、両兄も黙するのみであった。それならば来てゐる事だけでもお耳に入れ（ミミキコエズといふのは祖母上のお話しで、事実、意識は非常に鋭敏にあられたる由）て下さる様にとお願ひするに、お家の方でこれすら断られた。それまで遠くから来られた方には、面会はおろか来られた事さへ一切お話ししてないさうで、すべては祖母上の御意図であるさうである。祖母上の御身になってみれば、先生はたった一人の可愛い、孫であらせられるのである。もしもの事があればと思はれる一念より強硬に断はられる御心情も亦無理もな

い事で、両兄はなすすべを知らず、それでもといふ一念より、故梅木先輩の父上・正衛氏、先生の御親友・名賀石信義氏に尚もおすがりして頼み、愈々駄目とならば思ひ切って先生の御病室に飛び込まんとまで決心せるも、名賀石氏等の御尽力で二人が来て已に帰ったことを母上の御口よりお伝へする所を襖のかげから拝する事を許された。

二人の来たことを聞かれ、しきりに嬉しげにうなづかれ、何事か母上にかすかな御声で云はる、先生を眼前に拝し乍ら、「先生」と呼びまつる事も出来ぬ両兄の心の中はどんなであったらう。痩せ衰へられた先生の御姿は話を聞く我等の眼前にもはっきりと浮んで来るのであった。後できけばこの時先生は「誰が停車場まで送ったか」といふ様な事をきかれたさうである。嗚呼限りなき御苦しみの御病床にありて、片時も我等の事を忘れ給はず、常に会ひたい会ひたいと云はる、先生の御傍まで行きながら、懐かしい御名を呼ぶことすら出来ず、このま、或は永遠の御別れになるかも知れないのである。何といふ情ない運命であらうか。

それから母上が西側の窓のカーテンを引いて下さり、そこから最後の御別れをして宿に引き上げ、もうこれ以上お目にか、れるわけでなく、御容態もや、持ち直されたといふ大久保医師の話により、一先づ帰京する事にした。もし御臨終といふ時には母上の御口より会はこれから先も一生懸命にやって行きますから御安心なさる様に、といふことを御伝へ下さる様にお願ひして来たのである。

その夜は午后十一時頃解散した。

九月二十日（土）

別に何の通知もなく、或は持直されて十月乃至一ヶ月位続くかも知れないと、皆口々に云ひ合ふのであった。

九月二十一日（日）

うすら寒い様ななま暖い様な重苦しい日であった。

家に帰ってゐると、午后三時半頃「速達」といふ声にはっとして葉書を手にとると寮に居る丸谷の字である。「マサイ

チロウケサシキヨ……」嗚呼、くりかへしくりかへし読み返せど文面の電報の文字は正確であった。あゝ先生は逝かれたか、僕はしばし葉書を握って身体をふるはせながら部屋の真中に立ちつくしてゐた。

涙の中に西十三へかけつけるや三年の諸兄も沈痛な面持で集ってゐる。こんなに早く、こんなに早く、と誰も心の中に叫びながら只一同黙するのみであった。窓外の桜の枯葉はうすら寒い夕風に音もなく散って行く。限りない悲しさと寂しさが間断なく我等を襲ひ来るのであった。

その夜はエリーの二階に集り、信和会の廣瀬兄も来られ、先生の御手紙を交る交る拝し乍ら、亡き先生の追憶談に耽ったのであった。

御葬儀は二十七日と決定（電報による）。参列する者は二十五日朝出発する事に決定した。

田所兄、先生のお家よりの御依頼により近角常観先生の御宅へ御戒名を書いていたゞきに行き、午后十時半頃再びエリーに来る。「敬信院釋正法居士」とあった。摂受正法、あゝ先生の御生涯は正しく真に正法に生き給ひし御生涯であった。御戒名等、誰が想像し得よう。併しそは厳然なる現実であった。

九月二十三日（火）

今日より服喪の意を表し、朝の御製拝誦を土曜日まで中止することにする。

九月二十四日（水）秋季皇霊祭

午后六時より学校裏の西教寺に集合。

十四名の会員と廣瀬兄と亡き梅木先輩の親友服部武夫氏来られ、服部氏より梅木先輩の事ども亡き先生の御事等話された。又田所兄は梅木先輩のみまかられし時、故黒上先生の詠み給うた御歌を拝読し、一年半にして親友の後を追はれし先生の悲痛なみ心のしらべをひしひしと胸に感ずるのであった。二十一日は彼岸の入、そして月は違へど聖徳太子の御命日、そして「私は梅木君が死んでから一年半位しか生きてゐないだらう」といはれて居られた先生の御言葉、何と

いふ悲しき因縁であらう。

明日の朝は愈々四国へ出発するのである。当地へ残る者と、行く者と、共にしめやかに語り合ふのであった。東京に居る者は二十七日に近角先生に御経をあげていたゞく事にする。

九月二十五日（木）

朝八時の大阪行で出発。昭信会では田所、河野、新井、市川、荒瀬の五兄と佐藤、高木、河合の八名、信和会は廣瀬、仲の二兄で全部で十名である。

蓑田先生、服部氏その他、二、三の方見送って下さる。沈痛な御別れである。はるばる山越え、海越えて行く先には在りし日なれば手を取って迎へ下さる師の君も空しき御骨となりて待ちますのである。

未だ見ぬ徳島さして行く我を待ちます君のなきぞかなしき

大阪から汽車をのりかへて神戸に午后九時頃着き、先に御厄介になった緒方照雄氏の御宅を訪問す。

たまたま先生のテキストをお送りした綿貫信平氏（神戸市電気局秘書課長）居合はされ、御葬儀の為に弔詞を托せられ、色々痛快なお話をして下さる。亡き先生とは一面識もなき方であられるのに、蓑田先生の原理日本社の同志であらせらるゝにしてもわざわざ弔詞まで寄せられる御心意気に一同感激したのであった。

十二時十分兵庫を我等をのせた船は出た。緒方氏は桟橋まで送って下さる。

九月二十六日（金）

午前五時半小松島着。一睡も取らなかった僕はふらふらである。七時半頃徳島着。一先づ上郡屋に入り休憩の後、花環の相談等を葬儀屋としてから昼近くなって先生の御宅へ行く。

一間に通され、待つ中に母上おいでになり、皆の頭は一斉に下った。

「正一郎は最後まで皆様の御成功を祈って居りました……」

涙ながらに御口を開かれた母上とせき来る涙に両手をついたまゝ頭を上げ得ぬ我等と。余りにも果敢なき運命の犠牲となりし人々はこゝに伏してゐる。眠るが如く安らかなりし御臨終の御有様。常に会の事ばかりを御考へになって居られし御事等次々に話される母上の御話は切なきまでに我等の心にひゞくのであった。

やがて御骨の安置してある御病室へ通される。あゝこの御部屋こそ田所、廣瀬二兄がどんなに御願ひしても入る事を許されなかった御部屋であった。今日は直ぐ通されたが、あゝ併し、一目にてもとお会ひすることを願った先生は我等の前に小さな御骨となって居られる。なつかしき師の君よ。あの桜館で楽しげに我等の集へるを見つめ給ひ、やさしき御声もて御教訓を下されし師の君の御姿は今は何とお変りになった事であらう。

御焼香する間も只夢の如く、悲しげな御線香の火はゆらゆらと立ちのぼる。手を合せてひれ伏す我等の胸には万感こもごも至り涙は止め度もなく流れ来るのであった。

我よべど答へ給はぬ師の君を訪れまつる今日となりしか

御昼飯をいたゞき、梅木先輩の御墓に参る。

静かな墓地の片隅に朝な夕なに眠ります故梅木紹男先輩も、今はあの世で亡き黒上先生と御手をとり合って居られるであらう。「残されし我等昭信、信和会員が参りました。兄の御志はきっときっと我等がついで行きます」と口には云はねど、一同頭を垂れて黙祷するのであった。

梅木先輩の父君正衛氏の御宅を訪問し、御戒名が真言宗の式に従ひ「敬信正法居士」と定められし事をお聞きす。

午后六時頃先生の御宅に上り、御通夜をする事にする。昼間の電報により、名賀石氏は十里の夜道を自転車で来られ、一同の為色々先生のお若い頃の事につきお話しして下さった。

午前十二時より各自の歌を御霊前に読み上げて捧げた。各自の心からなる歌を左に記す。（不参者は代読）

亡き先生の御霊の御前に　　市川安司

思ひこしかへりみすればひたすらに悲しき思の胸にせまれる

師のきみをしぬびまつれば胸せまり云ふ言の葉は知られざりけり
常陸なる水戸の旅寝にちかひてしその夜のことも夢になりしか
かしの実のひとつ心とのたまひしその言の葉の今に悲しき
離れゆく汽車見送りし冬の日の心淋しく偲ばれにけり
師のきみのをしへつゝしみかしこみて我等はゆかむ一すぢ道を
身はたとへくだけ散るとも日の本の国の基につちかひゆかむ
聖皇のみこと仰ぎて師のきみのこゝろ伝へん万代までに

（亡き師の御前に）　河合　徹

雨の日もはた風の日も我が心君が生命の滴を受けむ
唯一の師とも仰ぎし君去りぬ足らはぬ我は如何なるらむ

訃報を聞きて

あゝ遂に逝き給ひしかと一度は口に言へども真と思へず
静かなる秋の夕に唯一人師の霊在す西をおろがむ

教を受けし日を思ひて

愚なる我に向ひてねんごろにさとし給ひし君ははやなし
大いなるあしあと残し君去りぬそを辿りてぞ我は歩まむ

（亡き先生の御霊に捧ぐ）　加納祐五

去りまし、わが師の君を思ふにも闇の中こそゆく心地こそす
かなしともいひつくせざりけり今日こゝにとはの御別する我こそは

ひとたびもあひまつらねどいくたびかみ顔拝せる心地ぞすなる
ありし日の師の君のこといろいろと想ひみるかな友のことばに
師の君ののこしたまひしその道を守るはわれらがつとめなるらむ
ことなかばにたふれし御師を思ふときわれらがつとめ重きをぞ知る
師の君のみたまのもとに今われは誓ひまつらむわがまごゝろを

黒上先生を悼み奉る　桑原曉一

神つ国の大いなる道を歩まれし君が御跡の光あるかな
残されしわがはらからは何にかせん秋風寒く身にしむ頃かな
師の君と君が御名をきゝしより幾日かへぬらむ君ぞ恋しき
師の君のわがはらからにのこしまし、太子讃仰の御書尊しや
御名はき、御意志(こころ)しぬびくらしにき御顔は知らず淋しきわれは
いく久に君が病みてをおはせしはわが見も知らぬ徳島の国

(一)例会に先生の御偉大なるを話されて　佐々木正治

師の君のいまさぬ為か吾が心ともする度にゆるがんとする

(二)夏休み中の宵に

ともどちと離れてありし神戸の町にひとりさびしく師をば慕ひつ

(三)訃報を聞いて

いかなれば神は師の君連れ去るぞ師こそ真の国民なるに
遠く低くひゞく上野の鐘にまで何故か今宵は胸のときめく

（四）服部氏に師のありし日を聞きて

師の跡を聞きてかなしみ尚まさる今宵の床を如何になすべき

（五）逝きし師に御ねがひ申すべく

師の君よ去りし後にも吾等をば援け導き啓き給はれ

師の御前に捧ぐ（註、作者不詳。河野氏か新井氏か）

忘れ得ぬかの追悼会の夜なりき師の御病の起りしもとは
今も尚その夜の寒さ忘られず背中も手足も凍えし寒さを
熱出で、臥し給へりと聞き驚きて御宿訪ひしはその翌日にして
かへりゆく医師の言葉にかりそめの御病とのみ吾は思ひぬ
四五日もた、ば必ず治らんと君自らものらせしものを
五日たち十日たちても御病の怠らぬのに吾いぶかれり
かりそめの風とは云へどいぶかりてくすしの顔をしばしまもりぬ
なをりませ一日も早うと祈りつ、氷割りしも昨日の心地す
徳島に帰りまし、を聞きしとき吾は画きぬ亦あはん日を
それよりは毎日の如師の君を祈らぬ日なし朝に夕に
師の君の母上よりの御便りをひらく間おそしと友と読みけり
師の君の母上よりの御便りをよみて御病の様をしのびし
師の君の御病の様細々とよめば自らも病める心地す
師の君の御病の様偲びてはわれ師に代らんと願ひしものを
春来れば向ヶ岡になつかしくわが師迎へんとわれ等思ひし

懐しく師の御手とりて向陵に迎へまつらん日を待ちしものを
懐しきわが師の君をしぬびては朝夕にわれ等励あり
春来り若草は生えど向陵に師の御姿のなきぞ悲しき
秋来り木々の梢のさびしきに君の悲しき知らせ得しかも
師の君の悲しきしらせ手にとりてしばし黙しぬ心静めて
師の君の悲しきしらせ手にとりて夢と思ひぬたゞ夢とのみ
夢にてもあれかしとのみ思ふかなすこやかにまし、昔偲びて
思ひ出は遠き昔をしのびけり始めてわが師を知りしその頃
手をとりてわれ等導びき給ひてし師のみ心は忘らえぬかも
本郷の通りをわれ等とその昔行きまし、夜忘らえぬかも
送りては門の外まで来たまひし師の君なりしわが師の君は
送りては必ず門まで来たまひしわが師思ひて懐しむかも
師の君の去りましてより思ふかなわれ等が責(つとめ)のいかに重きを
師の君の遺し行かれし大業をわれ等継ぎゆかん共に助けて
師の君のみ魂は今や亡き友のみ魂と懐しく語りますらん
天にます吾が師のみ魂よやすみませわれ等助けて共に進まん
天にます吾が師のみ魂よまもりませわれ等が信を世にひろむため

黒上先生逝き給ふ

高木尚一

天にますみおやのみたまよ知り給へあ、師の君は逝かれたるなり
たのしみをのみ求め居る世の人よ知らずや我が師は逝きまし、なり

かなしみの知らせ手にとりわがからはしばしはげしく打をの、きぬ
苦しみに耐へ忍ばれし師の君も今はあへなく逝き給ひしか
はかなくも道のしるべの山松は夜半の嵐に吹き折られたり
くるしみに終り給ひし御身かな師よ安らかに眠り給へよ
一葉一葉散り行く木の葉見つめつ、我らひとしくもだしけるかな
ひたすらにみのりかしこみ仰ぎつ、失せ給ひける我が師悲しも
あひまつる日のみ待ちける我らみな今日のありとは思はざりしを
ひととせに余る我が師のはぐくみは拙き身にもいよ、しみ行く
いまと、せ生き給ひせばかぎりなき君がみ光いやそふものを
我よべど答へ給はぬ師の君をおとづれまつる今日となりしか
未だ見ぬ徳島さして行くわれを待ちます君のなきぞかなしき
いふまじきくりごとなほもこみ上げてみふみとりまく我らはらから
亡き君のみちからしのび我らたゞ淋しく明日のつとめをぞ思ふ
成らざりしみこゝろざしを抱きつ、共に身を捨て我ら進まん
春来なば花咲く里に師の君はうかる、人を見つめ給はん
安らかに眠ります師よとこしへに我が日の本を守り給へよ
つとめなむ師の君共にまさずとも日に日に我ら心あはせて

亡き師の君のみ霊の御前に　　田所廣泰

手をあはせ神のみまへにをろがめど祈りしことばいまはせんなし
めをつむり君をおもへばさやかなるみこゑきくごときこゝちするかも

いまはなしいまはやなしとくりかへしくりかへしいへどいますがごとし
かなしみの底にはあれどなつかしきこゝろに胸はうちふるふなり
十年だにながらへませばあらたまるみ代の姿を見せまつらむに
力なきわれらのこしていかばかりみこゝろいため君逝きましゝか
み姿の見えずなりにしこのときにみ名をよばはむはあゝたゞかひなし
みこゑさへきこゑずなりしこののちはのこしのみふみたゞよみまつらむ
秋の夜はありし昔にかはらねど君いまさざればわれいかにせむ
筆とればまたふみ見ればなき君のことのみ思ふ他はおもほえず
袖ふりて月冴えわたる秋の野になき君しぬび舞ひいでなむか
世はくだち人は死すとも日の本の国をまもらむなき人しぬびて
三十とせの上は生きじとこの後のつとめをはげまむなき人おもひて
なきたまをいつきまつらむ聖王のみのりを友と誦しまつりつゝ
生きてゆくわがよろこびもかぎりなきかなしみうちにたゝへてあるらむ
うつしよにあひがたき師をうしなひてのこりしわれらたぬしさしらず
師なき後はたゞはらからぞ力なるのこしのみをしへいたゞくわれらは
いくたびかわかれしときのさびしさも世にますときはなぐさまれしを
われいかにながく生きむとて師の君にあひまつるときはとはに来らず
わが生きの長きはかへりて苦しきに早く果てなむみ国につくして
生きてゆく時はみじかくとも大君につかへまつらむみちはおこたらじ
身を粉にうちくだくとも大君につかへまつらむみちはおこたらじ
師の君のいまさぬ後はいかにしてのこしのみをしへ守りゆかむか

わがおもふことなるときもこゝろよりつげまつらなむ師ははやあらず
またくたゞ何をたより師の君のいまさぬあとをわが生きゆかむ
いさゝかも師のいたつきのおこたれといのりし日かずは長くありしか
朝な朝な神のまもりをいのりつゝ友とまうでし夏の日をおもふ
さやりなき果てなきみちを一すぢにつきつらぬかむねがひはかたし
たゞ一つその他はあらじわがみちは難くわが身はつたなくあれど

師の御霊の御前に

丸谷博吉

師の君よしづまり給へやすらけく我ひたすらにそを祈るなり
師の君よやすけくねむり給へかしのこせし業はわれらつぐなり
師の君の進みし道を末とほくをさめひろげん何はありとも
重けれど我小車をひきゆかん奥の細道草生えぬまに
末遂に致らざらむや師の君の望みつゞけし彼のいたゞきに
昨日まで病いゆるを祈りしに師の君遂に逝き給ひしか
かれこれと君をもとにてはかりてし事も空しき夢となりしか
目になみだうかびこねども淋しさは胸にしづみて居苦しきかな
師の君の我よび給ふなつかしきみこゑいまだに耳をはなれず
思ひ出はなつかしけれど君すでになしと思ひてかなしくなれり
田井の浜に共に遊びしあの頃は師の君いまだ元気なりしを
なつかしきあが師の君はねむらする眉山の下よしづけからなむ

亡き師の君の御霊の御前に　　若野秀穂

みまかりしあとをかたりておもふかなもろてにかゝるおもきつとめを
みやまひのおこたりますひおもひてはみちのつとめにはげみたりしに

黒上先生の死に逢会し奉りて　　山縣義雄

向陵に集ふも悲し昨日今日をしへの父のなきを思へば

信和会の廣瀬、仲両兄も交々読まれ、最後に名賀石氏御霊前に進まれ、悲痛なる口調にて訣別の辞をのべられた。氏は親友梅木氏を失はれ、後に残られたる無二の親友黒上先生をもこの度失はれ、それより先二人の御兄弟を失はれてたった一人になられたのである。淋しき氏の涙にくもる御声は我等の身に堪らない程の切なさを与へたのであった。母上、祖母上は次の間にありて聞いてゐて下さった。これが二十七日午前二時半まで続いた。

九月二十七日（土）

午前六時半頃朝飯をいたゞいて宿に帰り、一休みする。十一時半頃先生の御家に行き、それから徒歩で佐古町清水寺に行く。眉山の山のはづれに位する大きな寺である。我等十名は特別の御計らひにより御親族の席に連り、御親戚同様のお取扱ひをうけた。

午后二時より読経と共に告別式が始まる。一般会葬者多きも親族の方々少く何となく切ない様な淋しさがたゞよってゐるのを感ぜざるを得なかった。亡き先生を真に理解せられた人々の如何に少かったかを明らかに思はざるを得なかった。あゝ不遇なりし短き御一生、苦の連続に終り給ひしその御一生はかくも淋しき御葬儀によりて終るのか。本殿の奥に入って高い壇の上なる御骨を拝しつゝ御焼香する時「師の君よ怠慢なる私達をどうかお許し下さいませ。必ず御志にそひ奉ります。けれどあゝなぜそんな高い所においでになりますか」と心の中にくりかへしくりかへし叫びつゝ涙にく

れるのであった。この式がすめば師の御骨は永遠に冷い墓石の中へ納り給ふのである。

やがて午后五時頃となり諸式も済んだ。その時故梅木先輩の姉上来られ、言葉少なに、けれども萬感のこもれる御挨拶をなさった。不遇な御身の上にあられ、この度我等が行った時御弟君の後輩たる我等を非常に懐しく思れて居られる御様子であったが、父上に遠慮されてか御話しも出来なかった。今その場所へ来られ「もう今夜は御見送りも出来ませんが、皆様どうか黒上のこゝろざしをよくお守りになって御勉強なさって下さい。そしてどうぞ黒上のお母さんを出来るだけ慰めてやって下さい。……」ととぎれとぎれ云はれるのであった。一同面を上げ得ず御別れを惜む中、早くも御納骨といふ知らせに立ち上り墓地へと行く。

古いお墓の前に我らと御親族の方々居並び、住職の誦経の中に母上の御手に持たれたる御骨の壺は小さな穴から入れられるのであった。台の下の小さな穴には石の蓋がされ、我等たゞ茫然とお水を上げて礼拝した。夢の様である。全く夢の様であった。

式の最中、天も亡き先生を悼みて号泣するのかと思はれるばかり烈しく降った雷雨も晴れ、眉山の上には夕陽にあかく染められた雲がかゝってゐた。これから後は何時も先生をこゝに訪ひまつらねばならぬのか。花は咲き花はうつろひ幾星霜はうつり行く中に永遠に永遠に師の君はこゝに眠りますか。静かに我等は引き上げた。夕闇の次第に迫り来る墓地をはなれて。

弔詞

今日の弔詞は昭信会（田所兄）、信和会（廣瀬兄）、三井先生（長詩—新井兄代読）、菅先生（佐藤代読）、蓑田先生、水野龍介氏（歌—市川兄代読）、綿貫信平氏（御親族西田氏代読）、弔電は松本彦次郎先生よりのだけをよみ後は略す。以上。

昭信会よりの弔詞及び三井先生の長詩をこゝに載す。

弔詞

昭和五年九月二十七日、第一高等学校昭信会々員一同謹みていまはなき黒上正一郎先生の御霊のみ前に告げ奉ります。

黒上正一郎先生。先生は既にこの世の人にましまさぬか。共に声を集へて御名をよぶとも、うつしごゑにみいらへなき、なき人数にいり給ひしか。いまははや師はいまさずと、いくたびかくりかへし心におもひ口に言へども、なほいますが如く、なつかしきこゝろはかなしきこゝろと共に、亡きみ霊よびまつる私共の胸にわき来るのでございます。目をつむり静かに在りましゝ日のこと思へば耳もとにさやかなるみ声きくごときこゝちがするのでございます。あゝ、先生は遠く逝きたまはず、永久にかの日のごとく共に在して私共を導きたまふのでございます。

憶へば昭和三年春、聖徳太子の御講義に集ひて、稀有のおもひに導かれしより二年又半みじかき年月にも師弟のこゝろの交通はあまりにもはげしく、師友はこゝにかたきちぎりを交して、もろ共に祖国日本の為に起つべきときを勇躍歓喜して期待しつゝありしに、早くも先生は、かぎりなき哀痛に力なき私共をのこして逝きましゝか。このみじかき年月に師資相承の真実はいまつきせぬ言の葉を、かなしみの底よりみ霊の為にみ魂喚ばひの詞として、また私共の為に誓ひのことばとして捧げまつることをきこしめしたまへ。

求めつゝも深きまどひに、願ひつゝも心くらく、将来日本青年のつとめを知らざりし私共に先生ははじめて共に帰趨すべき道をひらき示し、悲壮の決意を促がさしめ給うたのでございました。一度世に稀なる師にあひまつりしより、祖国日本につくさむとする私共の進むべき道は、太子、天皇の大御教をかしこみ仰ぎ、心も身をもさゝげました。新しき会設立の日をまちつゝ、撫養に病を養ひ給ひし梅木紹男先輩を訪れ、こゝにまた師の君を助けて私共を導きたまふ先輩の在すにあひしとき、私共のよろこびは如何ばかりであったことでございませう。しかるに、かなしくも師と共に先輩の訃を悼みしは昨日のことゝしか思はれません。その後はなき先輩のみこゝろを偲び、かなしく雄々しき発会の式を向陵の地にあげしは昭和四年五月五日でございました。先生はこの頃より次第に太子讃仰の御研究をあまねく流演せんと、日夜たゆまず筆をとり給ひしが、新しき同志を迎へて私共を導き給ふみこゝろはまことにことばにつくしがたく、この間にもか弱きみ身体は幾度か病にをかされ給うたのでございます。十二月七日、悲しみの涙を新にして梅木先輩の追悼

の営みを一高内でいたしましたときふとした風邪となられましたが、それがけふのみまかりにみちびくべしとは誰が思ったことでございませう。郷里に病を養ひたまふ師を偲び、たよりします僅かのみことばにみち示され、私共は再び新しき友らを迎へ、二回の合宿をいとなみました。よろこびとかなしみとの交代、それは力なき私共には堪えられぬ重荷でございましたが、くはしく告げまつる術さへなく、殊に重りたまひし夏の頃より朝夕に神垣まゐり、又は手をかざしてみ病のひたすら怠れとそれのみを念じて居りましたのに、早くもあゝかくなりますとは。いまこそ、あふぎいたゞきしみ二人の一人もいまさずなったのでございます。言ひのこすべきことのかぎりなしとのたまひつゝ逝きたまひし師のみこゝろは思ふだにかなしきことのかぎりでございます。あゝ師は、またさきのなき君は、たゞ大御教を会につたふるを貴くみじかき一生の使命として永久に逝き給ひしか。されどなほいますかに思ふのでございます。

あゝ師いまさぬ後、のこるはたゞみ教。ありし日に教へたまひしみ教をいたゞきまつり、のこし給ひしみこゝろつぎ、ひたすらに聖徳太子、明治天皇の大御心にすべをさめしめられつゝ、まめやかにわが大君につかへまつらむと、たゞならぬいまのみ国に将来日本青年の進むべき一すぢのみちを、自らのはからひすてゝ相共に心あはせ悲しくをゝしくすゝむべきをいま、いますがごときこゝちして告げまつることをきこしめしたまへ。私共の命もまた露よりももろく、事成るにつけて告げまつり共によろこび給ふ師なき後のはかなき一生を、生きながらへむこゝろもあらず、身はよし粉とくだくるともみ国につかへまつらむわざおこたらじと、心に決しちはやぶる神にいのるこゝろをしろしめしたまへ。若くして逝きまし、師の君のたへがたき苦とたゝかひたまひしかなしき生は、のこる私共のこのつたなかれども融合協力のはらからの生活を通して、ちはやぶるわがしきしまの国のいのちにいそゝがれ、貴きみ魂のみ光はゆくすゑの祖国日本にあらはるべしと信ぜしめられつゝ、いまはなきみ霊のみ前にかなしくさゝぐることばをきこしめしたまへ。

昭和五年九月二十七日

第一高等学校昭信会々員一同

（田所兄謹書）

三井先生長詩

黒上正一郎兄のみ霊に

三井甲之

我がふる里の村はづれ
水も乏しき山川の末の河原の乙羽(オトハ)の渡(ワタシ)に
君を送りて行きし我は
遠く歩むにたへずして
人をして君送らしめ
我一人
家路をさして帰りゆくを
君は堤の上にとゞまり
我が影の
見ゆるあひだはたちどまり
見送りまし、と
君をおくりし人はかたりつ。
そをき、て君の心のかなしきを
われはしぬびき。
夜もふけて
聖徳太子の御すがたのまへ
こまかにもいやつぎつぎに
君がかたることばのすべてををさむるは

我には力及ばざりき。
あるはともに宴のむしろにつらなりて
君のすくよかなるを喜びしも
おもへば去年のことなりき。
かくのごとく君のからだもこゝろも力にみちたりしも
あゝ君はあまりにもつとめたまひき。
梅木うぢの追悼のあつまりに
なつかしき第一高等学校講堂に於いて
おごそかに魂喚の儀礼ををさめしとき
君の心ははりつめられてつかれまさむと思ひたりき。
そのつどひより帰りゆく我を停車場に送りたまひ
学生の群にかこまれて
都大路を下駄ふみならし
歩みましゝ君の姿よ。
あゝ君の生活はこゝに高まりつゝ
外にはしるき輝きしめさずといへども
内にはたえざる永久の生命を
まもりそだてたまひき。
み国のいのちを
せおひになひてゆくべき
青年の心よ

永久の生命(セイメイ)を
うゑつけたりし
君のいさをは
しきしまの日本(ヤマト)のいのちとともにとこしへならむ。
人生は無常にして
苦(クルシミ)多く楽(タノシミ)少しと
聖(ヒジリ)も説かせたまひしかども
君の一生は
けだかゝりしも
あまりにもいたましかりしよ。
『群生(グンジョウ)と苦楽をともにす』とふ
ひじりの言葉を
身に体験してゆきまし、君のみ霊は
いま
この世の
また現身(ウツシミ)の
束縛(ソクバク)をはなれて
さやりなく天(アメ)がけりますらむ。
きはみなきみ国のいのちまもらせたまふ
神々につらなりて
天かけりますらむ。

われら今
久方のみ空をあふぎ
手をあはせをろがみまつらむ。
われらの合せたる手の手末(タナスエ)は
ひゞきくる
雲路(クモヂ)の波の
五百重波(イホヘナミ)千重波(チヘナミ)しきに
繁き思ひ言あげせむに
はてしもあらず
はてもなき思ひをつなぐ
君のみ霊に。
君のみ霊よ
目守(マモ)らせたまへ
われらの業(ワザ)を。
われらは君のこゝろざしをつぎて
此の世にありて
まめやかに
我大君に
つかへまつらむと
ちかひまつらむを
目守(マモ)らせたまへ。

われらは
日の本(ヒノモト)のいのちをしぬび
日の本の御名(ミナ)をよぶとき
君をしぬばむ
われら君の友らは。
君をしぬばむ
日の本のいのちをしぬび
日の本の御名をよびつゝ。

かくて又も先生の御宅により、悲しき御位牌の御前に最後の御別れを告げた。母上も祖母上も限りない御悲しみの中にありて「御機嫌よう御立ちなさいませ」とくりかへし仰せられるのであった。我らたゞ御二方の御身体をひたすら気づかひつゝ、なつかしき御位牌の前を去った。「敬信正法居士」と線香の煙の中に浮び出たる師の御かたみのみ前を去って停車場へと向ふ。最後まで我等の為御好意をよせて下され、親身も及ばぬ程やさしくお話し下さった名賀石氏とお別れするのも又辛かった。「皆さんの成功されるのをせめてもの楽しみにして山の中にこもって居ります」と、やはらかい当地特有の口調で淋しく言はれるのを聞くと堪なくなるのであった。

母上、西田氏、名賀石氏に見送られつゝ我等の汽車は徳島をはなれた。

連絡船は行きと同じ船である。静かに静かに小松島の灯火を後にして遠ざかり行く船の上に我等は立ちつくしてゐた。その灯火の見えなくなる頃、彼方の山の上がほの明くなってゐる。正しく徳島のあかりである。懐しき徳島、先生のみ霊の永へにしづまります所、母上祖母上のいます所、そして名賀石氏、梅木先輩、姉上のいます所。あゝ四国の地は次第に遠ざかり行く。又来ん日はいつの日か、新しき友は後から後から迎へる事も出来ようが、先生は拝する事が出来ないのである。

偉大なりし先生の御足跡をたどる我等の力余りにも拙いのを如何せん。只「むらぎものこゝろのかぎり尽してむ……」とのたまはせられたる明治天皇の大御心を体しまつりて進まんのみ。

夜風寒く身にしみ船は鳴門の速しほに乗って揺れる。あゝ亡き先生の熱烈なる御意気を持続するは只我等あるのみ。全日本を風靡せんとする世の濁流よ来り我等に抗せよ。我等互に手を合せ心を合せてその流を防ぎ止めん。

九月二十八日（日）

夕方帰京。各自、自宅に帰る。

九月三十日（火）

本日より御製拝誦始む。

十月一日（水）

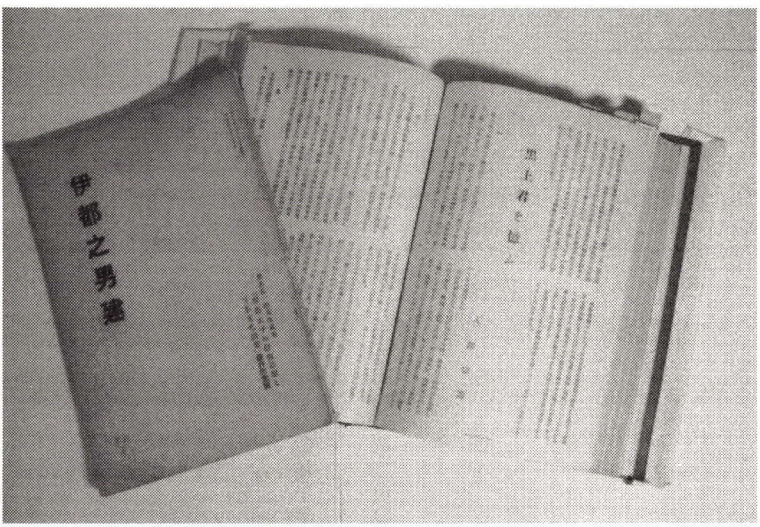
第二回例会（讃仰研究発表　佐藤）

（聖徳太子信仰思想と教化精神）

悲しみの中にも我等は例会を続けて行かねばならぬ。本日第二回例会を午后六時より開く。会する者十二名（中、信和会より廣瀬兄）

研究発表後徳島よりいたゞいて来た先生の御好物なりしカステラの御仏前にそなへしものをいたゞき今更の様に亡き先生をしのびまつるのであった。（以下略）

(四) 黒上正一郎先生追懐録



黒上先生の追懐録を掲載した『伊都之男建』昭和9年9月18日発行号（右、同年分の合本より）と、同昭和10年7月20日発行号

【「黒上正一郎先生追懐録」再録の凡例】

一、本資料は、社団法人国民文化研究会蔵『伊都之男建』第三巻七号（昭和九年九月十八日刊）および第四巻四号（昭和十年七月二十日刊）の中から、生前の黒上正一郎先生を偲ぶ上で重要と思はれる追懐録を抄録したものである。

二、資料を翻刻するにあたっては原文を忠実に再録することを心懸け、その方針については、本資料集二〇頁の凡例第二項のもとに行った。

三、追懐録中の人名などについて註記を施したものがある。

随得隻想（抄）……井上右近[1]

＊『伊都之男建』[2]昭和九年九月十八日号（第三巻七号）

故黒上兄との御交際のことを追懐しつ、往事をたどって見る。

これも今は故人であるが世界大戦当時同窓なる京都の橋川正[3]兄は句仏上人の俳句雑誌中の和歌欄の選を担当してゐた。その歌欄に見ゆる歌の中で、単なる叙景歌でなく、そこに叙情的乃至宗教的の言葉を見出した方に呼掛けたくなり、橋川兄に処をきいたりしたかと思ふ。それは服部杏枝、黒上正一郎両兄であった。

その当時また橋川兄が『親鸞と祖国』[4]誌を発行するやうになり、それにも言葉を見せられたのは黒上兄であった。『大信海』などいふ語を用ひられたので故木村大人の許で有縁の方であると語りあひ文通したことが機縁となり京都にて黒上兄の御来訪を受けた。

黒上兄は其後東上されて木村兄の御推奨により松本彦次郎[5]兄にその研究指針を仰がれたことである。

黒上兄はもとより聖徳太子について又菅公について自分に語られた。『不請之友』『相救』といふことを度々いはれた。

黒上兄と莫逆の友なる故梅木兄の御来訪をも受けた。徳島毎日の小西英夫兄の手で雑誌を発行されたこともあった。小西兄にはお目にかゝらねど今も青人草誌を読まれつゝある。

黒上君を憶ふ……入沢宗寿[6]

＊『伊都之男建』昭和九年九月十八日号（第三巻七号）

一

黒上正一郎君逝いて満四箇年、月日の過ぎ行くことの早きに全く驚くの外はないが、時にふれ、機に応じて同君の夭逝を偲ぶの情はいよいよ深い。特に今日の日本精神時代、仏教復興時代に際して、せめて今日まで同君を生かして置きたかった。業績をこれから天下に発表すべき時に長逝して了ったのは何といっても名残惜しい。

私は同君を友人知己に紹介する時、国史科と仏教科を兼修した若き学者、学殖と識見とに於て若い国史家、仏教家の何れにも優れたる者として披露した。私はこの両学に対して専門外であり、同君との交友も同君の生前数年に過ぎなかったが、確信を以て斯く紹介し得た。それ丈け同君の夭逝を惜むこと切なるものがある。

二

この国史学も仏教学も独学でやったものであるが、併し親しく地方の高僧につき仏書に関して教を乞ひ、講習会等を利用して識見を高めることに努めたやうである。私が同君と懇意になる始めも徳島県下の講習に於てゞあった。

大正十五年三月、同君二十六歳の年である。脇町の講習会に行くべく小松島から汽車にのると、私に話しかけた地方の青年、それが黒上君であった。脇町で二日同宿した。その夏同県海部郡日和佐町の講習では五日間同居した。徳川時代の師弟関係が斯くて結ばれたが、前述の国史と仏教との素養から日本教育史研究を私も勧め、同君もその気になり、その業績が先づ『教育思想家としての最澄と空海』（翌昭和二年十月十二日東大教育学談話会講演）の発表となって現はれた。この講演の最初の部分に於ける同君得意の聖徳太子からの論述は特に聴者の注意を喚起した。

三

日和佐の講習からの帰途、小松島で一憩、一緒にビールを飲み、将棋を闘はした。共にヘボ将棋ではあるが、技量伯仲、東京での再会を期して別れた。一昔前の思ひ出であるが、小松島の海浜を案内されて廻って見た記憶はあざやかに残ってゐる。これが講習会から解放されて、親しく語り合った最初の印象であるからである。

この十五年の冬に上京するとの事で、将棋盤を買って夏から待った。黒上君の好学心は母上、祖母、親戚にはゞまれて上京を抑へられて居たのであるが、翌年の三月同君の切なる招きに応じて三人の子供諸共船場町の同家を訪れたことも手伝ったのか昭和二年からは時々帰る外、在京の日が多かった。その間、研学と共に瑞穂会、昭信会などに学生を指導し、日本精神時代の基礎工作に努めたのであった。

同君が蒲柳の質であったことは何人も知るところであるが、その為め小松島以来共にビールを呑むことは殆んどなかったけれども、将棋は屢これを闘はした。平素は極めて慇懃なる同君が、将棋で熱して来ると言葉が荒くなって別人のやうになるのは妙であった。蜜柑を貪り食ふこと、学問の話に熱中すること、それらは同君を知るもの丶注意を惹いた所であらう。蜜柑はい丶が、研学のために夜を徹し病をも構はず不養生なのには友人が皆忠言した所であった。

四

私が同君を知って以来、その死に至るまで数年に過ぎないが私の居を訪れて呉れたこと無慮数十回に及ぶであらう。私も亦同君の下宿や瑞穂会の宿所や少くとも数回は訪れ、前述の如く子供を連れて船場町の黒上家を訪ひ、共に撫養と鳴門に遊び、自称天狗様が船に酔ひ、摩耶山登りにヘコタレて私の子供がカラカった逸話も有する。カラカひ合った子供が三人共、大学と専門学校に進んで、昔語りを『黒

上さん』に対してする時、『黒上さん』が親切に子供の入学試験発表を見に行って呉れたことなどを想ひ起す。学問と思想とに熱心真摯であった黒上君が、人として親しみあり、しかも身を持する厳であったことも吾々に教訓を与へる。

五

教育研究に関する方面の業績としては前に述べた教育学談話会に於ける講演に基いて新に詳しく執筆した『教育思想家としての伝教大師』（教育思潮研究第一巻第二輯三七頁―八七頁）『弘法大師の体験過程と青年時代の教育論』（同第二巻第一輯一三〇頁―一四五頁）『教育思想家としての弘法大師』（同第三巻第一輯八〇頁―一二六頁）の外『親鸞上人に於ける教育思想の展開』（昭和四年二月二十日東京帝大教育学談話会講演）がある。

この昭和四年に私が外遊を命ぜられた時の同君の失望は、全くガツカリした状態に見えた。私は二年といはず、一年程で帰るからと慰めたが、如何にも落胆した面持であった。かくて元気なく三月二十八日神戸出帆の白山丸甲板に私を送って呉れたのが、此の世に於ける永久の別れであった。

私は約の如く一年にして翌五年六月帰朝した。併し同君は郷里に病んで面会謝絶だといふ。私が会って病を重らすやうではと、郷里に帰る序でもあったのに特に見舞はなかったが、九月二十一日遂に起たざるに至った。

私の居なかった一年間の彼の動静、心境、業績、聞きたいことは山ほどあるが、幽明境を異にして聞くすべもない。東京に於ける追悼会の際は我病んで臥し、彼を知り彼と語り彼と遊んだ長男と甥とを代理としてやるの外なかった。数年の交遊ではあるが、同君に取っても私にとっても絶えず尽きざる想ひ出である。同君が志した日本教育思想史研究は私自身も受け継ぎ、又志を同じうする士をして研究させて、永久に同君を記念したいと思ふ。

黒上正一郎氏の印象……田中寛一[7]

＊『伊都之男建』昭和十年七月二十日号（第四巻四号）

徳島の一素封家の一人子として生れ、早く家督相続をする必要上、商業学校に教育を受け、卒業後一個の銀行員であった黒上氏が親鸞に学び、聖徳太子の研究に没入せられたことは同君が並の人でなかったことを物語って居る。この事からすれば、三十歳に満たぬ若さを以て或は一高に或は高師に君を中心とする一つの信仰団を組織せしめるまでに青年たちの心を動かされたことは偶然ではないとおもふ。

徳島から上京せられると、よく私の宅を訪ねられたので

あるが、あの素朴な、辺幅をかざらない、そして話に熱のある所が、いつとなく私の心を引きつけて話が二時間以上にも及ぶことが少くなかった。君の話の中には信仰者によくある所の独断がなかった。何処までも事実に即して行かうといふ所が表面に現はれて居た。それかといって又学者肌の人にある様な冷たさではなくて、奥にある信仰の力強さのひらめきが随所に現はれた。私は思ふ、君は理智と信仰とを程よく調和させた人であったのだと。

君が屢々私を訪ねられたのは私の如きものからでも研究上参考になる何かを得ようと考へられた為であったらうとおもふ。処が与へる所が尠くて、却って啓発せられる所の多かった事を思ひ、慚愧に堪へない。

君の様な頭のよい信仰心の強い人は世に稀れである。三十一といふ若さで隠れた偉人として唯一部の人々の心に生きて居るだけであることは誠に遺憾である。此度、一高昭信会の人々によって君の遺業の一部が世に出る様になったことはせめてもの心やりである。そして、これによって君の遺志を大成する人が出る様にと祈ってやまない次第である。

太子の信に生きた黒上君……志田義秀[8]

＊『伊都之男建』昭和十年七月二十日号（第四巻四号）

私がこれまで多くの信の人に接した中でも、故黒上正一郎君ほど全身是れ信といふやうな感を懐かしめられた人は少ない。黒上君に接すると、いつでも黒上君の一言一句一挙一動が悉く黒上君の信の発現であるといふやうに感ぜしめられたのである。黒上君は、人としては、飽くまで真面目な、誠におとなしい、誠に謙遜ぶかい、言葉遣ひの鄭寧な人であった。それでゐて黒上君の凡ての言葉や動作から、底ぶかい熱を持った信の力の迫ることを感ぜしめられたのである。人から感ずる熱にも圧せられるやうな熱もあるが、黒上君から感じた熱は、脈々としてこちらの内心に滲透して来るやうな熱であった。かうした熱はさめ難い熱であるやうに思はれる。いついつまでも内心に残る熱であるやうに思はれる。私は之を底ぶかい熱といひたいやうに思ふが、黒上君の感ぜしめられた熱は、かうした熱でこれは全く黒上君の信の力の持つものであったのである。

私は黒上君とは、岡山で接し京都で接し東京で接し前後可なり長い間の交りであった。その間黒上君から受けしめられた感は前後一貫更に変らぬものであった。黒上君に接するいつでも君によって浄化されるやうな感を懐かしめら

れた。この間黒上君の聖徳太子讃仰はいよいよ進むばかりで、君に接するいつでも、君は必ず太子について語られた。私はそれによって啓発せしめられ感激せしめられたのであったが、斯くて君は太子の信に生き、それを現代に生かさうとし又まさしく生かされたのである。

然るに黒上君は、その語られる所書かれる所によってこれから愈々同信を得らるべき時に当って、宿痾の為めに少壮の身を以て逝かれたのである。君を親しく知る者の驚き悲しみは並大抵ではなかったが、人生の常唯歎き惜しむの外はなかった。併しながら君の肉体は此の世を去っても、君の信は君に親しく教導を受けられた人達に承け継がれて居り、又君の述作としても書き遺されてゐる。『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』はその述作であるが、之を読まれる人は、おのづから黒上君の信に生き、同時に太子の信に生き、之を現代に生かされるに相違ないと思ふ。

黒上先生の印象……飯田義資[9]

＊『伊都之男建』昭和十年七月二十日号（第四巻四号）

○

黒上先生と私との交渉は縦令其の期間は短く回数も僅少であったとはいへ先生にお会ひする機会を恵まれた神の思召に対して生涯の幸福として今も心中深く感激してゐる次第である。未見の同志の方々に先生の俤を髣髴させる事は我々親炙するの倖を得たもの、唯一の責務とも考へ敢て冗漫を顧みず当時の日記を辿って暦年順に追憶の筆を執った。不文多謝。

○

仏教研究家として、徳島には珍らしい学者として、且は商業学校出身の変り種として、先生の御名前を知ったのは大正十一二年の頃であった。

○

大正十四年八月一日から五日間第三回撫養夏期大学が板野郡公会堂芳鳴閣で開かれ其の一科目として六高教授松本彦次郎先生が『明治文化史論』の講義をせられた。私は当時板野郡に奉職して居たので参聴したが其時先生は梅木君――大正三年一月から三月まで私が教生実習の為配属された附属の尋六男の学級に梅木君が居た――と外に二人（確か四人であったやうに思ふ）の学生と一所に出席して居られたが梅木君に紹介されて初めて其の温容に接したのである。其の時の私の感じは何だか前から知って居た人に久しぶりに出会った様な親しみと懐しさとを覚えた。而も先生は今後色々御指導を願ひ度いといふ謙遜な言葉を使はれたがそれが単なる社交的辞令や慣用語とは思はれなかったの

で私は何だか恐縮汗顔の至に堪へなかった。

其時梅木君は病気で休学して居たがもう恢復したので近い内に大学に入って心理学――従来の自然科学的なものとは全く違ふもの――をやらうと思ふと話された。終の日に岡崎の海岸で泳いで潮湯に行くと梅木君も来て一所に裸で玉突をやったが君の球は勢が強くてよく当った。其頃始めたばかりの私などより遙に巧かった。先生は笑い乍ら見て居られた。

講堂では先生達は前の方の列に座を占めて終まで姿勢正しく聴講せられた。それが一般の聴衆の稍不作法な態度に較べて非常に私の目をひいた事を覚えてゐる。

○

昭和二年一月二十六日板野郡第六区教務研究会の総会が東光小学校で開かれた時先生が『日本教化精神の綜合的考察と国民教育』の題目で講演せられたことを一月三十日の徳島毎日新聞紙上で知って、聞きに行く機会を失ったのを惜しい事だと思った。噂によると此の御講演は思想的懸隔が著しかった為め一般にはわかりにくかったらしい。此の年の二月頃に坂本先生――私の中学時代の恩師である――が東京から帰られて県立光慶図書館長に就任せられた。

○

昭和三年七月二十三日と思ふが光慶図書館に於て三年目にお目にかゝる事が出来た。此の頃私は池辺真榛大人の伝記を書く為めによく図書館へ行ったが此の日坂本館長様の御紹介で挨拶を交した。先生は確か高師の人達三四人と一緒であったやうに思ふ。

昼弁当を共にしたが半分位残されたのを見て口には出さなかったが先生の健康状態が多少気になった。午後書庫に入ったが――書庫へ自由に入ることを許されたのは極めて少数の特別な人に限られる――阿波国文庫の日本書紀中から一冊を抜き出して其の一節を指摘してそれに就て記述の説明や解釈を話された。確か聖徳太子の十七条憲法の所であったやうに記憶する。

○

九月三十日の午後光慶図書館で開かれてゐた阿波国先哲の遺著展覧会を観に行くと先生も見えられた。此時館長様と三人で漫談をしたが岡本韋庵先生の事から大滝山にある胸像の話が出ると先生はあの像の除幕式の時新町小学校の尋常六年生で生徒総代になって玉串奉奠か何かをせられた由を話された。館長様はさうでしたか、君は若いなあ、しかし年齢と研究とは必ずしも正比例しない、私はその間何をしたのかなあと感慨を洩らされたので私――丁度その除幕式の時は中学を出た年であった――も深く反省させられた。其の日先生は会場へ見えられた御親戚の石原呉郷先生

と御一緒に帰られた。

○

昭和四年四月三日私は多田文庫所蔵の池辺大人の著書――坂本先生の御発見御教示によって承知したもの――を拝見する為め小松島町金磯の多田宗泰氏邸を訪うた。午後五時頃まで終日調査し撮影もさせて、丁度出市せられる御主人の御伴をして横洲の自動車の停留場まで歩くと其所に五六人の一高生と一所に先生が居られた。それは南方の海岸からの帰途で三井先生の『明治天皇御集研究』を携へてゐる人もあった。私は先生を多田氏に御紹介し自動車を待つ間学生の一二の人々に一高のことなど尋ね又真榛大人のことなど問はれた。しばらくして車が来たので皆同乗して帰った。先生は新町橋で降りられた。

○

四月十七日午後三時頃突然私の勤めてゐた女子師範学校附属小学校へ先生が訪ねて来られた。そして私の教へてゐる学校が見たくなったから来たと仰せられて、教育の興味と困難など半時間余り話し合はれたがお忙しいでせうから失礼しますと言って帰られた。此の事によって私は先生が教育の実際に就て強い関心を有せられ教育者といふ職に一種羨望の念を持って居られる事を知った。

○

四月十九日午後三時半頃光慶図書館に行くと丁度先生が居られた。此の頃私は池辺大人の伝記――原稿用紙三百枚程のもの――を二度目に改稿清記して居たが、先生は之を見られて、あなたは書くのが早いからよござんすねえ私など遅くてなかなか書けないので駄目ですと嘆息せられた。実際先生の残された和歌の下書や文章の原稿などを拝見すると何回も繰り返して書き直された跡が歴然としてゐるのであるが、恰も此の時先生は御自分の論文を著書に纏めることを考へて居られたので斯う言はれたものと思ふ。此の日先生は一度家へ遊びに来て下さい、それは二十八日の夕方がよいと指定された。

○

四月二十八日午後五時頃御宅へ伺ったが朝から田舎へ出かけられて未だ帰って居られなかったので明日参上する旨を申し上げて辞去した。

翌二十九日天長節の式後十一時十分頃に御宅を訪問した。非常に喜ばれて色々御話し下さった。私は雑誌『国語と国文学』に掲載せられた聖徳太子の研究を抜いて綴ったのを御目にかけた所、随分誤植が多くて困るのですと仰せられ自ら鉛筆で記入訂正して下さった。そして此の雑誌のこと藤村作先生のこと入沢宗寿先生の話至文堂の主人のことなど話された。そして徳島へ帰ると話をする人が無くて淋し

いからお暇には遊びにいらして下さいと仰せられた。丁度生憎此の日の午後は私の教へた生徒の中女子師範の一年と二年に居る二十名程の者が私の学校で茶話会を開くからそれに列席して呉れと言はれてゐたので遺憾乍ら零時十分過其旨を御話し御暇を告げて帰った。

○

八月十七日光慶図書館でモラエス展覧会――晩年徳島に住し日本の文化をラテン系諸国に紹介した人でラフカヂオ・ヘルンにも比す可き葡萄牙の文豪モラエスの著書蔵書遺物の展覧会――が開かれたので午後二時頃に行くと思ひがけなく先生にお目にかゝることが出来た。そして九月の半過まで居るから一度遊びに来る様にと御話があった。

○

九月十五日午後三時半から御宅に参上して二階の御居間で五時四十分頃まで御邪魔した。明治天皇御製に就て話し私が前に集録分類してゐたノートを御目にかけ其の最初の部分の謄写版刷のもの（未完成の一部分）を御渡した。又『教育心理研究』『国語と国文学』に掲載せられた論文――其の時までに出来て居たもの全部――を纏めて綴ったものを御目にかけた。先生はそれを手に取られてこれだけになりますかなあと言はれ今度纏めて出版し度い――至文堂からではなく、或は一高の会で――と思ふが此の中何れを省いたらよいか、明治天皇御製を引用した部分はやめようと思ふと仰せられるので、私は之は是非入れて頂き度い、都合が悪ければ附録にしてでもよいからと申し上げ且つ今迄お書きになったものを残らず収める様に願ひ度いと希望を述べた。先生は更に編の順序や本の標題などに就いて意見を求められたので私は標題には『表現』『象徴』『国文学的』『日本文化』といふ様な語を入れ度い由答えた。此時口絵に入れる為めに写された聖徳太子御影――御物の伝阿佐太子――の写真一葉を下された。お別れする時此の次の合宿――多分来年の夏――の時には是非一所に泊って若い人達と話して呉れる様にと言はれたので必ず参加させて頂きませうと御約束した。それが永遠の御別れになって仕舞った。しかし其時は之がお目にかゝる最後にならうなどゝは勿論神ならぬ身の思ひもかけなかったのだがその冬は病床に就かれ一年後にはもう他界されたのである。

○

以上が先生と私との直接交渉の総てゞある。此の外には別に手紙も差上げず又端書一つも戴いて居ない。それで半年ぶりにお目にかゝっても堅苦しい挨拶の言葉など一切交さなかった。昨日まで共に暮した人に今日会ふのと殆ど同じ心持であった。一体私はさういふ調子の人間であるが先生は煩瑣な外形に拘泥せず寧ろ精神を重んじられたのであ

ると思はれる。

聡明を象徴する広い額、慈愛の光を湛へて深く澄み切った眼、高貴な感じを伴ふ鼻、引締った口元、微笑を含まれると僅かに現はれる美しく揃った歯並、意志の鞏固と実践の力を表現して強い曲線を描く下顎、年の割に額の両端が抜け上り後頭部は稍薄くなった頭髪—私は之を仰ぐ度に先生の刻苦精励の度とその御研究の深さに想ひ到るのを常とした—高い身長、細長い頭、骨骼はがっしりして居たが筋肉はあまり強さうでなく、肩幅は広かったが胸は厚くなかった。いつも袴を着けてきちんとして居られた。その御姿はもう二度と仰ぐことが出来ないがしかし今も私の眼の中にありありと映じてゐる。

深い蘊蓄と堅い信念から湧いて迸り出づる御意見、衒はず誇らず極めてもの静かに而も自信深く諄々と説かれるゆっくり落ち着いた口調、本当に『大人』『君子』『学徒』といった風格が床しくも偲ばれた。『館長さん』『それはようござんしたね』『難有いことです』といふ特殊のアクセントや慣用語の響など私の耳底に尚残ってゐる。

兎に角先生と対談してゐると何だかすうっと心身が浄化せられて時間の経過するのを忘れるのが常であった。元来私は自然科学の方面に興味を持って居るので、それは当時も今日も別に変らないのであるが、その私の言ふことを一々うなづいて聴かれ又お会ひすることを喜ばれたのは一体何故かと今でも不思議に思ふが、之は私に対してのみでなく先生はどんな人に対してでも此の通りであったのであらうと思ふ、即ち先生の対人的態度そのものに優れた包容力感化力の偉大さの片鱗が窺ひ知られるものと考へる。

○

十一月二十四日市内の福島小学校で国史研究会が開かれた際三ツ田富蔵君から先生と共に研究した時のこと、近角常観師との話などを聞いた。

十二月八日研究会の為めに名西郡の下分上山へ出張したが、清水といふ宿でその時収入役であった名賀石信義氏と初めて会って夜十時過まで話した。黒上、梅木両氏との交遊のこと、梅木君とは中学校からの親友で、その臨終の時には黒上先生と二人で両方から手を握ってゐたのだと承った。丁度其の日（十二月八日）が一高での梅木先輩追悼会の日に当って居たのでそれに電報を打ったといふ話も出た。之は後になって知ったのだが此の頃の先生は已に病気であったのを無理して此の会に出席せられ其の後段々重くなられた由である。（梅木先輩臨終のときのことは筆者のお聞きちがひでありませう…編者記）

十二月三十日？（或は一月に入ってかとも思ふ、日が確でない）中通町の京与——其の頃にあった店の名——の前

で名賀石氏と会って黒上先生の所へ病気見舞に行ったが面会謝絶で会へなかった由を聞いた。（十二月三十日は療養のため帰省された日に当りますから恐らくお記しのごとく翌五年一月でありませう…編者記）

昭和五年七月一日――私は此の年の四月に市内の富田小学校へ転任したので忙しくて落着かぬ間に月日が流れた――徳島毎日新聞の記事によって松本彦次郎先生が見舞の為め徳島へ来られたことを知った。七月三日坂本館長様が学校へ立寄られて話の序に先生の容態最早絶望の旨を告げられた。

七月七日午後二時四十分先生の御宅へ御見舞に伺った。そしてお祖母様から詳しく御様子を承った。医者の意見に従って一切面会を謝絶して誰にも会はさず、何にも聞かさず、新聞も見せないやうにして絶対安静を保たしめる方針で居ること。意識は極めて明瞭で感覚が鋭く寧ろ神経過敏になってゐるので二階に寝て居て階下の動静などすっかり感付くので充分注意警戒してゐること。松本教授が来られたのも話してなかったがふと新聞を見て之を知られそれを取り消すのに困り新聞には出てゐるが未だお見えにならないことにして得心させたこと。一高の人達がわざわざ御見舞且つ御看病に来られたけれども以上の通で御会はせ出来なかったので二三日逗留して御病状を聞き届けた上廊下から先生の御病室を伏し拝んで涙ながらに帰られ少しも不平らしい御様子のなかったこと、など。（一高の人達云々といふのは七月は合宿に行ってをりますので、これは九月十日ごろに危篤の報により昭信会信和会より一名づゝまゐったときのことを名賀石氏より後におきゝになったのを、七月のときのお話と結合されたものではありますまいか……編者記）

嗚呼待ちもしないその日がとうとう来てしまった。天何故に斯人を棄つるかと憾むだ。私の日記には次の様に誌されてある。

九月二十五日　曇後雨　本日新聞（徳毎二十四日）にて黒上正一郎氏の訃を知る　痛惜に堪へず

九月二十七日　曇後雨　黒上氏告別式に佐古清水寺へ行く　三時発四時二十分帰る　心淋し

其後梅木翁の委嘱によって先生の著作略目録を編し、遺品中の印刷物・原稿等を整理し、刊行物に掲載せられたる御歌を集録し、遺稿の件に関し先生の母堂に面接し、対南先生撰の碑文に明治天皇御製の一項を挿入せられる様意見を述べるなど一に先生の御事蹟が正しく後世に伝はらむことを祈る真心によって終始した。

○

先生逝かれて早くも五星霜、而も先生の御心は今も尚、

否永久に、私と共にある。私はそれを堅く信ずることによって常に強い心の力と朗らかな気分とを持ち続け古来日本人に特有な精神生活を営み得るのを喜ぶものである。茲に此事を感謝し遙に先生の冥福を祈りつ、筆を擱く。

（二五九五・五・二〇）

〔井上右近〕

（1）大正初期より京都の大谷大学に勤務し、のちに思想雑誌『青人草』を主宰した。昭和十年（一九三五）第一高等学校昭信会刊行の黒上先生の著書『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の「はしがき」には、自身の三経義疏研究に当たり「井上先生の御恩を思ふ」と記されてゐる。

〔『伊都之男建』〕

（2）一高昭信会の機関誌として昭和七年（一九三二）二月に創刊。昭和十六年二月まで断続的に刊行。

〔橋川正〕

（3）明治二十七年（一八九四）～昭和六年（一九三一）。浄土真宗仏願寺の住職を務めると共に、大谷大学教授として国史学を講じた。俳句雑誌『懸葵』大正十年二月に掲載の「阿波の国より」は、六歳下の黒上先生を徳島に訪ねた際の紀行文である。

〔『親鸞と祖国』〕

（4）京都の橋川正を編集発行人として、大正八年（一九一九）一月から翌九年十二月にかけて刊行。歌人三井甲之が主宰した『アカネ』『人生と表現』の流れを汲む総合雑誌。

〔松本彦次郎〕

（5）明治十三年（一八八〇）～昭和三十二年（一九五七）。国史学を専攻し、岡山の第六高等学校教授や東京文理科大学教授などを歴任した。『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の「はしがき」には、三井甲之・蓑田胸喜と共に黒上先生が研究の導きを受けた人物として記されてゐる。『親鸞と祖国』大正九年十月号には「松本彦次郎先生にあひまつりて」と題する連作短歌が載ってゐる（『黒上正一郎先生のうたと消息』所収）。一高および東京帝国大学で三井甲之と同級で『アカネ』『人生と表現』誌に論文多数。

〔入沢宗寿〕

（6）明治十八年（一八八五）～昭和二十年（一九四五）。東京帝国大学文学部教授として教育学を講じた。大正十五年（一九二六）の出会ひ以来、昭和四年に外遊へ旅立つまで黒上先生と親密な交遊があった。

〔田中寛一〕

（7）明治十五年（一八八二）～昭和三十七年（一九六二）。教育測定や知能について研究を進め、東京高等師範学校教授や東京文理科大学教授として教育心理学を講じた。昭和五年五月に「東京高等師範学校信和会」が発会するに際しては同僚の武政太郎教授と共に顧問に就任した。

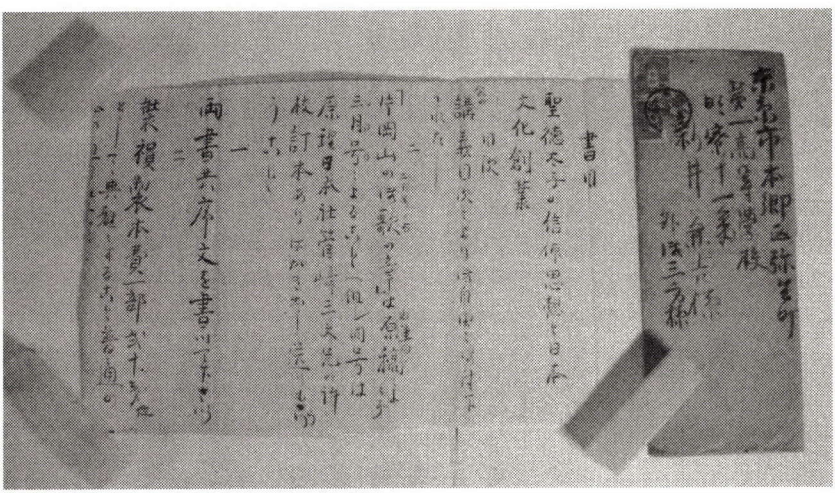
〔志田義秀〕

（8）明治九年（一八七六）～昭和二十一年（一九四六）。俳人で国文学者。岡山の第六高等学校教授や東京の成蹊高等学校教授などを歴任した。『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の「はしがき」には、「片岡山の御歌に就いては、志田義秀先生の「聖徳太子の御歌について」の御論文より教はる所多く」と記されてゐる。

〔飯田義資〕

（9）明治二十七年（一八九四）～昭和四十八年（一九七三）。徳島県下の小学校などで教鞭をとる傍ら、郷土史を研究した。昭和十年七月刊の『伊都之男建』に掲載の「略年譜」と「著作目録」は、徳島県鴨島尋常高等小学校長を務めてゐた飯田氏の手に成るもので、昭和四十四年（一九六九）十月刊『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』復刊第二刷に際して追加増補された。

（五）黒上正一郎先生のご母堂（黒上住恵さま）から一高昭信会会員へのお便り



『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』出版のための黒上先生からの指示が書かれた昭和5年2月28日付のお便り（ご母堂代筆）

【「黒上正一郎先生のご母堂（黒上住恵さま）から一高昭信会会員へのお便り」翻刻の凡例】

一、本資料は、社団法人国民文化研究会に所蔵する「黒上住恵氏発信の書簡類」（一一八頁）の中から、昭和五年より同七年に至る書簡で、黒上正一郎先生を偲ぶ上で参考になる一部のものを翻刻して年月日順に並べたものである。

このご母堂のお便りについては、既に昭和九年より同十三年までの書簡の一部が『黒上正一郎先生のうたと消息』に掲載されてゐる。同書の編者解説には、このお便りについて、「黒上住恵さまは、御子息黒上正一郎先生の御逝去のあと、亡き御子息が全身全霊を傾けて育成された「一高昭信会」のために、貴重な私財を寄せられて、会誌『伊都之男建』の刊行費用や、御遺稿『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の上梓費用を次々に寄贈せられたばかりか、御子息御逝去後に一高に入学し「一高昭信会」会員になってくる若い人々に対しても、くりかへし筆をおとりになって鄭重な巻紙墨筆のお手紙をお送り下され、亡き御子息に代って会の発展と祖国日本へのお心を寄せつゞけられた。こゝには、そのお心を偲ぶよすがとして、いくつかのお手紙を紹介させていただゞいた。」と記されてゐる。ご母堂は昭和十五年一月三十日にお亡くなりになった。

二、資料を翻刻するにあたっては原文を忠実に再録することを心懸け、その方針については、本資料集二〇頁の凡例第二項のもとに行った。尚、判読不明の文字は、□とした。

三、それぞれの書簡の最初に日付と宛先を記した。

昭和五年一月二十六日　一高昭信会一同宛

拝啓

寒さ日々つよく候へ共、皆々様には御障りもなく入らせられ御賀申上げ候。さて度々御心こもらせられし御玉章頂き忝なく、いつともくりかへし拝見いたし、よろこび居り、深く感謝申上げ居り候。皆様の御事をあけくれ申して拙なき筆には尽し難き御なつかしく存じ居り候。私方にも皆々様と同じ心に大御心を仰ぎて心身を養ひ居り候。

尚、正一郎申し候には、維摩経義疏弟子品目連之章は、井上右近先生の論文、正一郎の論文（「国語と国文学」二月号）よく御参照下されたく、尚、其の章は憲法第十条共にこれ凡夫の御文と関係深き様正一郎申し居り候間、右様御承知下されたく候。

寒さ誠に烈しく候折柄に御座候間、皆々様御身御大事に御いとひ遊ばされたく、御健やかに入らせられ候様祈り上げ居り候。

正一郎容体も御蔭にて宜しき方にて大久保博士も病気は追々宜敷き様申され候間、御安神下されたく候。しかし疲労甚だしく候ため、筆とり候事並びに談話今に苦しく、不本意ながら代筆を以て申上げ候。皆々様深き御真心を以て御仰せ下され候御事は、一同、日夕感佩申上げ居り候。正一郎よりくれぐれも宜敷く申し出で候。拙なき筆にて候へ共、御許容下されたく候。

〈黒上先生筆〉

ときどきもみ文いたゞくよろこびは筆にことばにつくせざりけり

はらからのみ上あけくれ思ひをれば病める身も力ありけり

もろともに大きみをしへ仰ぎ得しことはかりそめのえにしにあらず

福田

田は生長を以て義となす。応に供養すべき者に於て之を供養すれば、能く諸の福報を受く、猶、農夫の田畝に播種して秋収の利ある如し。故に福田と名く。

勝田の徳

人のために福田となって最勝なる徳といふ意味ならんと存じます。

迦葉が自己に人が供養すれば、施主はその功徳によって人天の果報を得べきものと思ひしこと。それは自己の智徳、断徳（煩悩を断じたる徳）ある故と計せしによる

とのことであります。

断田

煩悩を断じて滅を得、無量の徳を具すれば、之を恭敬供養するもの、果報を得べきをいふと存じます。

備考

四天王寺の四つの院

敬田

悲田

療病

施薬

二福田

一に悲田貧窮困苦の人なり。是れ慈愛の心を施与すべき良田なり。

二に敬田三宝なり。是れ恭敬の心を以て供養すべき良田なり。

運心広大……の大御言葉をよく拝しますが、聖典全P201の如き、現実の施設につくさせたまひつゝ国民の心田を養育して国礎の内的確立にみ心をさゝげませし永久的御事業を偲び奉ります。

二〇一頁の涅槃不食の報と人天受食の報の対照の□示。

昭和五年二月二十八日　一高新井兼吉他三名宛

書目

聖徳太子の信仰思想と日本文化創業

目次

会の講義目次により御自由に御付下されたし。

二

「片岡山の御歌の章」（三月号の分）は肉筆原稿によらず三月号によること、但し同号は原理日本社管崎三文兄の許に校訂本あり、はがき出し送りもらふこと。

一

両書共序文を書いて下さい。

二

装禎製本費一部弐十銭位として典雅にすること。普通の本の通り堅実に。

三月号の分、片岡山の章の前に二月号の文中（二月号九七頁維摩居士のところ）の章を置く事。

三

文中、「天津日嗣として」とある　「我が日の本の皇子として」改むる事。

原稿中

三経疏思想概観、太子の体験過程の章は、(一)序説の附文

とし二字下げ、文字も普通よりつめる事。
太子の体験過程の章
年代は記憶まかせにて書きし故、一応何かの本で調べて下さる事。
第一章（天下の道理を論ぜばの御文引用、憲法十条第一条を論ぜるところ）の次に、「教育心理研究の赤線のあるところ」「国語と国文学三月号末尾の小さき文字の処」「原稿用紙の憲法の註」と綜合して一文とし、第一章と共に太子の人生観と国家統治の題にまとめられたきこと。
文体荘重に全部改作して下さい。御執筆を乞ふ。
「教育心理」などはあとより御送り申上げ候。
太子の人生観と国家統治の章
正一郎の文を御改作下され自由に御作り下されたく。
原稿は九段の京花社にこれ有り候間、廣瀬様と御一緒に一時借出しと云ふ事にして、とりに御出下されたく候。
謄写版は文進社にていつも会の印刷をして居り候間さうした方宜敷きかと思ひ候。

昭和五年二月二十八日　一高昭信会四名宛（前便に同封）

拝呈
先月末より大分暖かくしてよろこび居り候。昨日より俄かに余寒烈しく雪さへ見え候てつよく身にしみ申し候。御地にては如何にあらせられ候や、定めて御寒き御事と存じ上げ候。皆々様には何の御障りもあらせられず御機嫌克く入らせられ候御様子何よりも御賀ばしく存じ上げ候。
さて毎々御懇切なる御玉章賜はり御厚志の程有難く何時ともくりかへし拝見いたし候。
正一郎病気深くみ心にかけさせられ御仰せ下され候御言の葉、御一言毎に身にしみて勿体なく存じ候事のみにて正一郎大におよろこび居り候。
正一郎申し候には、我等五人は同身一体にて病気にかゝりても御四人様を思ひて誠に心強く無限の思ひを致し候由申し居り候。
新井様を通じて皆様に御頼み申上げ候聖徳太子御遺文集と太子様原稿（正一郎原稿）、御試験後恐縮ながら、御四人様にて二十五日頃までに製本出来候様御取り計らひ下されたく宜しく御頼み申上げ候。
御出下され候日を日々御待ち申上げ候。
末筆ながら御身御大切に遊され候様切に祈り上げ候。
母、正一郎より宜しく申し出で候。

病状は別して変り申さず候へ共、生来どの医者様も心配はないと申され候間、御安神下されたく候。只今は多少の

熱の出入も御座候て衰弱致し居り、もの言ふ事も非常に苦しく筆とる事も止められ、皆様へ誠に御気毒に候へ共、御許し下されたき様申し居り候。

〔註、昭和五年九月二十一日、黒上正一郎先生ご逝去〕

昭和六年五月二十二日　一高生若野秀穂宛

謹啓

御懇情をこもらせられし御尊書賜はり、有難く押し戴きてくりかへし拝し何時ともの勿体なき御誠情に感泣仕り候。私こそ何とも申上様もなき御無沙汰ばかり致し居り候義、幾重にも御詫び申上げ候。皆々様には何の御障りもあらせられず、御元気にみたせ給ひつゝ入らせられ候御由、何よりも何よりも御賀ばしく存じ上げ候。

くだって当方母も私も、皆々様方の御蔭にて日々無事起居いたし居り候間、何卒御安神遊ばし下されたく候。

さて此度は皆様には御一つの御部屋に万事御一致の御尊きみ心を以て御むつまじき兄弟の如く御過し遊され候御由、正一郎地下にて如何ばかり皆々様の御至誠を相よろこび感激仕り居り候はんと、深く深く思ひめぐらし申し候。最後まで御会の御発展を相祈り居り候ひし事に御座候ひし間、皆々様の御深きみ心を相よろこび感謝申上げ居り候程を思ひやられ申し候。

病床の中にも御会の御事をよくよく申し、皆々様御なつかしさにたへられず候事をしみじみと申し候。さる五月十日には皆々様明治神宮にて御宣誓式を行はせ給ひ、ますますみ心をかためさせられ、御身を御犠牲に遊してみ国の御為め御尽し下され候深きみ心、正一郎よろこびにみち深く深く感佩仕り居り候程を思ひやられ申し候。生前も死後も変らせられず、限りなく御追慕下され、御仰せ賜はり候御全力こもらせらるゝ御言の葉、至らぬ私に候へ共、深く身にしみ感極まって何とも拙き筆には申しあらはし難く、感激の涙止り申さず候、御察し下されたく候。

御心こもらせられし御玉章頂き候節、直ちに仏前に相供へ、皆々様の御真情をこまごま申してよろこばせ候。尚、其の夜墓所へ参りて生ける人に申し候如くにこまごまと申して申し尽せぬ御誠意のみ心を涙に咽びて申し候。よろこび安んじ居り候事に御座候。早速御礼申上げたしと存じ候処、南方より人見えしため心ならずも大に延引仕り、余りに御無礼に打過し事とて失礼とは存じながら代筆を以て御礼申上げ候事に御座候。何卒御許容下されたく候。誠に遅まきながら御礼並びに日頃御無音の御詫びまで申上げたく。

末筆に御座候へ共、御会皆々様へ宜しく宜しく御鶴声遊し下されたく、気候不順の折柄とて皆々様には何卒御尊体御大事に御自重遊し下されたく祈り上げ奉り候。

昭和六年七月十五日　昭信会一同宛

謹呈

御懇篤なる御玉章賜はり有難く押し戴きくりかへしくりかへし拝し申し候。皆々様には何の御障りもあらせられず試験終了遊ばし、御予定の如く龍沢寺様へ御越し遊され、御機嫌克く御研究の御道を進ませ給ひ候御由、此上なき御賀ばしく存じ上げ候事に御座候。何が有難く嬉しいと申しても皆々様が御健やかに入らし下され、万事御一致のみ心を以て遊ばし給はり候ほど有難く嬉しき事は御座なくいつも涙に咽び拝謝仕り居り候。私共皆々様の御蔭にて日々を無事過させて戴き日夜御なつかしく存じ上げ居り候事、拙なき筆に尽し難く候。

こまごまと御真心深くこもらせられし御言の葉骨身にしみて有難く嬉しく、いつもくりかへし申してくどくどしく存じ候事ながら感涙止り申さず候事に御座候。拙なき私共をも正一郎にかはらせられていつともみ心にかけさせられ、申し尽し難き御慈しみ下され御優しき御仰せごとのかずかず、日夜有難く嬉しく存じ居り候事、申しあらはし難く日々母と御厚情をおよろこび居り候。人里はなれられし結構なる空気の御処にて御合宿遊ばし、御規律正しき御精進遊され何から何まで御一つ心に遊され、苦楽を御共に御自炊の御生活を、正一郎如何ばかりよろこびにみち皆々様へ如何に感謝申し居り候事に候はんと深く深く思ひやられ申し候。御仰せ給はり候如く、必ず皆々様の御そばへ参り、御実行下され候尊きみ心相よろこび感激仕り居り候事に御座候。春と夏との合宿をよろこび楽しみお話候事、目の前にみる如くに存じ候。遊ばせし御事もなき御自炊の御生活、誠に種々と御心づかひあらせられ御煩労のほど御察し申上候。何かにつけて御思ひ出を殊に深く遊し給はり候厚きみ心勿体なき涙に咽び候。龍沢寺様御所在地の如き処へ参りたき事を度々申し候事を思ひ起し候。至って好み候処に御座候。壮健にて皆々様と御一緒に参り候はば、如何ばかり相よろこび候はんにとついつい思ひ申し候。正一郎弱き身にも元気は御座候ひし事とて是非富士山へも一度は参りたき様申し候。

皆々様御登山の御計画をおよろこび居り候事と存じ候。何卒御道中御十分に御用心遊され一寸も無理遊ばされぬ様くれぐれも御留意下されたく伏して願ひ上げ奉り候。御障りなく御壮健に御下山遊され候御事を日々祈り上げ奉り

候。

就てはいつも同じものにて候へ共、若芽少々ばかりとほしえび少々小包にて今日御送り申上げ候間御召し上り下さらば嬉しく存じ候。いつとも拙き筆にて失礼ながら厚きみ心の御礼並びに御無音の御詫びまで申上たく。

末筆に御座候へ共、皆々様には御尊体御大切に遊し下され、ますます御体量まさせられ候御事日々祈り上げ奉り候。

母よりも宜敷く申し出で候。

尚々申上げ候。御試験中余り気候不順に候ひし事とて御安否御伺ひ申上げたしと幾度も思ひ起し候へ共、御試験の御中に御返事御示し頂き候事、恐れ多き次第と存じおひかへ候次第、御無礼の義、御許し下されたく候。

昭和六年七月十九日　昭信会一同宛

謹呈

昨日はみ心深くこもらせられし結構なる御絵葉書に重々御懇情の御便り賜はり、何とも申上げ様もなき有難く嬉しく御礼尽し兼ね候。去る十五日には如何に遊され候御事かと存じ候処、長らくふり続き候雨にて御道筋御難儀御一通りにてあらせられず候に、其の御中を御越し遊され候御由、誠に御元気に入らせられ候御事これにこしたる御賀ばしき事は御座なく心強く嬉しく存じ候。

松本先生様と御一緒に御話遊され、御楽しく入らせられし御事拝察仕り候。いつとも正一郎を何かにつけて殊に御思ひ出を深う遊し給はり候御事、感激の涙止り申さず、尊き御心を拝し奉りて重々拝謝仕り居り候。未だ存じ申さず候修善寺様の御縁起並びに弘法大師様御霊顕の御著しき御絵葉書を母と共に拝しては拝し、御厚き御心添へをよろこび合ひ有難き涙ひとり溢れまゐり候。拙なき身をもたへずみ心にかけさせ給ひ、何かにつけて勿体なき殊に御配慮賜はり御心尽しを頂き、日々母と幾度も申し続けて相よろこび、御噂を仕らぬ日とては一日も御座なく候。

私事今日無事に日を過され気も狂せず罷り在り候事は、これ皆御会皆々様の御蔭にて御座候事をたへず思ひ続け、誠に拙なき筆とて万分の一さへも示し兼ね候へ共、日々皆々様の御真情を有難く嬉しく存じ皆々さま御なつかしく存じ上げ居り候事申し尽し難く候。御合宿御終了も御日迫り御名残をしく入らせられ候御事と存じ上げ候。これよりは暑さますます烈しく相成り候事に御座候間、何卒御尊体御大事に御いとひ遊し下されたく、何卒御体量増進遊し下され候御事を日々祈り上げ奉り候。

母よりも御礼宜しく申上げ候様申し出で候。

昭和六年七月十七日　昭信会一同宛（前便に同封）

謹呈

日々雨天続きにて御外出も御困り遊され候御事、御察し申上げ候。皆々様には御閑静なる御処にて御機嫌克く御修業遊され候御事と御賀申上げ候。くだって当方母も私も皆々様の御蔭にて日々達者に相過し居り候間、憚りながら御安神遊し下されたく候。さて御寺様の御周囲の御模様こまごまと御示し下され有難く嬉しく存じ居り候。心中あらはし兼ね候。正一郎に変らせ給ひて皆々様には至らぬ私共をいつとも勿体なき涙に咽び居り候ほどに御慈愛下され、深き御恩はたとへて申上候もの之無く候。

夜分眠りにつきかぬる其の時にも、夜半目さめ候時にも、いつとも皆々様御なつかしく存じ上候事のみを思ひ、心静かに深く御偲び申上げ候。恥しきをかしき事を申上げ候へ共、食事をいたし候其の間も皆々様の御事ばかりを心の奥深く御偲び申上げ候。斯くまでに皆々様御深き御真心を有難く身にしみて嬉しく存じ居り候心御察し下されたく候。

去る十五日頂きし御懇切なる御玉章私拝見後直ちに仏前に相供へこまごまと申して相よろこばせ、翌日墓所へ参りて御深きみ恵みをよくよく申して有難き事をしみじみと共によろこび合ひ涙に咽び候。御存知の如き性質に御座候事とて深きよろこびにみち、申し尽し難き感激仕り居り候事に御座候。亡き後も御堅固なるみ心を御一つに遊して斯くまでに御尽し頂き如何に感謝申上げ居り候はんと相よろこび居り候事を、母目の前に見る如くに存じ候事をよくよく申し候。

十五日は折悪しく雨天にて御座候ひし事とて、修善寺様へは如何遊せし御事に候はんとくりかへし思ひ候。富士山へはよくよく御相談にて御出下されたく候。

誠に延引ながら右様まで申上げたく、末筆に御座候へ共、皆々様にはくれぐれも御尊体御大切に御自愛下されたく祈り上げ奉り候。日々御健康をのみ祈り上げ居り候。

尚々申上げ候。十八日朝、投函致したくと存じ居り候処へ、御便り頂き候に付き、失礼をも顧みず同封仕り候。

昭和六年九月十八日　昭信会一同宛

拝呈

昨夜相したゝめわすれ候まゝ一寸申上げ候。

御心こもらせられし追悼会遊し給はり候日は二十日に遊ばし下され候方、亡き正一郎も相よろこび候。私方にても二十日にいたし候はゞ、日曜日にて廣瀬様に御出て頂き候

に誠によき都合と存じ、其の手筈にいたして御出て頂き候方々様へも此の趣三日前申し参り候処、昨夜人来るこれ有り、申され候には神式には此の上なき結構なる御日に御座候へ共、二十日は社日に御座候事とて仏式には翌日の方宜しき様申され、二十一日に仕候事に相定め、又々通知状を出し候。廣瀬様にも御障りなく御きげんよく入らせられ候間、御安神遊し下されたく筆の序でながら申上げ候。尚、二十日には朝早く墓所へまゐりて御厚きみ情をよくよく相かたりよろこびを共にいたし候。

申しわすれ候事を相示し一寸申上げ候。

末筆ながら皆々様の御身は御大事の上にも御大事の御尊体に御座候事ゆゑ、どうぞ御注意下され御かぜを召さぬ様、御体量御増進遊し下されますます御健やかに入らせられ候御事のみ日夕念じ上げ奉り候。

昭和六年十二月四日　昭信会一同宛

御試験中に一度御機嫌御伺ひ申上げたきと幾度も存じ候ひし事に候へ共、御妨げいたしてはと存じ、相控へ候。一度の御伺ひも仕らず御無礼の段御許し下されたく候。御試験御終了後どちらさまへ御旅遊されしかと存じ居り候処へ御便り頂き、有難く急ぎ拝し申し候。

謹呈

結構なる御絵葉書御真心深くこめられし御便り賜はり、忝なくくりかへし拝し申し候。

皆々様には何の御支障もあらせられず、御試験御終了遊され候ひて御揃ひ遊ばしてみ心御一つの御楽しき御旅行遊され候御由、誠に結構なる御事にて賀し上げ奉り候。

御一泊の御旅行にてみ心忙はしくあらせられ候御中にも矢張り不束なる私共をみ心にかけさせられ、深き深き御優情こもらせ給ひし御便り頂き、如何ばかり有難く拝し候ひしかを、拙なき筆にて申しあらはし兼ね候義、何卒御察し下されたく候。日々申し尽せぬ御なつかしく御慕ひ申上げ居り候。皆々様の御芳名御記入遊し下され嬉しく存じ候。幾度拝しても拝したき心をさまり申さず思ひのまゝ拝させて頂き居り候。何時とも勿体なき御誠情をよろこび感謝申上げ居り候事、筆に尽し難く候。親身以上に御慕ひ申上げ居り候。何かにつけて殊に御思ひ出を深う遊し給はり感涙仕り居り候。御仰せ下されし如く正一郎壮健にて御一緒にて旅行仕り候はば、如何に相よろこび候はんにと存じ、先年御四方様と法隆寺様や水戸へ参り候節、帰りてよろこび候事を思ひ出し候。よろこび相話しくれし候顔、目の前に見る如くに御座候。賜はりし御絵葉書、母と共に拝見後直

ちに仏前に相供へ、こまごまと申して御芳情を相よろこばせ候。母も大に相よろこび御礼よろしく言上方申し出で候。御旅行の都度この様に遊し頂き変りし御処々の御名高き御写し絵を拝させて頂き、有難き極みを母と共によろこび合ひ候。昨日御礼申上げたくと存じ候処、姉参り話いたし居り候内に相遅れ、誠に相済み申さず候義、御詫び申上げ候。

延引ながら御厚きみ心の御礼まで申上げたく、末筆に御座候へ共、此の二三日寒さ俄かに相まし候、御地にても定めて御同様の御事と存じ上げ候。申上げ候迄も御座なく候へ共、何卒御風邪を召さぬ様御注意遊し下されたく願ひ上げ候。

先年梅木様が御校御在学の節如何に御さむくても夜は舎のまどを御あけ遊して、御やすみ遊されし由を聞き及び候事を思ひ出し、只今も左様なる事遊されずやと一入御案じいたし居り候。

皆々様には何卒御起居に御十分御注意下されたく御大事の御大事の御身に御座候事ゆゑ切に切に願ひ上げ候。

夜分相示し候事とて拙き上にも拙く候へ共、御許し下されたく、眼うすく相成り居りしため、すみうすき処まだらに相成り居り候へ共、御許し下されたく候。

昭和七年一月十一日　一高昭信会一同宛

拝呈

寒さ一入きびしく相成り候へ共、御室皆々様には何の御障りもあらせられず、御健勝に入らせられ候や御伺ひ申上げ候。

さて今日賜はりし御電文拝見仕り候へば、思ひがけなくも新井様御逝去遊され候御由、驚き入り候。一昨年位より少し御身弱くならせられ候様承り候へ共、御専心よき御療法遊さるゝとの御事にて、必ず健全になりますと御仰せ下され候事を楽しみ、其の節をのみ相待ち居り候ひしに、実に余りにも意外の御痛事にむねつまり、悲しき涙止り申さずたへられぬ思ひにくれ申し候。何を申すも道御遠々しくへだゝり居り候事とて、よき御運びに至らせられ候御事か、如何に入らせられ候はんと、始終母と申して殊に御案じ申上げ候事に候へ共、この様に御いたましき御運命に御あひ遊され候とは、思ひもかけぬ事にて暫らく身のふるひもとまり申さず候。驚き悲嘆の涙にくれ申し候。御玉章頂き候度々に、み国の御為め御尽し下され候事をこまごま御示し下され候ひしに、御重病の節のみ心は如何にあらせられしかを相思ひ、又御両親様のみ心を拝察仕り断腸の思ひに沈み候。

皆々様も御心痛の程深く御察し申上げ候。何かと御一通りならぬ御心遣ひにてあらせられ候御中にも、やはり当方をみ心にかけさせられ御早く御打電頂き御厚志深謝奉り候。何かにつけて当方をみ心に浮ばせ給ひ、御厚きみ心を賜はり有難く存じ上げ候事、拙なき筆に申上げ兼ね候。今日早速廣瀬様にも申上げ候。如何ばかり御驚き遊されしかを深く御察し申上げ候。一月三日廣瀬様御出で下され、其の節御仰せに新井様より新年のはがきが来ませぬが、こちらへまゐりましたかと仰せ遊され居り候ひしに、御逝去を御聞きになりては如何に御思し召され候はんと御驚きの程を御察し申上げ候。新井様に最終に御目にかゝりしは、告別式に御出で下され候節にて、あの節いろいろの御心尽しをくりかへし思ひ沈み、あの節が今世の御別れに相成り候とは、思ひもよらぬ事に御座候ひき、はるかにみ霊を拝し奉りて御弔ひを至らぬ身にも心よりいたし候。

誠に略義ながら御厚きみ心の御礼並びに御悔みまで申上げたく、末筆に御座候へ共、皆々様御尊体御大事の上にも御大事に遊し下されたく切に切に御祈り申上げ候。

昭和七年一月十三日　一高昭信会一同宛

寒さ身にしみ候中を、寒さ烈しさをつゆほども御大層と御思し召さず、御授業御休み遊して御遠々しき御処を御出で下され、御懇ごろに仰せ下されし御厚きみ心深く深く御礼申上候。

拝呈

河野様御重患の御由、御打電拝見仕り驚き入り申し候。長らく御病床にあらせられ候御事とて、日々御経過如何にあらせられ候はんにと、深く深く御憂慮申上げ何卒よき御運びに向はせられ候様、日夕御祈り申上げ居り候ひしに御危篤の御報拝し、むね痛め居り候処へ、遂に御逝去の御由がっかり致し候。

御帰途両国駅より御打電下されし厚きみ心感泣仕り候。いつとも拙なき身をも御深く御深くみ心にかけさせられ有難き極みを、母とかたり合ひ感謝申上げ居り候。

河野様御逝去、悲しき心何とも申しあらはし難くたへられぬ思ひに沈み候。寒さ烈しき日、暑さ烈しき日には一入御案じ申し、一日に幾度も母と共に遠くより御案じ申上げ候事を申し候。天候の悪き日などは、いつも河野様の御容態を第一に御気遣ひ致し、何卒御障りなき様にと御祈り申上げ候ひしに御座候。百才迄の御長寿を願ひ居り候ひしに御会の御方様が思ひもよらぬ御早世遊ばし、私の身にはこれほど悲しき事は御座なく、正一郎の死去と同じ事に悲嘆

の涙にくれ、昨夜は遂に夜明けまで御二方様御存世の節の御事を、先から先へと思ひ出しくり出し致しては、心底より湧き出づる涙とめどなく流れ、悲しさと御なつかしさに悶え、断腸の思ひに沈み、身しびれ候ほどに悲しく候。私の命を縮むるより悲しく候。御一家の御為めばかりではなく、国家の御為め惜しみても惜しみてもつき申さず、いたましき事をいたし候。河野様に最終御目にかゝりしは、告別式に御出で下されし節にて、あれが最後の御別れにならうとは、思ひも思ひもよらざりし事にて御座候。暗き淋しき思ひに沈み候。

河野様長き御病床の其の間のみ心並びに御悩みの御甚しかりし、御いたましさ深く御察し申上げ候。御家族御一同様の御なげき御力落し目の前に拝し候如くにて、深く深く御察し申上候。

申し遅れて何とも相済み申さず候。御会の御方様には河野様御宅へ御越し下され、御帰途両国より御打電遊し下され、誠に何時とも当方をみ心にかけさせられ、御厚き厚き御配慮身にしみて有難く有難く存じ居り候。

昨日早速廣瀬様御許に申上げ候ひしが如何に御驚き遊され候はんと存じ候、昨日早々御礼並びに御悔み申上げたしと存じ候処、遠方より客参り候ため、心ならずも御無礼に打過ぎ候段、幾重にも御詫び申上げ候。悲しみの心拙なき筆には其の一事も尽し難く候義、何卒御察し下されたく候。

乱筆ながら御礼並びに御悔みまで申上たく、これよりは寒さも一層きびしく相成り候事とて、皆々様御尊体御大事の上にも御大事に遊し下されたく、御健やかに入らせられ候御事をのみ御祈り申上げ候。

昭和七年二月三日　一高昭信会一同宛

田所様御全快遊され候御事、御目出たく御賀申上げ候。皆々様にもみ心安ませられ候御事と存じ上げ候。私も皆々様と御一つ心に嬉しく心を安め候。

拝呈

始終御敬慕申上げ居り候、皆々様方より申し尽し難きみ心こもらせられし御寄せ書、いろいろと御事繁く入らせられ候御中にも、私共をみ心にとめさせ給ひて御恵み下され、御厚きみ心何とも御礼の申上げ様も御座なく候。押し戴きてくりかへし拝させて頂き候。如何計りよろこびにみちつゝ拝し候ひしかを、何卒御察し下されたく願ひ上げ奉り候。御なつかしきみ筆の跡、いつとも親身以上に御真心こもらせらるゝ御仰せ言、御一言ごとに心にしみて勿体なく存じ候事ばかりにて、感涙止り申さず候。

御会皆々様には気候の御障りもあらせられず、御元気に入らせられ候御由、何よりも御賀ばしく存じ上げ候。御健全に入らし下され候御事何よりも心強く嬉しく存じ候。

下って当方母も私も始終皆々様より御厚きみ情を頂き居り候、御蔭にて日々を事なう打過し居り候間、憚り様ながら御安神遊し下されたく候。

さて何より相示し御礼申上げ候はば、宜しき事に御座候や、万々の有難き極みは其節も申し兼ね候義、何卒御推量下されたく願ひ上げ奉り候。誠に此上なき拙なき私共をいつとも、亡き正一郎と同じ事にみ心にかけさせられ、申し尽し難き御慈愛遊し下され、いつとも身に余るみ恵みに浴し居り候事、日々母とくりかへし申して共に相よろこび涙に咽びて感謝申上げ居り候。深き御恩を御返しのいたし様も御座なく候事を心にくりかへし居り候。

こまごまと御仰せ賜はり候御言葉、親しく御目にかゝりて拝承致し候如くに存じ候て、たへがたき程に御なつかしく、余りの御なつかしさに戴きし御便りを日々ふところに大事をかけて入れさせて頂き、およろこび居り、幾度拝しても拝したき心収まり申さず候次第とて、日々拝させて頂き居り候。実に涙流れ候ほどに御慕ひ申上げ居り候。

皆々様にはいつとも御尊きみ心を御一致遊して、如何にみ心遣ひ多くあらせられ候御節にも、御規律御正しく御例会御開会下し給はり、万事を御一つ心に御尽し下され候御熱誠を、正一郎壮健にて御座候はゞ、如何計りおよろこび候事に御座候はんと、つきぬ思ひに沈み候、御会は自分の命よりも大事に御座候をよくよく申し候。

生前も死後も変らせられず、始終み心深く留めさせ給ひて限りなく御追慕下され、何かにつけて殊に御思ひ出を深う遊ばし給はり、御誠情こもらせらるゝ勿体なきみ言葉、申上げたき心の内、筆紙に尽し難く候。斯くまでに申し尽せぬみ心尽しを頂き居り候上、尚又あとにのこりし私共を正一郎に変らせ給ひて御慈しみ下され、誠に重ね重ねの御懇情を、地下にて如何計りおよろこび感激仕り居り候事に候はんと、始終母と申しておよろこび候事に御座候。たえず皆々様の御噂ばかり仕り候て、心強き日を過させて頂き居り候。

新井様、河野様御逝去遊されてより早くも御三七日を相過し候。皆々様には御思ひ出の御事多く御淋しく入らせられ候ほど、御察し申上げ候。私事も御生前の御事、先から先へといろいろ思ひうかび候て、悲しく身を切る如くに存じ候。遠くに罷り在る事とて御見舞にも一度も参らず、御告別式にも参上仕らず何とも申上げ様も御座なき次第を、母と申せし事にて御座候。再び御目にかゝりし事これなきを思ひ候て、又しても愚痴ばかり相思ひ実に淋しき思ひを

いたし候。御納棺の節最終に今一度お目にかゝりたかりし事、今にあきらめつき申さず候。

新井様、河野様御尊父様より、「御会皆々様、肉身も及び申さず候御世話遊し下され、家族は申上げ候までもなく親戚一同感泣仕り居り、これも先生の御精神が皆々様に伝はられ居り候ゆゑ」と、御仰せ遊されて御よろこび下され候。皆々様申し尽し難き御深き誠御一筋のみ心を以て、御尽し下され候御蔭にて、亡き正一郎をこの様に御仰せ下され候。

新井様御尊父様より兼吉様御生前正一郎を御慕ひ下され候御歌を御送り下され、涙に咽びつゝ拝し申し候。最終に御つくり遊されしが六年十月に御座候。

申上げたき事もかずかず御座候へ共、大いに遅まきながら御厚きみ恵みの御礼並びに御不音の御詫びまで申上げたく、末筆に相成り候へ共、寒さも一層加はり候事と存じ候へば、皆々様には御身御大切に遊し下されたく、国家の御為めかけがへなき御大事の御大事の御尊体に御座候御事ゆゑ、申上げ候迄も御座なく候へ共、何卒御風邪を召さぬ様御十分に御注意下されたく願ひ上げ奉り候。日夕御健やかに入らせられ候御事のみ、拙なき身にも御念じ申上げ候。

母よりも宜しく申上げ候様申し出で候。

昭和七年二月十五日　一高昭信会一同宛

頂き居り候御寄書、日々拝させて頂きよろこび居り候。

謹呈

皆々様には何の御障りもあらせられず、御機嫌克く入らせられ候御様子、何よりの御事にて賀し上げ奉り候。下りて当方母も私も始終皆々様より御厚きみ情を頂き居り候御蔭にて日々を心強く過させて頂き居り候間、憚り様ながら御安神遊し下されたく候。

さて皆々様にはますます御一致を御固め遊さるゝ玉誌御発行遊され、御目出たく御賀申上げ候。誠に至らぬ私をいつとも、亡き正一郎と同様にみ心にかけさせ給はり、御恵贈を辱うし御深情何と御礼申上げ候はゞ宜しく候や、只々勿体なき涙にくれ、申上げたき心の内申し尽し難く候義御察し下されたく候。始終此上なき有難きみ恵みに浴し居り候上、何かにつけて殊に御深甚なる御配慮を頂き日夜心に銘じ、遠きみ空を拝して感謝申上げ居り候。御誌私事をさきに拝見いたし候事は、御道をかき候事に御座候次第に付き、手を清め急ぎ仏前に相供へ皆々様御至誠のみ心をこまごまと涙に咽びつゝ申しておよろこばせ候。ますます御濃く渡らせ候有難き御賀ばしさを、如何ばかり相よろこび深

き感激にみち、皆々様へ如何に感謝申上げ居り候はんと存じ、よろこびのほどを深く思ひやられ申し候。

一日相供へ候後、私事押し戴きて拝させて頂き候。御巻頭に明治天皇御製謹しみて拝し候。御歌ごとに心底にしみ通り候御事のみにて、何とも申上げられぬ深き感じに沈み候。世に誠ほど尊き清らかなる御なつかしき御慕はしきものは御座なく候事を、しみじみと思ひめぐらし申し候。

其の御直し下され候、亡き正一郎作歌を御掲載下され候て、皆々様深き深きみ心より御追慕下され候御隆志、感涙止り申さず感謝無限に存じ奉り候。亡き身と相成り候て年月を経候ひても、生前と同じく誠に勿体なき涙にくれ候より外なき御敬慕下し給はり、御仰せ賜はり候厚きみ言葉と、並びにあとにのこりし私共にいつも親身以上の申し尽せぬ御誠意を、地下にて如何に拝謝感泣仕り居り候はんと存じ、生前の性質を思ひ候てよろこびの程を深く相思ひ、ぬぐひきれぬ涙ながれ申し候。皆々様み心深くこもらせられし御文章御詠歌誠に有難く拝謝の辞何とも申し尽し難く、よろこびの心御察し下されたく願ひ上げ奉り候。御無礼なる申上げ様ながら如何に忙はしき節にても、食事を致し居り候其間も、誠に一寸も心はなれず、御なつかしく御慕ひ申上げ居り候。

皆々様よりの御賜物筆に尽し難く、日々押し戴き有難く楽しく、喜び涙を催しつゝ拝させて頂き居り候。御厚きみ恵みの御礼申上げたしと存じつゝ、誠に心にもなき申しをくれ、何とも何とも申上げ様も御座なく候段、伏して御詫び申上げ候。

末尾に相成り失礼ながら御許し下されたく、二月も早くもなかばと相成り、皆々様御試験の御日も御近づき遊ばされ候、この二三日は気候殊に不順いたし居り候につけ、御障りもあらせられずやと御案じ申上げ候。かぜは一寸のことにて引き候ものにて御座候へば、何卒御注意遊し下されたく、皆々様の御身はみ国の御宝にて御大事の御大事のかけがへなき御大事の御身に御座候に付き、人一倍御健全を御祈り申上げ候。

申上げたき事も御座候へ共、延引ながら御礼並びに御詫びまで申上げたく、くれぐれも御自愛御専要に遊し下されたく、御健やかに入らせられ候御事のみ神かけて御念じ申上げ候。

当方母も私も実に実に皆々様の御蔭にて無事に過させて頂き居り候間、何卒御安神遊し下されたく願ひ上げ候。いつとも拙なき身を御案じ下され居り候事、身にしみて有難く候。母とは日々申して相よろこび居り候。今日か明日かの内に正一郎ちいさき時の写真御送り申上げ候間、御覧下されたく願ひ上げ候。

尚々申上げ候。先日は木村卯之様御寮へ御出で下され候て御話し遊し下され候御由、御厚きみ心尽し嬉しく存じ候。生前木村様の御噂をよく申上げ、深き御仁恵に浴し、御指導を頂きし事を申して相よろこび候顔、今も目の前に見る如くに御座候。

昭和七年二月十七日　一高昭信会一同宛

昨夕より今日にかけて非常に御寒さ烈しく候につけ、御地にても定めて御同様にあらせられ候御事と存じ上げ候。皆々様には何卒おかぜを召さぬ様くれぐれも御大事に遊し下されたく候。兼て申上げ候写真今日お送り申上げ候間、何卒御覧下されたく願ひ上げ奉り候。此みぎりはみ心遣ひ多くあらせられ候御事に付き、写真御受取下され候御返事など、給はらぬ様願ひ上げ候。御試験も御済み遊され、み心ゆるやかとならせられ候節、御恵み下されたく願ひ上げ候。

〔参考資料〕黒上住恵氏発信の書簡類一覧

種別	元号	月日	宛先
封書	**昭5**	**1月26日**	**一高昭信会**
〃	〃	**2月28日**	**新井兼吉 外御三方**
〃	昭6	5月19日	昭信会若野秀穂 他御会各位
〃	〃	**5月22日**	**若野秀穂**
〃	〃	**7月15日**	**昭信会御一同**
〃	〃	**7月17日**	〃
〃	〃	**7月19日**	〃
〃	〃	9月17日	〃
〃	〃	**9月18日**	〃
〃	〃	10月3日	〃
〃	〃	11月5日	〃
〃	〃	**12月4日**	〃
葉書	〃	12月7日	〃
封書	昭7	1月1日	〃
〃	〃	**1月11日**	〃
〃	〃	**1月13日**	〃
〃	〃	**2月3日**	〃
〃	〃	2月12日	〃
〃	〃	**2月15日**	〃
葉書	〃	**2月17日**	〃
封書	〃	2月17日	〃
〃	〃	2月23日	〃
〃	〃	4月2日	〃
〃	〃	4月22日	〃
〃	〃	5月7日	〃
〃	〃	6月11日	〃
〃	〃	6月29日	〃
〃	〃	9月8日	〃
〃	〃	9月13日	〃
〃	〃	10月5日	〃
〃	〃	10月24日	〃
葉書	〃	10月25日	〃
封書	〃	10月31日	〃
〃	〃	11月7日	〃
葉書	〃	12月19日	〃
〃	〃	12月23日	〃
〃	昭8	1月1日	上野唯雄
封書	〃	1月11日	昭信会御一同
葉書	〃	4月23日	〃
封書	〃	5月4日	〃
〃	〃	5月16日	〃
葉書	〃	5月25日	〃
封書	〃	6月8日	松井治孝/上野唯雄

種別	元号	月日	宛先
封書	昭8	6月17日	松井治孝/上野唯雄/安武　実/近藤正人
葉書	〃	6月26日	昭信会御一同
〃	〃	7月2日	〃
封書	〃	7月15日	〃
〃	〃	7月21日	〃
〃	〃	7月22日	〃
〃	〃	9月15日	昭信会各位
〃	〃	10月1日	昭信会御一同
〃	〃	10月3日	〃
〃	〃	10月24日	〃
葉書	〃	10月26日	〃
〃	〃	10月26日	〃
封書	〃	10月26日	〃
〃	〃	11月7日	〃
〃	〃	12月9日	〃
葉書	昭9	3月29日	〃
封書	〃	3月30日	〃
〃	〃	4月17日	〃
〃	〃	5月7日	第一高等学校 昭信会御一同
〃	〃	6月15日	〃
〃	〃	7月6日	昭信会御一同
〃	〃	9月15日	南波恕一
〃	〃	9月15日	昭信会御一同
〃	〃	9月27日	〃
〃	〃	10月7日	〃
〃	〃	10月31日	〃
〃	〃	12月13日	〃
〃	〃	12月27日	小田村寅二郎 *
〃	昭10	1月9日	昭信会御一同
〃	〃	3月24日	〃
〃	〃	5月4日	〃
〃	〃	5月26日	〃
〃	〃	7月26日	〃
〃	〃	10月6日	〃
〃	〃	10月24日	〃
〃	〃	11月23日	和田正明 御五方
〃	〃	11月23日	宮脇昌三/和田正明
〃	〃	12月16日	昭信会御一同

種別	元号	月日	宛先
封書	昭11	2月10日	昭信会御一同
〃	〃	4月12日	〃
〃	〃	5月10日	和田正明/久保田信之助
〃	〃	6月3日	昭信会御一同
〃	〃	6月21日	久保田信之助/和田正明
〃	〃	8月21日	小田村寅二郎
〃	〃	9月17日	昭信会御一同
〃	〃	9月23日	〃
葉書	〃	10月13日	〃
封書	〃	12月16日	小田村寅二郎
葉書	昭12	2月3日	昭信会御一同
封書	〃	4月5日	〃
〃	〃	4月17日	小田村寅二郎 *
葉書	〃	5月10日	昭信会御一同
〃	〃	6月29日	〃
〃	〃	10月24日	〃
封書	〃	10月26日	小田村寅二郎
〃	〃	10月27日	〃
〃	〃	12月8日	小田村寅二郎 *
〃	昭13	1月24日	小田村寅二郎
〃	〃	2月19日	〃
葉書	〃	2月23日	〃
〃	〃	4月24日	昭信会御一同
〃	〃	4月25日	〃
封書	〃	5月2日	小田村寅二郎
〃	〃	8月3日	〃
葉書	〃	11月6日	昭信会御一同
封書	〃	11月18日	高木尚一 *
葉書	昭15	1月1日	小田村寅二郎
封書	昭□	2月8日	〃
〃	〃	4月6日	昭信会御一同
〃	〃	4月30日	〃
葉書	〃	5月30日	〃
封書	〃	6月7日	〃
〃	〃	7月19日	和田正明
〃	〃	7月24日	昭信会御一同
葉書	〃	7月26日	小田村寅二郎
封書	〃	8月31日	昭信会御一同
〃	〃	10月25日	〃
〃	〃	12月3日	〃

［凡例］本表は、社団法人国民文化研究会蔵の黒上住恵氏発信の書簡類全121通の一覧である。年代不詳のものについては、表の最後に昭□と表記して一括した。*が付いているのは、『黒上正一郎先生のうたと消息』に掲載されてゐるものである。太字の書簡は、本冊子に内容を抄録したものである。

昭 6 (1931)	4 月	伊豆の戸田で昭信会の合宿
	4 月	この月、非公式ながら西寮十三番を会の部屋として与へられる
	5 月10日	明治神宮で昭信会の宣誓式を挙行
	7 月 9 日	この日から二週間、三島の龍沢寺で夏季合宿
	9 月20日	黒上先生一年忌
	11月	田所氏、慶応義塾大学における満州事変に関する講演会の日、感冒に襲はれて肺結核発病。以後、長期療養生活に入る
	11月29日	昭信会員、伊香保へ一泊旅行
昭 7 (1932)	1 月10日	新井兼吉氏逝去
	1 月11日	河野稔氏逝去
	2 月 1 日	昭信会の機関誌『伊都之男建』創刊
	3 月27日	この日より二週間、埼玉の平林寺で合宿
	4 月24日	新井・河野両氏の百日祭
	5 月 8 日	明治神宮で昭信会の宣誓式を挙行
	5 月 9 日	『伊都之男建』第2号は「新井・河野両兄追悼号」
	7 月10日	この日より二週間、小田原の福厳寺で合宿
	9 月21日	明治神宮講会館で黒上先生の三回忌追悼式を挙行
	10月30日	田無市の故新井氏の墓参、蓮光寺の明治天皇御聖蹟への探訪に健康を回復した田所氏も参加
	11月29日	九十九里の故河野氏の墓参。その後、犬吠埼に一泊して香取神宮に参詣
昭 8 (1933)	3 月	神奈川県の畠山霊堂で合宿
	4 月	佐古清水寺内に石碑「黒上君之碑」520文字（対南岡本由撰并書）が墓石の横に建立さる
	5 月	田所氏ほかで東北を巡訪
	7 月	福島県猪苗代湖畔の観音寺で合宿。小田村寅二郎・夜久正雄・宮脇昌三の各氏ら参加

昭4（1929）：30	12月8日	〔東京〕感冒で病床に伏す
	12月27日	〔徳島〕徳島に帰省
昭5（1930）：31	1月	〔徳島〕1・1荒瀬達也／1・4新井兼吉／1・14信和寮／1・16廣瀬勝雄／1・18新井兼吉　1・19／昭信会会員／1・19田所廣泰／1・20荒瀬達也／1・27廣瀬勝雄／1・29田所廣泰／1・29新井兼吉・河野稔
	2月	〔徳島〕2・5三井甲之／2・6新井兼吉／2・10昭信会会員／2・11田所廣泰／2・12廣瀬勝雄／2・12新井兼吉
	2月	〔徳島〕「一高昭信会本」の巻頭所載の「凡例」を執筆。なほ、同月より黒上先生の命により「聖徳太子と世界的日本精神」の既稿分を謄写刷テキストにするべく整理に着手
	3月	〔徳島〕この月、新井兼吉が徳島の黒上先生を訪問
	4月	〔徳島〕4・1昭信会会員
	4月1日	〔関連〕この日より二週間、武州御嶽で合宿（8名参加、高木尚一初参加）
	5月	〔徳島〕5・11廣瀬勝雄／5・13廣瀬勝雄
	5月11日	〔関連〕昭信会の宣誓式を明治神宮で挙行（3年生9名参加）
	5月14日	〔関連〕新年度の昭信会第一回例会（三井甲之の講話）
	5月31日?	〔著述〕一高昭信会によって謄写刷版の黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」が作られる
	7月9日	〔関連〕この日より二週間、横須賀の衣笠村満昌寺で合宿（8名参加、加納祐五初参加）
	8月1日	〔著述〕祭政一致の精神と聖徳太子の大乗仏教批判綜合（『原理日本』6-7）
	9月1日	〔著述〕『原理日本』誌に『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の広告が掲載される
	9月11日	〔徳島〕瑞穂会の藤井信男氏、昭信会の寮に来室して黒上先生重態の報をもたらす
	9月14日	〔徳島〕昭信会の田所廣泰と信和会の廣瀬勝雄、徳島へ向かふ。途中、甲州の三井甲之先生を訪ねる
	9月19日	〔徳島〕黒上先生に会へぬままに田所と廣瀬が帰京
	9月21日	〔徳島〕黒上正一郎先生、逝去
	9月24日	『徳島毎日新聞』に「聖徳太子研究の篤学の士、黒上正一郎氏逝去」との記事が掲載される
	9月27日	徳島市の佐古清水寺で告別式挙行、埋葬される
	10月20日	『原理日本』に『徳島毎日新聞』9/24に掲載の「聖徳太子研究の篤学の士黒上正一郎氏逝去」を再録。また、「編輯消息」欄に黒上先生や昭信会や友人小西英夫氏のこと等を紹介
	11月29日	昭信会員、千葉県の清澄山へ一泊旅行
昭6（1931）	2月8日	第一高等学校の新館大教室で黒上先生の追悼式を開催（秋岡・三井両先生の指導）
	4月	田所・新井・市川の三氏、東京帝国大学に入学

昭4（1929）：30	4月6日	〔徳島〕徳島県撫養に療養中の瑞穂会会員で東京帝大生の梅木紹男氏を見舞ふ
	4月11日	〔関連〕昭信会会員、磯長の太子廟を再訪する
	4月13日	〔関連〕梅木紹男氏逝去
	4月18日	〔著述〕「教育思想家としての弘法大師」（『教育思潮研究』3-1）
	5月	〔徳島〕5・2副島羊吉郎
		〔大阪〕5・2田所廣泰
	5月	〔東京〕5・18廣瀬勝雄
		〔徳島〕5・29東京高等師範学校信和会諸兄宛（副島羊吉郎・廣瀬勝雄他）
	5月1日	〔著述〕「聖徳太子の人生宗教と国民精神（続）」（『国語と国文学』6-5）
	5月5日	〔東京〕明治神宮に参拝の後、一高寮内で「一高昭信会」の発会式
	5月11日	〔著述〕「東京高師信和会趣意書」
		〔東京〕「東京高師信和会」の発会式
	5月15日	〔東京〕一高昭信会第一回例会で「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」を講義、以後毎週水曜日に講義
	5月31日	〔東京〕梅木紹男氏の納骨のため松山へ向けて出発
	6月	〔松山〕6・2廣瀬勝雄／6・2副島羊吉郎／6・2重松鷹泰
	7月	〔東京〕7・1副島羊吉郎／7・6三井甲之／7・25市川安司、新井兼吉
	7月1日	〔著述〕「聖徳太子三経義疏の国文学的研究（特に法華義疏の独創的内容を論ず）（1）」（『国語と国文学』6-7）
	8月	〔徳島〕8・19副島羊吉郎／8・22三井甲之
	8月1日	〔著述〕「聖徳太子三経義疏の国文学的研究（特に法華義疏の独創的内容を論ず）（2）」（『国語と国文学』6-8）
	8月2日	〔徳島〕14日までの13日間、徳島の由岐海岸で一高昭信会の合宿（黒上先生を含め8名）
	9月	〔徳島〕9・2新井兼吉／9・10田所廣泰／9・11田所廣泰／9・11新井兼吉／9・16新井兼吉／9・17河野稔・新井兼吉・市川安司／9・18田所廣泰／9・18廣瀬勝雄
		〔静岡付近の車中〕9・25三井甲之
	10月	〔東京〕10・13三井甲之／10・□廣瀬勝雄
	11月	〔東京〕11・3三井甲之／11・21三井甲之／11・22三井甲之
	11月1日	「聖徳太子三経義疏の国文学的研究（特に法華義疏の独創的内容を論ず）（3）」（『国語と国文学』6-11）
	11月29日	〔東京〕昭信会員、甲州の三井甲之を訪ねる
	12月	〔東京〕12・5三井甲之／12・18三井甲之
	12月1日	〔著述〕「聖徳太子三経義疏の国文学的研究（特に法華義疏の独創的内容を論ず）（4）」（『国語と国文学』6-12）
	12月4日	〔東京〕「明治天皇御集と国民教化」と題する連続講義が始まる
	12月7日	〔東京〕第一高等学校の教室で梅木紹男氏の追悼会開催。故人追慕のことばを述べる

昭3（1928）：29	6月	〔東京〕6・17重松鷹泰／6・22副島羊吉郎
	8月1日	〔著述〕「聖徳太子の人生観と政治思想―拾七条憲法思想考証―」（『教育心理研究』3-8）
	8月	〔徳島〕8・10副島羊吉郎／8・19新井兼吉
	9月	〔徳島〕この月より昭信会設立の準備に着手
	9月	〔徳島〕9・5新井兼吉／9・12新井兼吉／9・14新井兼吉／9・17副島羊吉郎／9・17新井兼吉／9・19重松鷹泰／9・21副島羊吉郎／9・24新井兼吉／9・27副島羊吉郎／9・27副島羊吉郎／9・27新井兼吉／9・27新井兼吉
	10月	〔岡山〕10・4副島羊吉郎／10・4新井兼吉
	10月8日	〔著述〕「弘法大師の体験過程と青年時代の教育論―弘法大師教育思想研究序説―」（『教育思潮研究』2-1）
	10月	〔東京〕10・11新井兼吉
	10月17日	〔東京〕神嘗祭のこの日、田所・新井・河野・市川と共に鎌倉を訪ねる
	10月	〔徳島〕10・28新井兼吉／10・30新井兼吉／10・31新井兼吉
	11月	〔徳島〕11・3副島羊吉郎／11・3副島羊吉郎／11・8新井兼吉／11・13副島羊吉郎／11・17新井兼吉／11・20副島羊吉郎
	12月1日	〔著述〕「聖徳太子の人生観と政治思想（下）―拾七条憲法思想考証―」（『教育心理研究』3-12）
	12月末	〔東京〕上京する
昭4（1929）：30	1月	〔東京〕1・1重松鷹泰／1・1廣瀬勝雄
	2月	〔東京〕2・16田所廣泰
	2月1日	〔著述〕「聖徳太子の人生宗教と国民精神」（『国語と国文学』6-2）
	2月3日	〔東京〕「瑞穂会」から分かれて「一高昭信会」が生まれ、その名称が定まる
	2月11日	〔東京〕山上御殿で瑞穂会主催の講演
	2月20日	〔東京〕東京帝国大学教育学談話会で「親鸞上人に於ける教育思想の展開」と題して講演
	3月	〔大洗〕3・7副島羊吉郎
		〔東京〕3・15新井兼吉宛
	3月1日	〔東京〕「聖徳太子の人生宗教と国民精神（続）」（『国語と国文学』6-3）
	3月5日	〔東京〕東京帝大の山上御殿で「日本教育思想開展の意義に対する考察」と題して講演
	3月5日	〔大洗〕昭信会会員の一高生とともに、水戸大洗に二泊の旅行
	3月27日	〔大阪〕大阪府河内磯長の太子廟に詣でるため昭信会会員と共に東京を出発
	3月28日	〔神戸〕欧州留学の教育学者入沢宗寿氏を見送る
	3月29日	〔徳島〕徳島へ帰省
	4月	〔徳島〕4・4荒瀬達也／4・19原理日本社／4・19田所廣泰／4・24新井兼吉／4・24副島羊吉郎／4・25廣瀬勝雄／4・26大塚英雄（原理日本社）／4・27副島羊吉郎／4・28重松鷹泰

黒上正一郎先生関係年譜

元号(西暦)：齢	月・日	関係記事
大15(1926)：27	10月20日	〔東京〕東京帝国大学文学部教育学教室で「聖徳太子の研究」と題して講演
	11月19日	〔東京〕慶応義塾で開催の『原理日本』創刊一周年記念講演会で「聖徳太子の東洋文化摂取と教化原理」と題して講演
	12月頃	〔東京〕梅木紹男、藤井虎雄両氏と共に始めて瑞穂会の創設者沼波瓊音先生を病床に見舞ふ
昭2(1927)：28	1月26日	〔徳島〕徳島県板野郡東光小学校における第六区教務研究会総会において「日本教化精神の綜合的考察と国民教育」と題して講演
	3月	〔徳島〕3・24大塚英雄
	4月	〔徳島〕4・15水野龍介／4・□水野龍介
	5月	〔徳島〕5・5大倉邦彦
	6月	〔徳島〕6・15大塚英雄
	9月	〔徳島〕9・2市川正司／9・3市川正司／9・21市川安司、河野稔、新井兼吉
	10月21日	〔東京〕東京帝国大学文学部教育学教室で「教育者としての最澄と空海」と題して講演
	12月	〔徳島〕12・29水野龍介
昭3(1928)：29	1月	〔徳島〕1・1水野龍介
	2月11日	〔著述〕瑞穂会『噫　瓊音沼波武夫先生』の中に故沼波瓊音先生の追悼録を執筆
	2月	〔東京〕水野龍介氏らと会合
	3月	〔徳島〕3・5水野龍介
	3月頃	〔徳島〕副島羊吉郎、春休みを利用した四国巡礼の途上、大倉邦彦氏の紹介で黒上正一郎先生を訪問
	4月4日	〔徳島〕一高卒業生の重松鷹泰を瑞穂会会員藤井信男らと共に小松島に迎へる
	4月10日	〔著述〕「教育思想家としての伝教大師」(『教育思潮研究』1-2)
	4月	〔徳島〕4・29副島羊吉郎
	5月5日	〔東京〕上京し、瑞穂会の朝風寮に居を定める
	5月5日	〔東京〕夜、東京帝大の史学会部会で研究発表
	5月	〔東京〕一高瑞穂会で「聖徳太子の人生観と日本文化」と題して連続講演を開始
	5月	〔東京〕5・7副島羊吉郎／5・7副島羊吉郎／5・11重松鷹泰／5・25大倉邦彦
	6月6日	〔東京〕東京高等師範学校内に大倉邦彦氏らが発起の日本教育思想研究会で「太子維摩経義疏」と題して講演
	6月13日	〔東京〕東京高等師範学校の日本教育思想研究会で「太子維摩経義疏」と題して講演

（六）黒上正一先生関係年譜

【凡例】

一、本年譜は、大正15年（1926）から昭和8年（1933）の期間について、黒上正一郎先生の動向・書簡・講演・著述および第一高等学校瑞穂会・昭信会、東京高等師範学校信和会などに関係する諸事項について、年月日順に並べたものである。

二、「元号（西暦）：齢」欄に「昭2（1927）：28」とある場合、昭和2年（1927）黒上先生は数へ年で28歳といふことを示す。

三、「関係記事」欄の表記法は下記の通りである。

1〔徳島〕〔東京〕などとあるのは、記事に記した内容が発生したときの黒上先生の所在を示してゐる。

2〔著述〕とあるのは、黒上先生の著述を示す。

3〔関連〕とあるのは、黒上先生不在もしくは歿後の出来事を示す。

4　人名もしくは団体名の前に付されている数字列は、黒上先生がその人もしくは団体に発出した書簡の日付けを示してゐる。例へば、「5・5大倉邦彦」とあるのは、5月5日に黒上先生から大倉邦彦に発出した書簡があることを示す。

四、本年譜作成にあたり依拠した資料は下記の通りである。

『噫 瓊音沼波武夫先生』（昭和3年2月・瑞穂会）

『教育心理研究』第3巻7号（昭和3年7月・東京高等師範学校心理学教室）

「新井兼吉歌集　第二集・第三集」（加納祐五氏蔵）

〈三井甲之関係資料〉（山梨県立文学館蔵）

『原理日本』（原理日本社）

第3巻1号（昭和2年1月）、第6巻9号（昭和5年10月）

『伊都之男建』（第一高等学校昭信会）

第3巻7号（昭和9年9月）、第4巻4号（昭和10年7月）

「昭信会日誌」・『向陵誌　第一巻』（昭和12年2月・第一高等学校寄宿寮）

「黒上正一郎先生の「略年譜」」・『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』（昭和44年10月復刊第二刷・国民文化研究会）

副島羊吉郎「わが生涯のともしび」・桑原暁一『続日本精神史鈔』（昭和45年12月・国民文化研究会）

長内俊平編『黒上正一郎先生のうたと消息』（昭和57年8月・国民文化研究会）

打越孝明「瑞穂会の結成および初期の活動に関する一考察―沼波瓊音、黒上正一郎、そして大倉邦彦―」・『大倉山論集』第49輯（平成15年3月・財団法人大倉精神文化研究所）

〔資料〕
「一高昭信会」初期活動記録
――「御製拝誦」と黒上正一郎先生ご逝去
前後の「昭信会日誌」を中心として――
非売品
平成十七年十一月五日発行
編集兼発行者
社団法人　国民文化研究会
理事長　上村和男
編集協力　香川亮二・鎹信弘
小柳志乃夫・打越孝明
坂本芳明・茅野輝章
野村亮
東京都渋谷区東一―一三―一―四〇二号
〒一五〇―〇〇一一
電話　〇三―五四六八―六二三〇
FAX　〇三―五四六八―一四七〇